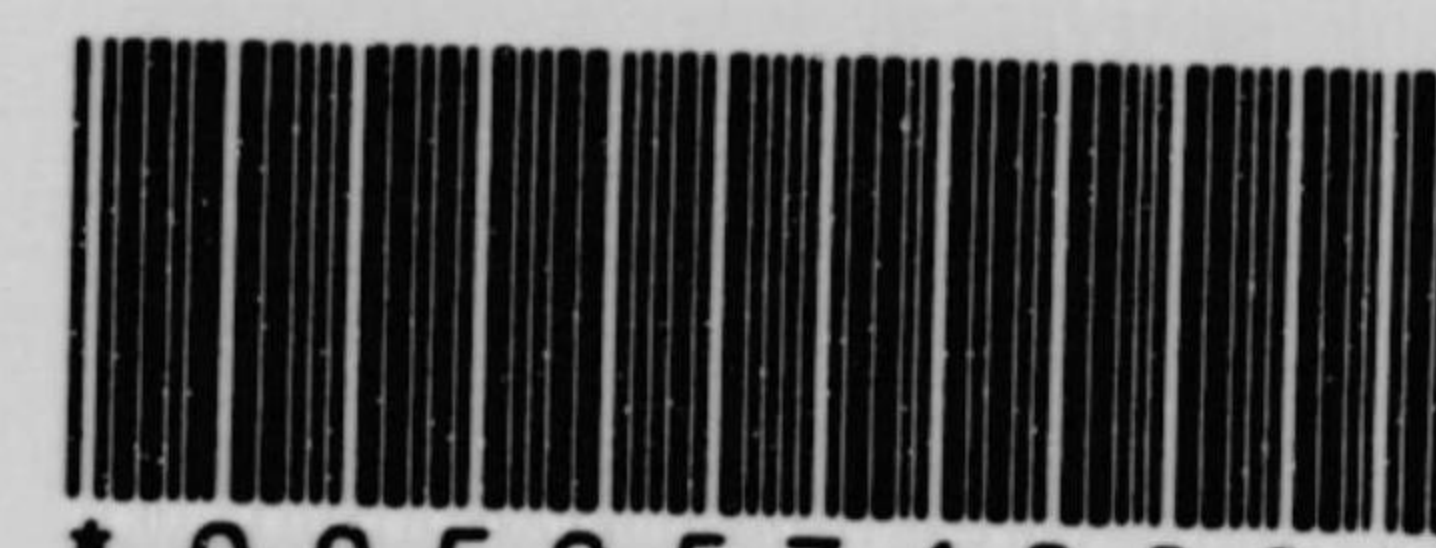


382.1
N45
⑦



0053574000

0053574-000

382.1-N45ウ

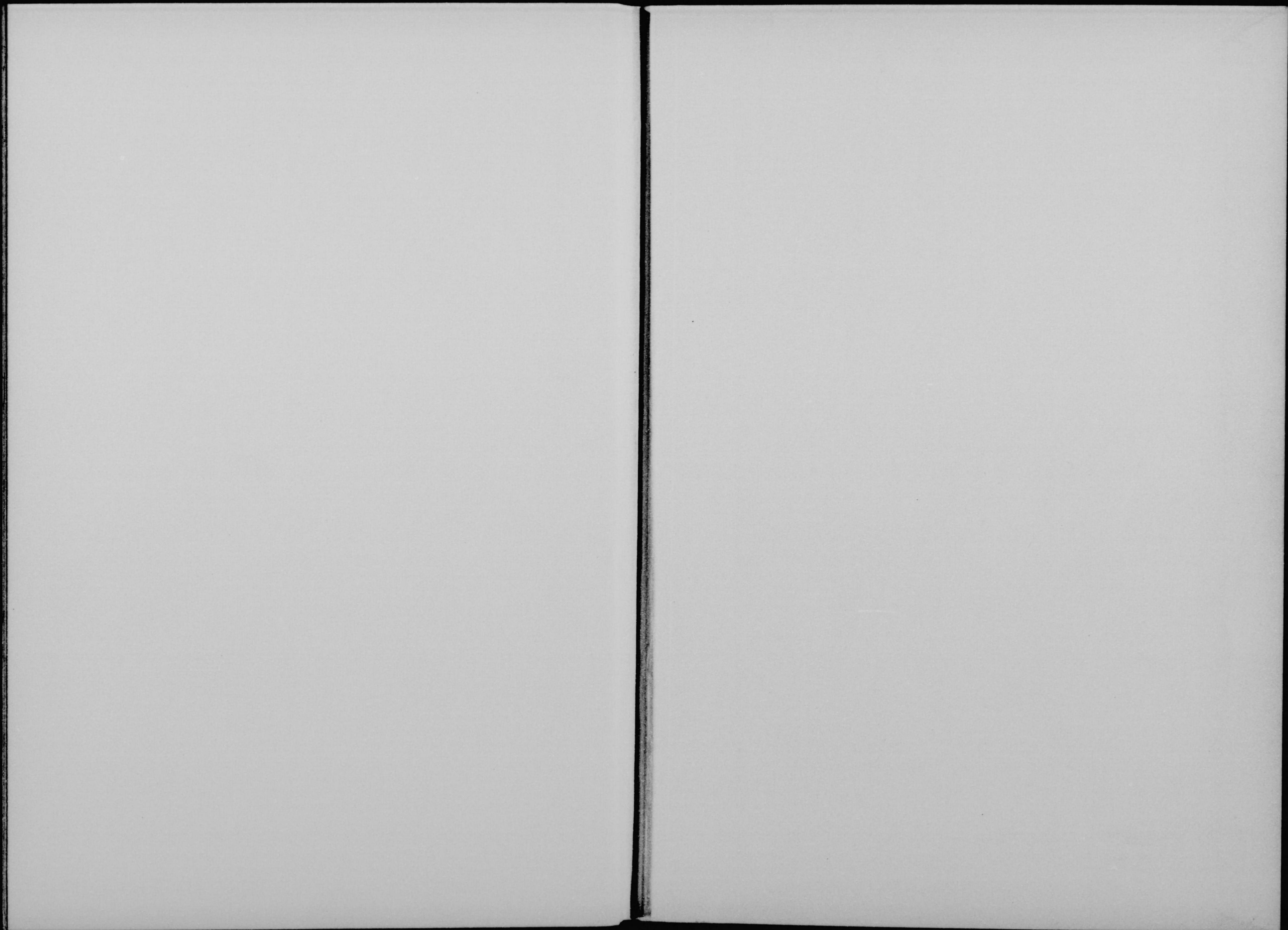
諸国風俗問状答

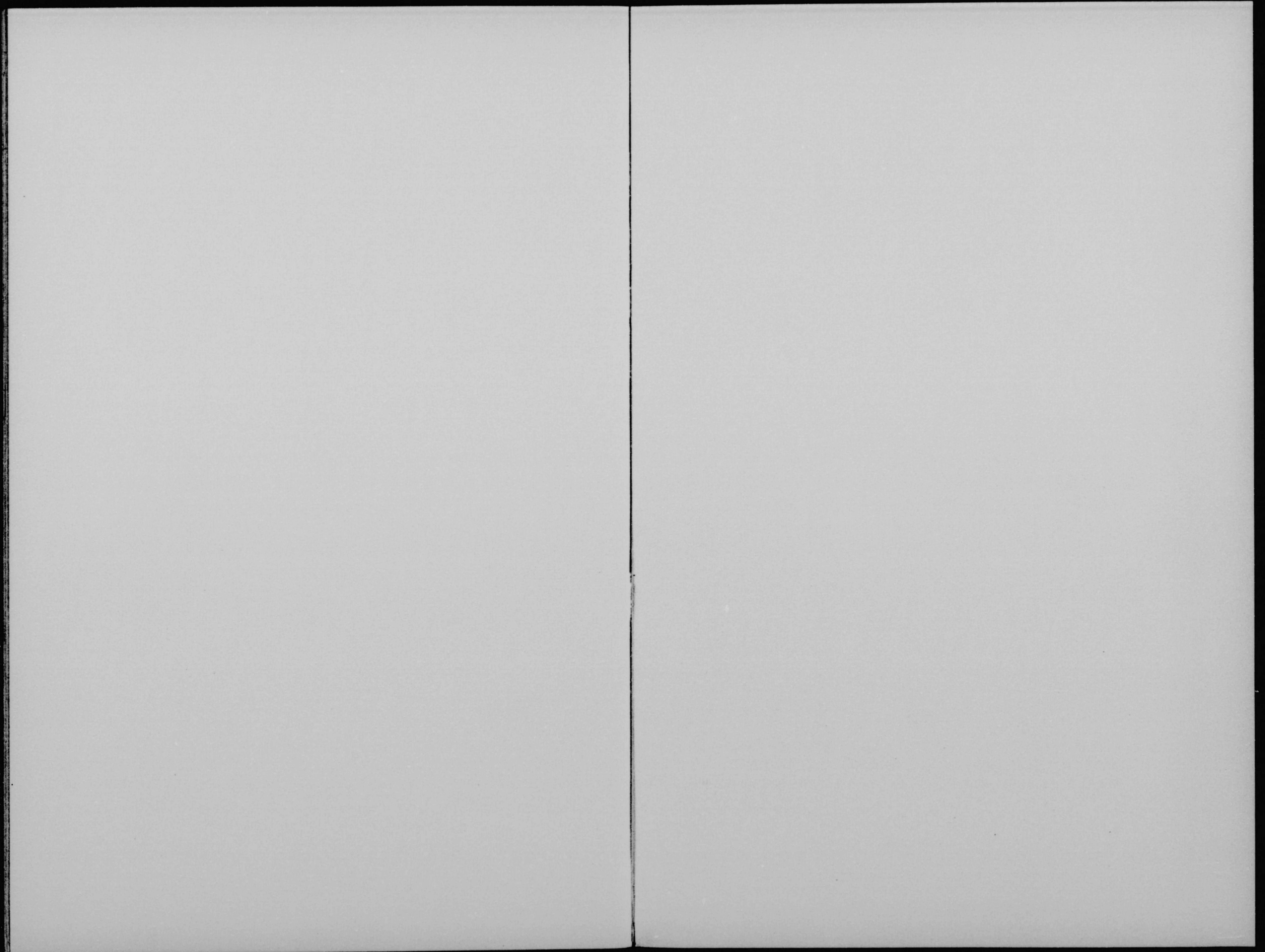
中山太郎・編

東洋堂

昭和17

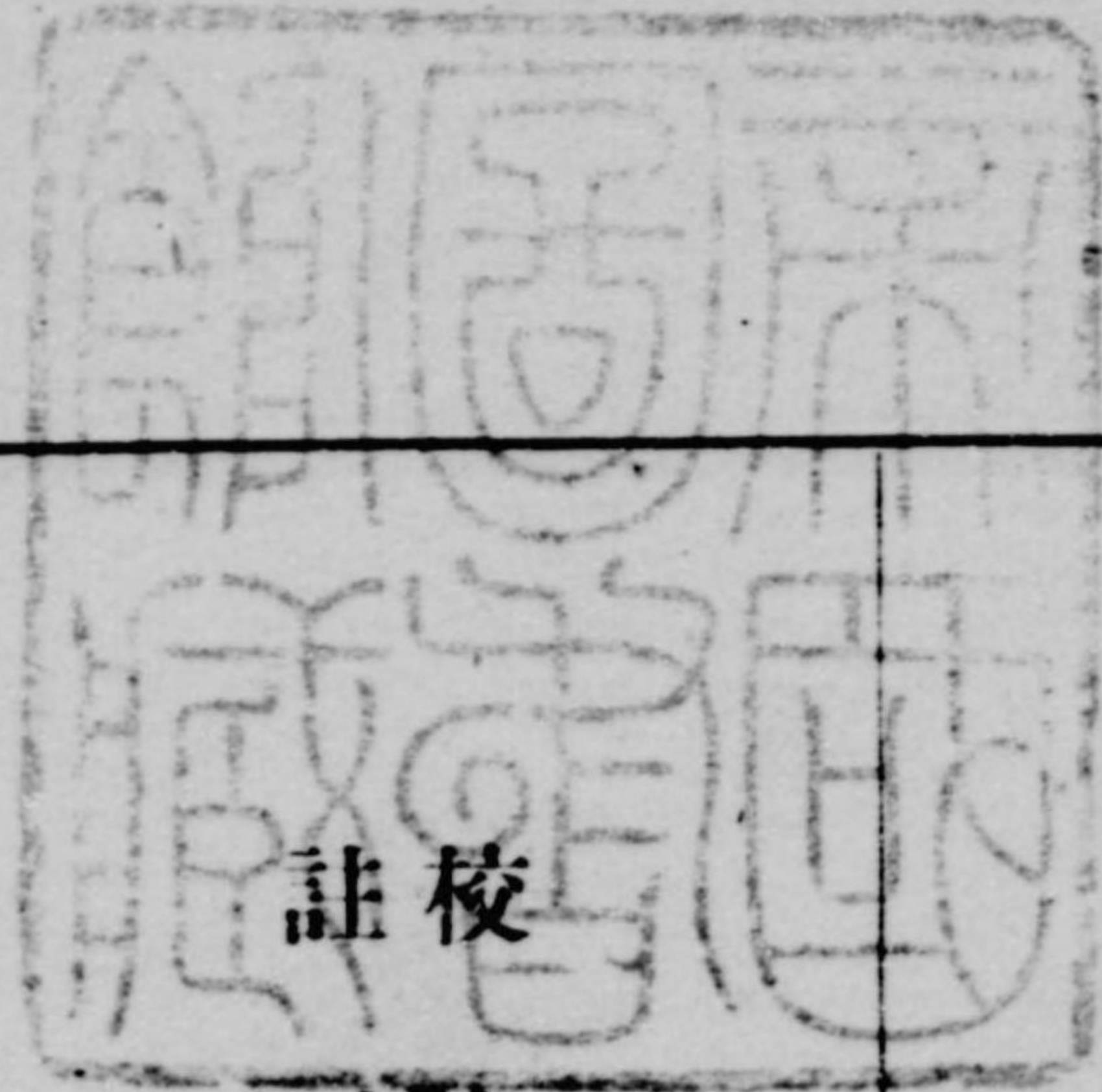
AIA





IT 7916

382.1
N457



中山太郎編著

諸國風俗問狀答

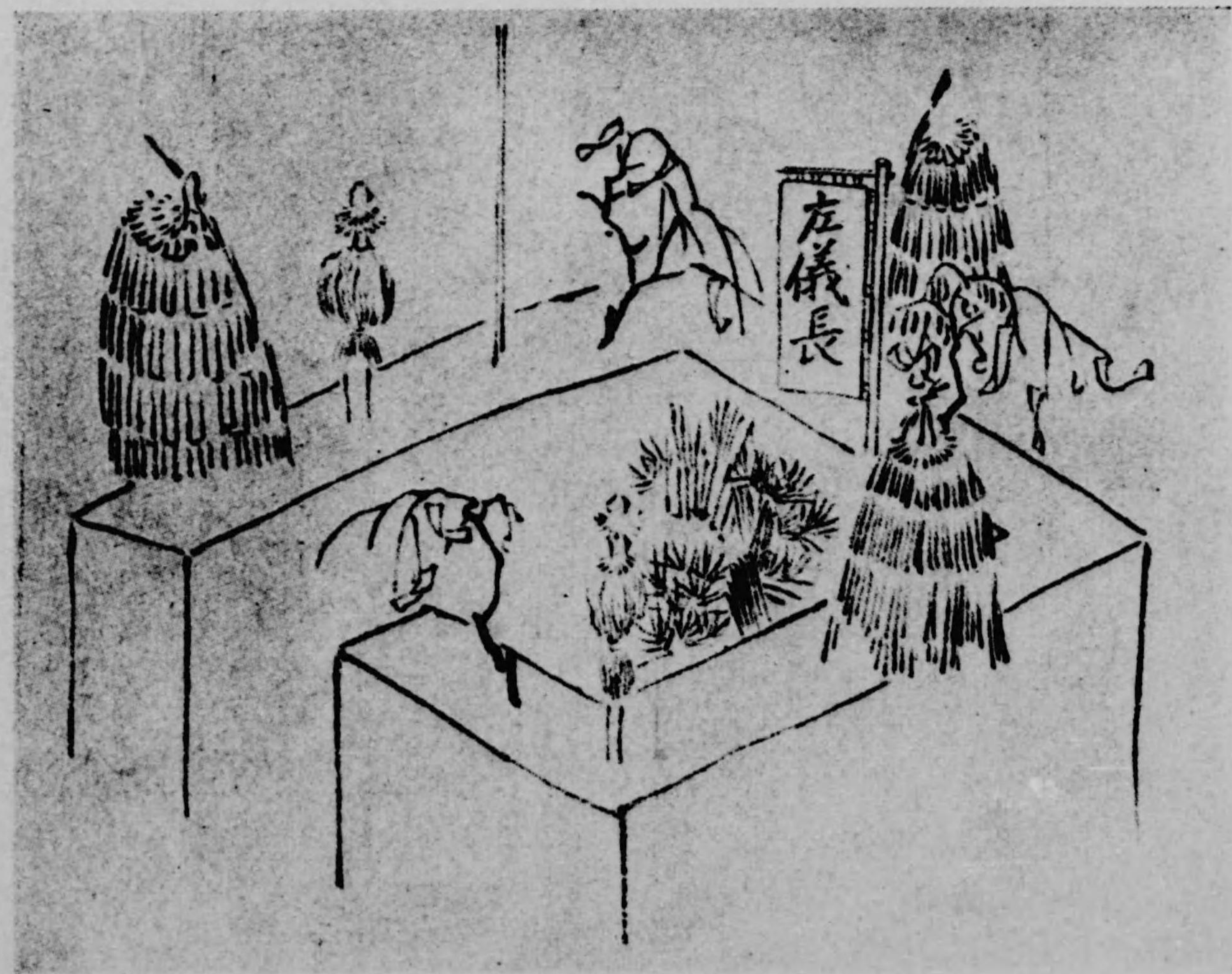
校註

東洋堂發行

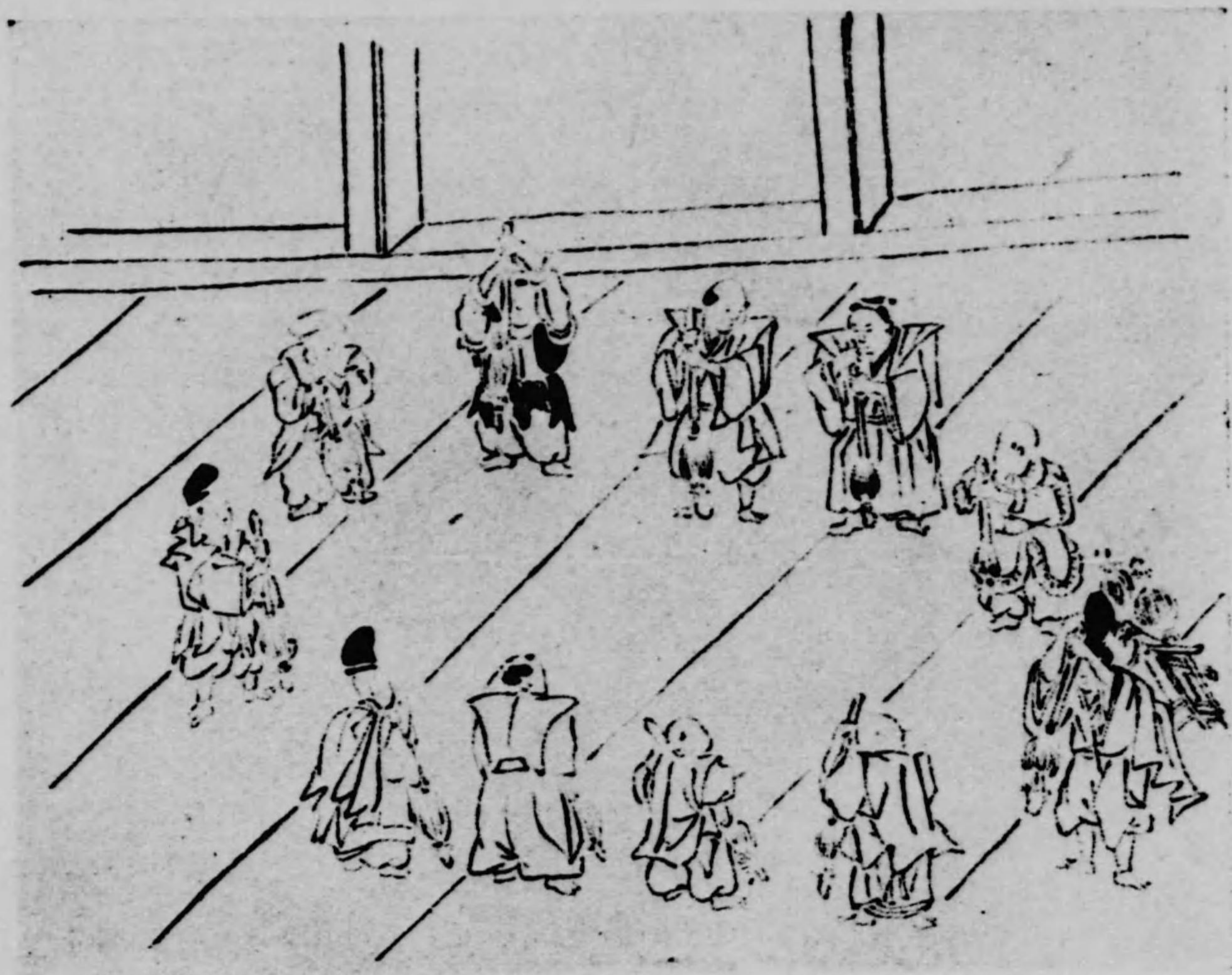




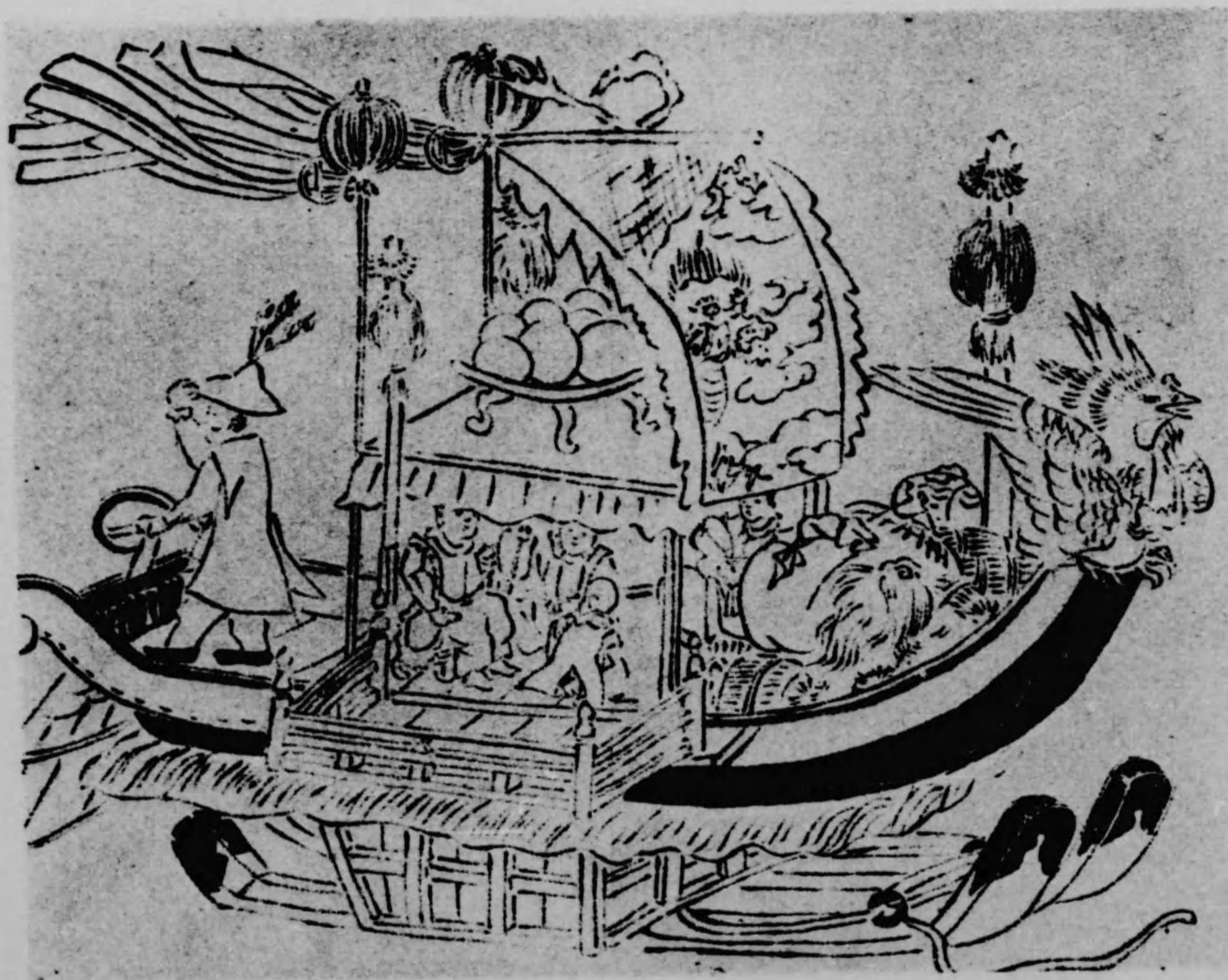
物語座頭(秋田)



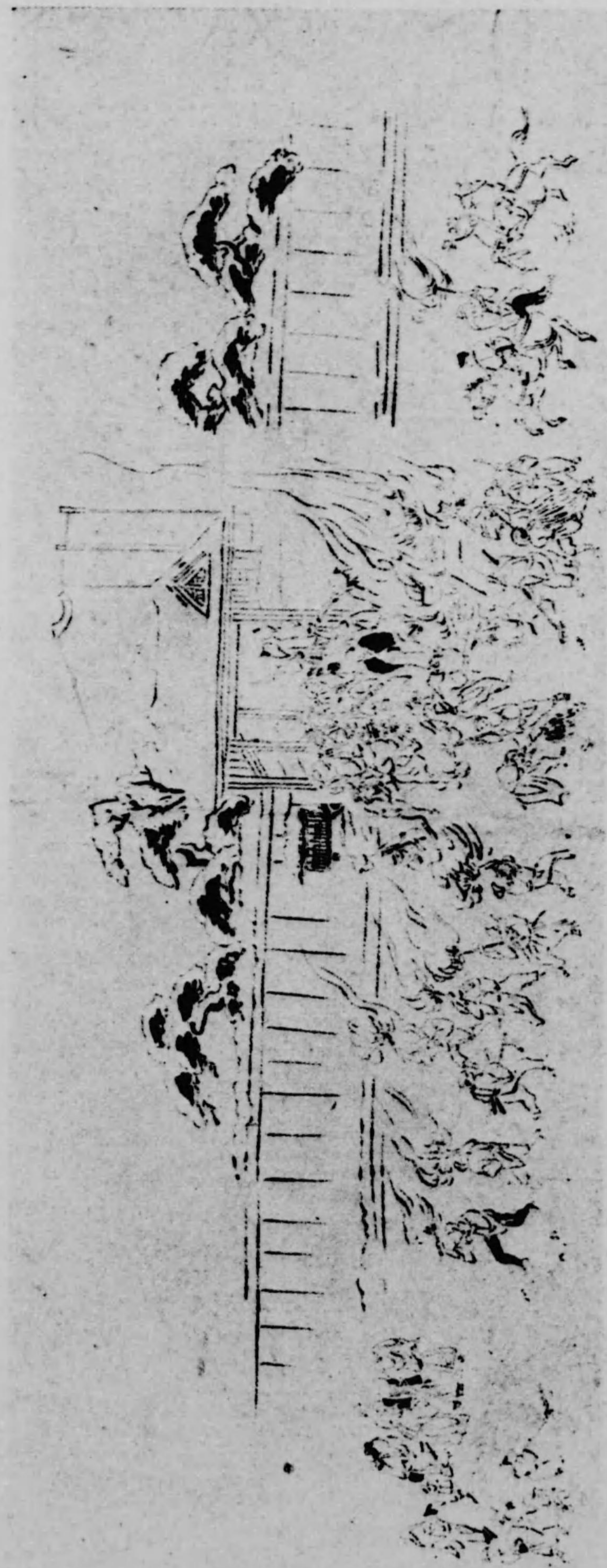
鎌倉の圖(秋田)



歳 の 神 祭 (秋田)



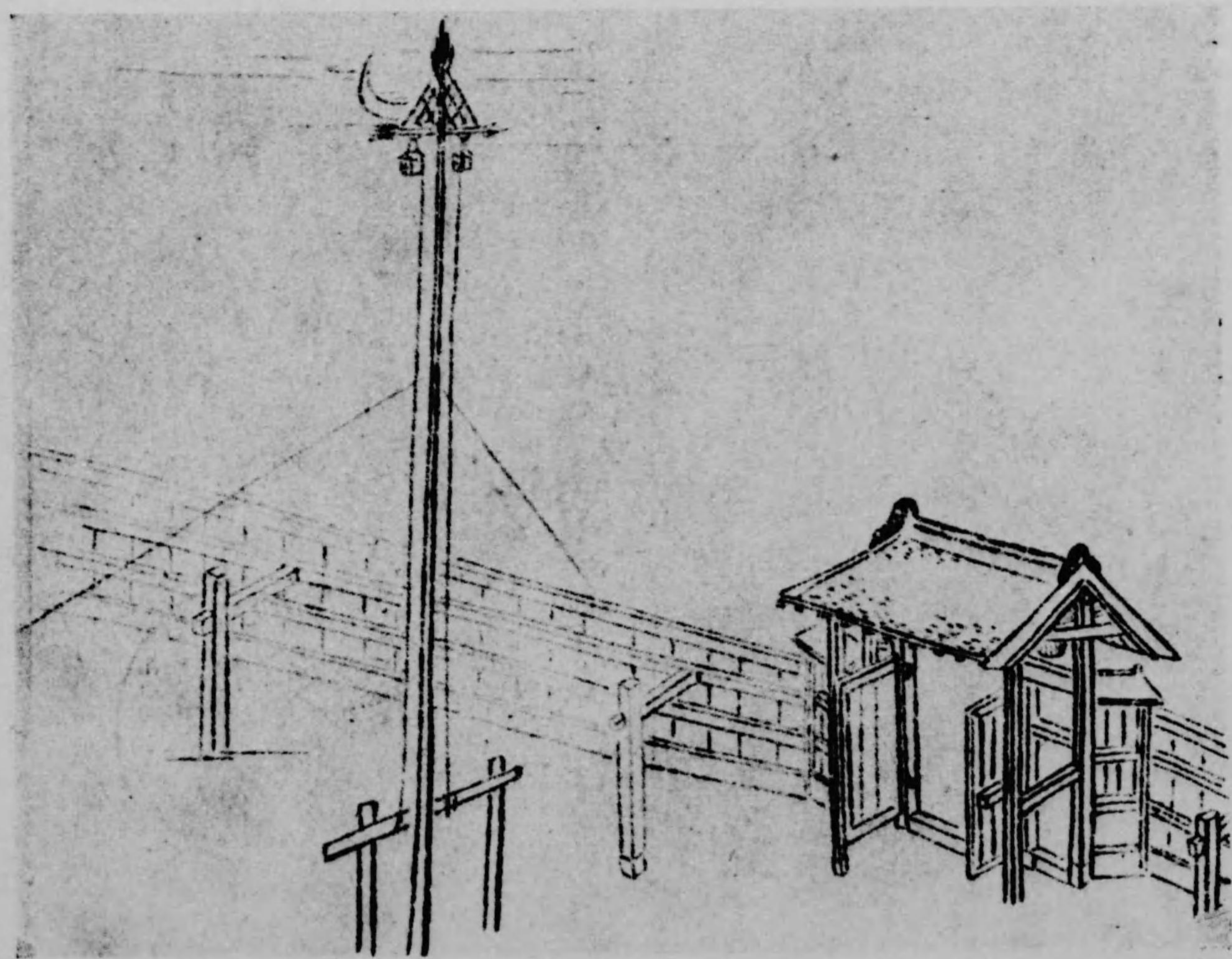
歳 の 神 祭 の 船 (秋田)



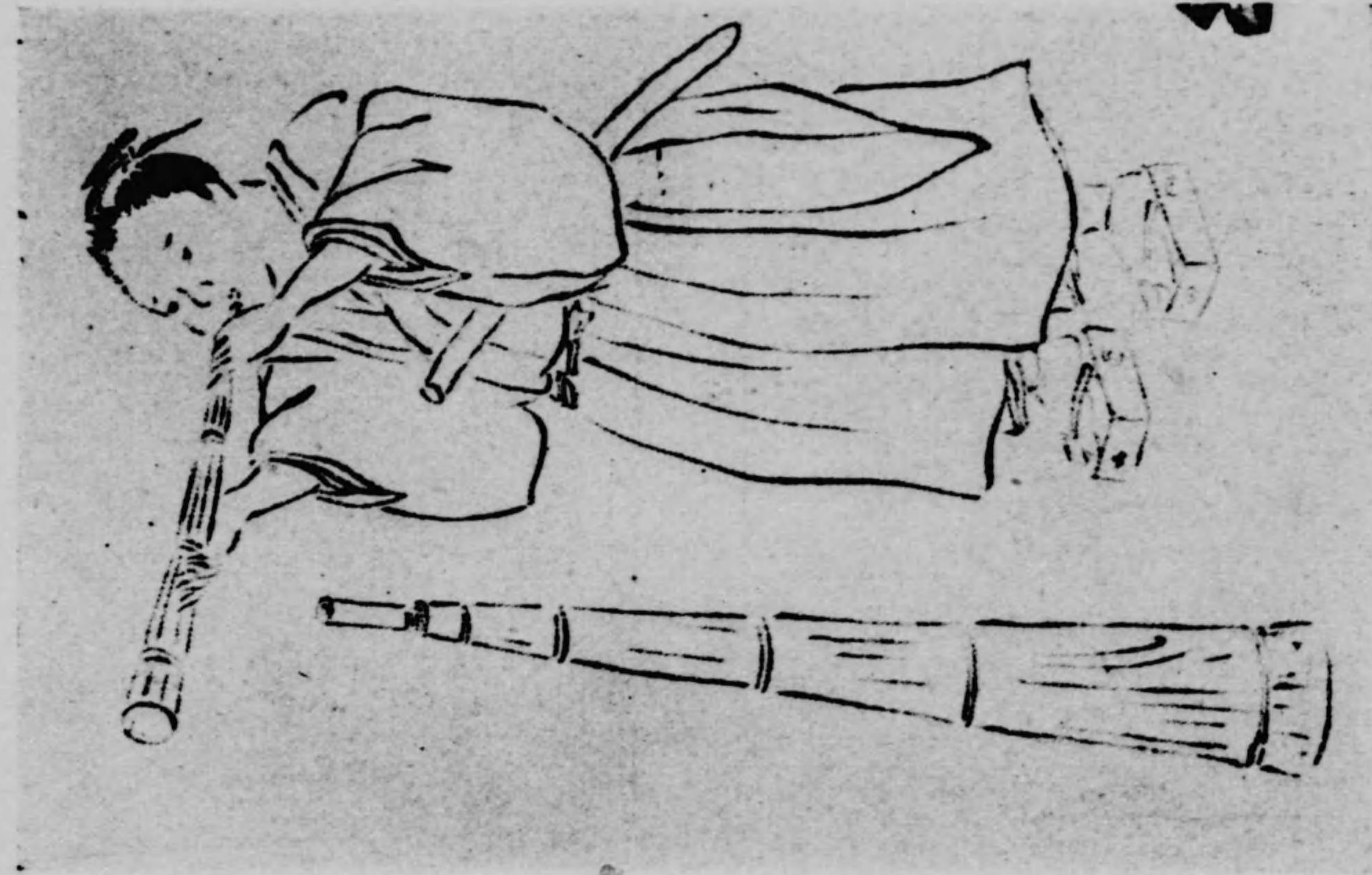
一 月 十 四 日 道 祖 神 祭 (秋 田)



萬 歳 (秋 田)



盆 の 高 燈 籠 (秋 田)



木 の ほ ら 吹 く 男 (秋 田)



歳 の 神 の 禿 倉 背 負 ふ 男 (秋 田)



本書を先づ異郷の學友

ニコライ・ネフスキー氏に御目にかけて候

944
101

▼大正四年の春であつた。私は或夜、本郷春木町二丁目の吉川古書籍店へ、例の如くぶらりと本を見ながら遊びに出かけた。店主の吉川玉次郎氏（商賣人仲間では、吉玉と呼んでゐた）は篤實な人で、私とはへボ将棋の好敵手、それに内室の梅子さんが、荊妻の生家と鯛鍋ぐらゐの中だと云ふし、其の上に私も同町内に住んで居たこともあるので、よく遊びに出かけて将棋を差したり、茶話に耽つたりしたものである。何でも同家には、平子鐸嶺君が學生時代に、長男の職の祝に鐘馗を描てくれたとかで、その掛物をよく自慢に見せたものである。

▼すると其の晩、番頭の福さん（後に獨立して醫學専門の富倉古書店を經營した）が、私の顔を見るなり「ロシアの留學生のお若い方ですが、二人づれでよく店へ買物に來られ、日本歴史と風俗に精しい人と交際をねがひたいと云ふて居りますが、中山さん、お友達になつてやりませんか」との事であつた。併し私は外國語が話せぬからダメだと云ふと、主人の吉川君が傍から「お二人とも日本語が上手で、どんな入組んだ話でも出來ます」との事に、それではと云ふので、幾日かの後に福さんの案内で出かけることゝした。

二
▼その宅は本郷駒込林町で、高村光太郎氏のところ二三軒先きで、植木屋さんの持家だといふ相當の建物で、そこにネフスキー氏と、コンラツト氏の二人が、奥州花巻在の生れだといふ女中を相手に生活して居たのである。かくて往復して居るうちに、ネ氏は露都の東洋語學校で、日本語と支那語を修め、學生時代に東京へ来て一週間ほど滞在した事もあり、學校の卒業論文は「李太白の人生觀」と云ふのだと話してくれ、且つその時はコ氏と一緒に日本の漢學先生に毎日來てもらつて、莊子の講義を聽いて居るとの事であつた。そして、私とネ氏の親みは、日を追ふて濃かになつたのである。

▼斯うして一年半を過ぎた、翌大正五年八月にネ氏はどこから耳にして來たか、茨城縣の安寺、持方といふ村落には古い風俗習慣が残つて居り、且つ其の村だけ通用する文字もあると云ふことゆゑ、是非そこへ旅行したいから、同行せよとのことであつた。私は酷暑の折ではあるし、殊に同地のこととは江戸期の好事家が二三の隨筆にやゝ誇大に記載したものとて、さしたる收穫もあるまじく考へたが、見るは法樂、聞くは道樂の程度で出かけたものである（此の紀行は「旅と傳説」二ノ三に掲載したので茲には省略する）。更に私とネ氏との交際は一段の親密を加へ、別項「解題」の條に記したやうな状態がつゞいたのである。

▼その間にネ氏の故國に革命騒ぎが起り、送金も斷絶し相當に迷惑を重ねたらしい。いつか此の事につきネ氏に尋ねると「故國に一人の伯母と一人の弟とがあつたが、昨今の國情を聞くと二人とも餓死したやうである」と、流石に暗然として語られたことがある。斯くて東京外國語學校のト、ロウキチ氏のお世話で、小

・樽高等商業學校の講師として赴任しアイヌ語を研究し、越えて大阪外國語學校に轉じ、こゝで琉球語と臺灣語を研究し、琉球へも臺灣へも二度づゝ渡航したものである。

▼大阪外語に在職中、于闐國の言語につき研究を發表せんと志し、その記録を持てるロシア人が北京に脱がれ居るとのこと、或年の夏休みに北京に赴き幾日かを経て歸阪したが、（後に京都帝大文學部の紀要として發行された）その事あつてから其筋の眼がネ氏の身の上に光るやうになり、遂にネ氏も歸國を決心する事となつたと見え、昭和四年かに十何年ぶりで故國の土を踏むたものではあるが、再びなつかしい日本へ來ることとは出來ぬやうになつてしまつた。

▼ネ氏には一人の忘れ形身があつた。わか子といふ美しい、そして聰明の麗人であつた。私の宅へも見え聖心女學院とやらへ通つてゐるとの事であつたが、數年前に父ネ氏の顔を——然も寫眞で見覺えた父の顔を臉に書きながら急逝した。ネ氏には此の外に大阪で儲けた女子があると聞いたが、どう成り行きしか詳しいことは知らぬ。

▼ネ氏からは、かれこれ十年も音信もなく、私から送つた雑誌や書籍も届いたのかどうか沙汰もない。そればかりか其の後のソ聯の國狀では、健在か否かそれすらも判然しない。従つて、斯うして本書をネ氏に捧げた處が、果してどこで讀んでくれるか、心元ない限りであるが、風俗問狀答に關する限り、私には忘れぬ憶ひ出であるので、敢て書きつけて自序の代りとした。

▽本書の成立に就いては、ほゞ解題で盡したので茲には省くが、原稿の檢索に關しては帝國圖書館の岡田
温氏を、更に淨寫に就いては中島政市氏、木原薰子氏を煩はした。また三井文庫主事岡百世氏、同庫員中井
信彦氏、元三井編纂主任柴謙太郎氏の御配慮に對しても、猶ほ損益を超越して本書の發行をお引受くださつ
た、東洋堂の龜井義雄氏にも、共に深く敬意を表する次第である。

昭和十七年秋、滿洲建國第十周年の慶祝飛行機の爆音を聴きつゝ、
本郷弓街の玄外書屋に於いて

中山太郎 識

凡 例

- 一、原典は總じて句讀點はなく、書きつゞけてあつたが、茲には讀みやすきよう句讀點を加へた。
- 一、原典には變體假名、又は片假名のもあつたが、總て是等は平假名とした。
- 一、郡村名は舊時のまゝとし、新町村制に由らぬとした。讀過の際注意を乞ふ。
- 一、原典中には、一項毎に「御答」と一行を立てたものもあつたが、茲では悉く省略した。
- 一、卷末にやゝ詳しい索引を附ける心組で居たが、遂に實現できず、讀者の高諒を乞ふ次第である。
- 一、校正には相當留意したが、猶ほ魯魚焉馬の誤りある事と想ふ。これも高諒を乞ふ次第である。

編 者 又 識

註校 諸國風俗問狀答 目次

解 題……………一

奥州秋田風俗問狀答……………三七

秋田六郡神佛之部……………三七

秋田 城下之部……………七六

奥州白川風俗問狀答……………一三七

三河吉田領風俗問狀答……………一八一

越後長岡領風俗問狀答……………二五九

大和高取藩風俗問狀答……………三二七

若狹小濱風俗問狀答……………三七一

丹後峯山領風俗問狀答……………四〇七

備後浦崎村風俗問狀答……………四五七

淡路國風俗問狀答……………四八九

阿波國風俗問狀答……………五四九

和歌山風俗問狀答……………六〇二

伊勢白子風俗問狀答……………六一七

陸奥國信夫郡伊達郡風俗問狀答……………六三五

天草風俗問狀答……………六四八

蒔萩邑風俗問狀答……………六六五

信樂庄多羅尾の村之風俗(附錄)……………六七九

目次畢

校註 諸國風俗問狀答

諸國風俗問狀答 解題

古今要覽稿の大著と同狀答

江戸幕府の奥書者屋代太郎弘賢が、幕命により「古今要覽稿」の大著に着手したのは、同書寛政十年九月附の凡例に「此書編集のまじし十餘年の前にあり」とあるので、概ね十代將軍家治の治世なる天明の頃、恰も弘賢の三十一二歳の交と見て差支ないやうである。

私は、こゝに弘賢の経歴を詳叙することは差控へるが、幕府の輕輩の家に生れた彼は、幼より書道を修め、漸く長じて本城附の書役となつたが、性來、國學を好み故實を愛し、瑠保己一の記室となり、松岡辰方に親炙し學問識見とも大に進み、寛政二年に儒官柴野栗山が、公命を以て近畿地方に出張するに随伴し、栗山の感化を受け平生の抱負せる思想を博め得る處が妙くなかつた。

越えて寛政五年に、執政松平定信に拔擢されて、幕府の右筆役となり、食祿も増加し、常に老中部屋に出入し

て、政治の機密をも見聞する身分にはなつた。

弘賢は小身ながらも平生儉素に努め、餘財を以て書籍を購ふに至樂とし、従つて博覽、且つ強記にして、上野東照宮の裏手なる不忍池畔の宮下（現今の花園町）に居を占め、輪池と號し不忍文庫の藏書印を用ひ、三棟の倉庫に充ちし典籍類、實に五萬餘冊の多數に達し、文名海内に高く、文通せる者三千名に及んだと傳へられてゐる。そして、弘賢は晩年に此の藏書を擧げて、阿波國の國守蜂須賀侯に賣却した。今に坊間稀に不忍文庫と阿波國文庫の兩藏書印のある書冊を見るが、これは同文庫本の散逸したものであることは言ふまでもない。

弘賢は、此の蘊蓄と此の學才とを以て、古今要覽稿の大著を企劃したのであるが、その史料や資材を文献記録に究めて、それを基調とすることは、當時の學風として、又、弘賢の學統として、實に止むを得ざる事ではあつたが、弘賢としては從來の此の囚はれたる編纂法から脱し、文献以外に眼前に現行する諸國の風俗や習禮を蒐集して、それを參酌按排して一生面を打開せんと欲し、こゝに諸國の藩儒や知人に對して風俗問狀を發送して、その答案を得たのが、即ち此の諸國風俗問狀答であつて、それは文化十年頃のことと屬し、弘賢が五十六七歳の時と推測されるのである。

地誌類の編纂流行と同狀答

元和に僱武した江戸期の昌平は、開府後七十年にして元祿文化を現出し、文物燦然として揚輝した。そして、

これより先き天下の諸大名のうち、古き風土記の進獻を追憶してか、藩領の事物を調査し、記録せしむることが頻りに行はれた。保科家は寛文年中に會津風土記を、淺野家は寛文二年に藝備國郡志を、水戸の徳川家は貞享二年に新編録倉志を、鳥取の池田家は元祿四年に作陽志を、筑前の黒田家は同十六年に筑前續風土記を、各々家臣に命じて編輯させた。然も此の事業は享保、寶曆と年代の降るに従ひ、一種の流行となり、奎運に恵まれた各藩は自ら着手するか、さうでなければ藩領の特志家が、好んで編纂するやうになつた。

然るに此の風土記的名勝舊蹟、及び天然資源の報告書やうなものでは、漸く満足せぬ世運に達し、更に百尺竿頭一步を進めて、信仰、風俗、人情、行事などの各般に涉り、人文學的にやゝ詳細にして且つ生氣ある記述を覓むるやうになり、延寶四年に京都の黒川道祐の日記記事が、同九年に名古屋玄醫の民間歳事記などが著作されたが、是等はまた前期の年中行事の舊套を踏襲したものであり、加之、北村季吟の菟藝泥赴を先驅とした著書も各地に刊行されたが、是等も名所案内記の埒外に出ることが少なかつたが、貞享三年に保科家で「奥州會津長江莊風俗帳」を書上げさせ、未見の書ではあるが、次で「磐城平藩風俗帳」が上申され（旅と傳説一一ノ一二）、同じ保科家では文化四年に「會津風俗帳」を進録させた。これ屋代弘賢が風俗問狀を諸國に發した文化十年に先つて、約七年前のことであつた。

弘賢の風俗問狀が、直接間接に是等の刺戟を受けた事は、言ふまでもないが、勿論、此の計劃に同門の石原正明や中山信名などの參與して居たことは想像される。そして、弘賢は此の問狀を木版に彫らせ小冊子やうの體裁

となし、恐らく全国の大小各藩の儒者、又は知人に宛て發送したのであらうと考へる。弘賢と特殊の關係にあつた阿波藩では、文化十四年十月附で、江戸詰の者より本藩へ問状を送つてゐるが、その文中に「藩の儒者より答へらるべく」云々と（猶これに就いては後段に詳記する）、明記してあるのでも知られるし、又、集つた答状を見ても秋田、白川、吉田、長岡、高取、淡路などの多數が、藩儒か又は藩儒たる有資格者であることから推察されるのである。

案外不成功に終つたらしい問状答

それでは、弘賢の問状に接した各藩では、舉つて答状を寄與したかと云ふに、その點は頗る明確を缺くのであるが、恐らく極めて少數ではなかつたかと想像されるのである。そして、此の不成功に終つた原因は、種々存した事であらうが、第一は、藩儒と云へば名教の學を司る者、それが斯うした利用厚生に交渉の薄い、閑問題として輕視した事。第二は、閑問題にせよ答状を書くとするれば、相當の知識も要すれば、相當の努力も拂はねばならぬ。下手な事をして江戸の奥儒者に笑はれるよりは、近寄らぬこそ賢明であると敬遠した事。第三は、弘賢の交友は概ね國學者といふ手合であつて、訓詁とか考證とかには興味を有するも、尙古的であるだけに斯かる眼前口頭の事象に就ては、常に蔑視し閑却して居たので答状を作ることは、寧ろ苦痛とした事などが數へられるのである。それと同時に「後言」の一件から推すと、當時の弘賢に對して反感を有して居た者も、決して絶無だとは云

へぬやうであつたから、旁々、充分の成績を收めることは、始めから期待できない事であつたかも知れぬ。

そして、斯うして寄與された問状答は、現在までに發見されたものは九ヶ所にしか過ぎぬのであるが（發見の次第は追記する）、此の僅少なる答状の脱稿した年月を調べると、秋田が最初で文化十一年十二月、三州吉田は文化十四年三月、長岡は同年八月、備後浦崎は文政元年六月といふ順序であつて、此の外の淡路、白川、高取などは明確を缺いてゐるが、これに因ると最も早いのは吉田の二ヶ月以内で（秋田は囑托の年月不明）、次の長岡は七ヶ月ほどで回答され、又、浦崎のやうに翌年になつたものも存してゐる。

然らば、少數ながらも集つた此の問状答が、弘賢の古今要覽稿の材料として役立つたかと云ふに、私の知る限りでは其の痕跡だに發見する事が出来ぬのである。これは第一の理由としては、如何にしても弘賢は文學學者である。計劃はしたもの、遂に整理する事が思ふに任せなかつた事。第二の理由は、聲名を海内は奔せながら集りがわるく、全く失敗に終つたので氣を腐らした事。第三の理由は、弘賢も年漸く老いて功を急ぎし事などが擧げられるのである。現に阿波藩民政資料（巻下）に據れば、弘賢の問状をそつくり其のまゝ各條項まで連載し、重役たちが何とか返事せざるまいと相談しながら、立ち消えになつてしまつたのは殘懷に堪えぬ。殊に此の問状答が關東八州、及び關西九州に發見されぬ事は、口惜しき極みであるが致し方ない。更に博索を續けたいと考へてゐる。

然るに是れと反對に、前記の如く弘賢の不忍文庫は、悉く阿波文庫に移讓されたのであるから（傳聞すれば、

不忍文庫本は、半数は東京の蜂須賀邸に置かれ、半数だけ阿波へ送られたと云ふ、その阿波國文庫の後身である徳島縣立光慶圖書館(日本文學大辭典)、に引繼がれて居るのではないかと、同館に向け一度ならず二度まで照會したが、有無ともに返辭さへなく、東京の蜂須賀邸を訪ねたがこれも要領を得ず、更に私は上野の帝國圖書館に「輪池書畫」があるので借覽して、片端から目を皿のやうにして探したが、遂に徒勞に終つたのは吾れながら笑止千萬の事であつた。

諸國風俗問答と私との因縁

大正四年の春三月に、ロシアから我國に留學したニコライ・ネフスキー氏に、私は不圖した事から知り合ひとなり、殆んど十日をき廿日をきに面談し厚誼を結ぶうち、私から當時、貴族院書記官長の柳田國男先生に御紹介申上げ、次で金田一京助氏、折口信夫氏を始め、故山中共古翁、故佐々木喜善氏などにも紹介し、ネ氏は是等の先哲や益友により、我國の言語や民俗を研究し見聞を弘めた。柳田先生を中心に、折口氏、ネ氏、私の四人で、月幾回か官舎に集り、播磨風土記や續日本紀の輪講を試みたのも此の頃であつた。

斯くて大正六年の春と記憶して居るが、或日、ネ氏は一冊のノートブックを私に示し、これは柳田先生から借覽した「秋田風俗問答」を自分で克明に謄寫したものであると語られた。これぞ私が始めて問答なるものゝ存在を知り、且つ此の書の民俗學的價値の多大なることを併せ知つたのである。それで私はネ氏と相談して、私

の友人である吉田米太郎氏を煩はして二部寫本させ、一部はネ氏に一部は私藏とした。後日、柳田先生の書齋で同書を拜見すると、それには令弟松岡映丘畫伯揮毫の極彩色の挿繪が數葉あつたので、私は「これは國寶物ですね」と申上げたことを今に記憶してゐる。そして、その折に井上頼園翁から借用し寫本させたいふ「三州吉田風俗問答」をも拜見した。

その後、私は柳田先生のお話にもとづき、紀州徳川家の南葵文庫に赴き「大和高取風俗問答」を閱覽謄寫し更にこれを底本として(私は生來の左利で、右手では巧みに執筆できぬため)、又も吉田米太郎氏に頼み二本を寫してもらひ、先例の如くネ氏と私とで一本づつ藏書とした。

それから間もなく、知人の宮正純氏が國學院大學を卒業し、新潟市の神宮奉齋會に奉職すると暇乞に見えられたとき、大西林五郎著の「帝國地名辭典」附録の地誌目錄越後の部に「北越月令、一名越後風俗問答」とあるが此の問答を寓目したらば知らせてくれるやうにと依頼した。其の後、宮氏からの來狀に、彌彦神社文庫?で「越後長岡風俗問答」を發見したが、折よく柳田先生が來瀉されたので此の事を申上げ、先生の御指圖を受け、取りあへず數十部を謄寫版となし、一部を贈呈すると送つてくれた。斯うして私の書架には秋田、高取、長岡の三答狀を飾ることが出來たので、そのうちに柳田先生にお願ひして、三州吉田領を寫本させて貰はうなどと考へて居ると、京都から發行の雜誌「藝文」に「若狭風俗問答」が引用してあるのに注意し、私は直ちに當時京大圖書館に在職の岩橋小彌太氏(現東大史料編纂官)にお頼みして一本を謄寫してもらひ、これも後に一本を寫さ

セネ氏に差上げたやうに記憶してゐる。

斯くて在る間に、丹後峯山に在住の學友毛呂清春氏より飛札あり、同地に天文七年の「丹後御檀家帳」及び「丹後峯山風俗問答」があるので、謄寫版で少し讀みにくいかな知らぬが贈呈すると送つてくれた。以上で秋田、高取、若狹、長岡、峯山の五答状を入手したので、私は例によつて一々必要の點をカードに採録して置いた。

然るに大正十二年九月一日の關東大震災火災に、私のさゝやかなる書齋も焼失し、私は妻と娘と三人して、僅にカードだけを持出したのみで、全く身を以て道るといふ有様で、多くもない藏書も、五種の問状答も、共に烏有に歸してしまつた。

併し、これ程の事で氣を腐らす私では無いので、少しも倦怠することなく、愈々民俗研究の一路を邁進した。されば徳孤ならず必らず隣ありの譬の如く、未見の學友ではあるが河本正義氏が、此の風俗問状答の博索に興味を有たれ、淡路問状答を「淡路草」のうちから發見したとて刊行され、更に越後長岡、三州吉田の二書を出版された。洵に吾が民俗學會のために慶賀すべき事である。

然るに蟻の思ひも天とやらで、私の念願の通じたものか、偶々「備後史壇」に同國沼隈郡の「浦崎村風俗問状答」の掲載されたのを見つけて、中央の學界に報告した(旅と傳説一〇ノ一)。これで私も前に若州小濱を後に備後浦崎の二答状を探し出した?次第であるが、やがて是れも未見のお方である安藤菊二氏が「篤宿雜記」のうちから「奥州白河風俗問状答」を検出され(傳記八ノ二)、こゝに燕雁去來約二十五年間に總計九種の問状答が學界に

浮かび揚つたのである。そして、民俗學の普及と篤學者の簇出には、猶、幾つかの問状答が見つかりさうにも想はれるが、それは亦た來賢に俟つこととして、ここに淺學菲才をも顧みず、九種だけの校註を試みるとした。

此の項を終るに際し、猶、附記すべき一事がある。それは鴻儒菅茶山編著の「備後福山風俗問状答」の有無の件である。私は、曩に此の事を柳田先生から承つて居るし、現に「託宣と祭」の記事中にも「備後鞆津の祇園社の祭云々。之を尸と申候と風俗問状答書にも見えて居る」と記されてあるので(郷土研究一ノ三)、これは必らず柳田先生が内閣書記官として記録課長御在任中(自明治四十三年六月二十二日至大正三年四月十三日)に、秋田問状答と一緒に内閣文庫本を披閱なされたものと考へたので、私は本年六月同課に赴き、係官山田量一氏を煩はして、幾回となく目錄を調べてもらひ、自分も何回となく尋ねたが、遂に檢出する事の出来なかつたのは、此の上もなき遺憾のことである。そこで私は、更に備後史壇の主宰者で且つ郷土史家として高名の得能正通氏に照會したが、全く知らぬとの事であつた。しかし、茶山に此の著述ありしと思はれることは、柳田先生の引用の外に、八代國治等の編纂せる「國史大辭典」の茶山の條に著書の一つとして「風俗答書」の名が擧げてある點からも疑ひない。果して然らば福山問状答、どこへ姿を隠してしまつたか、さりとは殘懷の事である。

奥州秋田風俗問状答

秋田藩の儒官那珂通博の編著せるものであるが、幸ひ通博の自筆本(本文四冊、外に附圖一冊)が内閣文庫に存在

するので、それを底本とし、別に大正十二年四月山方泰治氏編輯出版の「秋田人物傳」附録「羽州風俗問答」、及び大正十三年四月に京都の田中俊次氏が秋田で採集し、「郷土趣味」第五十二號として發行した「秋田風俗問答」を参照した。因に郷土趣味の問答には、おぼけなくも私が解題やうなものを書いてゐる。憶へば問答と私との關係も、また久しいかなと言ひたいのである。

那珂通博の經歷に就いては、秋田出身の學友鷲尾義直氏より、「古今秋田英名録」卷下に、右の如く記載しある旨の示教に接した。敢て同氏に謝意を表する次第である。

那珂碧峰。名は通博、字は公雅、通稱長左衛門、玄誦堂、左右宜齋、鶴峰等の別號あり。又俳號は如琴と云ふ。書は濃墨筆力奔放にして端正を失はず、滄洲(益戸)の書は名品にして、碧峰の書は絶品と稱さる。碧峰は學問才能の外有能の材なりしも、僅に明德館の儒官となりし外、終生藩吏にならず、夫れは祖先の采女は所謂秋田騷動の張本人たりし汚點より、他の誤解猜疑を避け、一生佯狂を守りしとの事なり。

碧峰は元鶴峰と號し、佐竹義和公より、碧の一字を賜はりて後、碧峰と稱せりと。學問に熱心にして世事に疎く、自ら屋根を葺くに上方より葺き、降雨により室内を河海にせしとの傳説あり。又佯狂の餘に出でたるやを知らず。失敗せる政治家の子孫として、處世の苦心を察すべきなり。文化十四年二月五日歿す。

然るに茲に氣の毒な問題が存してゐる。その事を書けば私が物識りぶるやうであり、書かねば物識らずのやうに思はれ、洵に以て心苦しき次第ではあるが、學問のためと觀念の眼を閉ぢ敢て記述することとした。それは他

事でもなく那珂通博が同苗の那珂通高と混同され、飛んでもなき誤謬を傳へられて居る事である。秋田縣横手町の故深澤多市氏の如きもその一人であつて、校訂の「秋田叢書」第三卷所收の「六郡祭事記」の解題に於いて、實に左の如き誤記を掲げてゐる。曰く、

本書(六郡祭事記)は、著者と其の年代を詳にせず、秋田圖書館本の風俗問答の附録になつてゐるが、果して同時代のものなるや否やも明かでない。内閣文庫にある秋田風俗問答は、那珂通博の筆になつて居るとの事である。然るに那珂氏は明治年代の人である事から考ふると、菅江眞澄翁が其の著、雪の出羽路(私註、文化十一年五月脱稿)に、處々六郡祭事記を引用せるなどより見て、その年代に相違あり云々。

これは明白に通博と通高とを混同した深澤氏の千慮の一失であつた。即ち通高は羽後大館の藩士で、通稱を梧樓と稱し、明治政府に仕へ、明治十二年五月に歿してゐる(日本人名辭書)。有名なる東京高師教授の那珂通世の先考である。深澤氏は此の通高と通博とを混同したのであつた。同じ秋田縣に生れ、且つ學問に忠實であつた同氏にして此の過失あり、他の一箕斗屑の輩が誤解するのは、寧ろ當然とも云ふべきである。

屋代弘賢が、如何なる緣故で問答を那珂通博に寄せたか、それは判然せぬ。恐らく兩人とも筆道に精しかつたので、文通でもして居たのかも知れぬ。跋文に依囑の事は見えるが、關係に就いては少しも觸れる處がない。それと同時に何年頃に依囑したかも判然せぬが、同じ跋文に文化十一年十二月に脱稿せし事が記してあるので、凡その見當が附くと同時に、此の紀年により弘賢が問答を發したことが、從來の文化十四年説よりも、五六年以前

に溯ることが出来るのである。その意味に於いて、此の跋文は注意すべきものがある。
 秋田問狀答は、通博の自記に由ると「やつがれが犬馬のとしの古稀に近より候まで、見もし聞もしつる事の多く候」と云ふてゐるが（跋文の一節）、果して左様であつたか多少の疑ひなきを得ぬ。矢張り他の多くの問狀答に同じく、實地について見たものよりは、他人から聞いたことが大部分を占めて居るやうに考へられる。但し書物から抽出した句ひは極めて少く、その點に學價値が存するのである。猶、書き落したが、自記の「古稀に近より」云々とあるので、此の問狀答が通博の六十七八歳の著述で、その歿年は三年後ゆゑ、ほど七十歳位と想像されるのである。

奥州白川風俗問狀答

伊勢桑名の藩士駒井乗郵の自筆本が、帝國圖書館所藏の「篤宿雜記」第二百九十八に收録されて居るので、それを底本とした。因に、奥州白川の風俗を、山河二百里を隔てた伊勢桑名の者が述作するとは、如何にも腑に落ちぬやうだが、これは白川侯が此の交に桑名へ轉封した事を知れば釋然する。

著者乗郵の事歴に就ては、「桑名郡人名志」がやゝ詳しいので、少しく長文の嫌ひあるも、左に要點だけを抄録する。

駒井篤宿、名は乗郵、字は君聚、忠兵衛と稱す。篤宿は其の號、又春院、梅軒、老叟の諸號あり。桑名藩士田

中忠右衛門の男にして、同藩士駒井氏に養はれて其の後を襲ぐ、累遷して奉行となり、再び祿米を加増せられて郡代となる。文政六年封を桑名に移すに當り、先づ發して庶務を經理す、鐵砲頭となりし時、志摩國の窮民蜂起せしかば、命を受けて衆を率ゐて四日市に次し、幕府に稟して進止せり。七十九歳にして大目付となり、藩主の東觀に扈從して儀仗を護衛せり。江戸に在りて奉行たりしが、適々大夫員を缺きしを以て、其の事務を權攝せり。年老いたるを以て辭して免さる。その職にありしこと定邦公より定信翁、定永、定和公を経て猷公に至るまで、すべて五世六十八年の久しきに及べり。弘化三年正月二十二日歿す。享年八十一。人となり質懿強記にして、儉約己を持し、博覽古今に涉れり。尤も詩歌俳諧に長じ、本朝の野乘戰記に精し。白川に在りし日廣瀬蒙齋、余吾北門、成田竹軒、横井藤馬等と共に、風土記○白川風土記の編輯を命ぜらる。其の後又定信公の遺事を撰するに與れり。平素手に筆を釋てず、中古以來の事實、先輩の著書、侯家の事跡、藩士の逸話、一篇の文章、一首の和歌に至るまで、目に觸るゝに従ひ、聊かも漏す事なく手寫して、遂に數百卷に及ぶ、題して篤宿雜記といへり云々。男天死し、女は南合義路に適せしかば、重倫○外孫號晚翠を養ひて嗣とせしに、亦先ちて歿せり。因りて其の弟重周號半林を養ひて後を嗣がしむ云々（以上、大正十年九月教育會發行本）。猶、桑名市役所に照會せし處、明治政府に仕へ大藤省參事官たりし駒井重格は乗郵の子孫にして、現代議士駒井重次氏は其の後なりとある。さればにや此の篤宿雜記七百卷は、明治三十六年十月を以て駒井家より帝國圖書館に寄贈したものであつて、これに由り散逸を遁れ、問狀答を傳へたことは、駒井家の美譽に對し、民俗學徒として深謝

する次第である(中山追記)。

これに由れば、乗郵は明和二年に生れ、白川と江戸の間を幾回か往復し、且つ好學の志厚かりしを以て、自然に塙檢校の和學所などへも出入し、屋代弘賢とも面識のあつた事は、篤宿雜記(第三十)の「和歌三神考」の頭註に、左の如く記載されて居るのでも知る事が出来る。

乗郵云、和歌三神ト云初シトハ、タシカナル據モナキトニヤ、塙檢校保己一ガ群書類聚著述校合ノ席ニテ屋代弘賢、稻山平藏、宮路庄三ナド、頗ル古學ノ輩、コノ三神ノ論ニ及シガ、タシカナル證モ知レガタカリシ、予モ此節其席ニ居タリシガ、予ガ如キマデ穿鑿ノ事ヲ言^不ナリ、サレバ貞丈^{伊勢氏}ノ説モ宜ナルカナ、

然るに弘賢は風俗問狀を乗郵に寄せずして、同じ白川藩の田口月堂といふ者に托したのであるが、月堂は自分がその器にあらざる事を知りしものか、これを乗村に依頼したので、乗郵は更に同好の人々と談合して答狀を作成したのである(別項、弘賢の依頼狀、及び乗郵の識語参照)。そして、かく弘賢が面識あるにもかゝらず、答狀を乗郵に宛めずして月堂に托したのは、月堂と特に懇親であつたか、又は月堂の地位や在府等の關係からと察せられる。そして、月堂の爲人に就いては、「桑名人物傳」に相當詳記してあるが、今は埒外に出るので省略した。猶此の答狀は文政六年三月に松平定永が、白川から桑名へ轉封せぬ以前に乗郵が執筆したことは疑ひないが、しかし、その年時に就いては明確を缺いてゐる。乗村は八十一歳の天壽には恵まれて居るが、その反對に家庭は寂しく、嫡男に夭く死なれ、更に嗣子の外孫にも先立たれたとは、誠に同情に堪えぬ次第である。

そして、白川問狀答は識語にもある如く、乗郵が中心となり荒物屋嘉兵衛、安藤辰三郎外、名の者に諮問して資料を集め、それを整理したものだけに、各事項とも親切に且つ克明に記述してある。その點が此の問狀答の高く評價されてよいと信じてゐる。たゞ強ひて難を言へば、問者が江戸であり白川が江戸に近い上に、乗郵始め各人に江戸の知識に富んで居るので、やゝともすると「江戸と同じ」とか、又は「江戸に變らず」と江戸通を振舞ふ點である。

三州吉田風俗問狀答

御田國男先生が、井上頼園翁の書架にあつた山崎美成の手澤本を、河本正義氏が刊行したものを底本とした。此の答狀は、吉田(現在の豊橋)藩の中山美石が編著したものであるが、河本氏の蒐集作成された略年譜、及び墓碑銘に據り、美石の經歷を叙すると概ね次の如くである。

中山美石、安永四年十月十日、吉田城内土手町に生る、父は彌藤次清勝、母は東浦氏、初め爲藏と稱し、二十四歳に郷同心に被召抱、彌助と名を改む。文化十年十一月新居關下改に取立られ、同十三年十一月に風俗問狀答を執筆すべきやう藩命あり、翌十四年二月に脱稿した、時に四十三歳。次で同年五月に藩費時習館の教授となる。後に大阪在番及び京都御錠番を勤め歸藩し、天保十四年八月六日吉田にて歿す、享年六十九歳。城内の悟眞寺に葬る、法名、英心院實譽亮珉居士。

美石、國學を好み、本居太平の弟子となり、又、大田元貞に随ひ漢籍を修め、殊に歌學に通じ詠歌に巧みにて主君の爲に後撰集の註釋を記して献進した事があり。且つ吏務にも長じ、藩主の信頼も厚かつた。配橋本氏との間に男彌藤次豊村を儲けたが夭死したので、孫の仙太郎繁樹が家を繼いだ。

美石も乗郵と同じく、世子に先立たれて孫にかゝるとは、寂しかつた家庭のやうに想はれる。

此の答状は美石が、努めて文献からの轉載や抄録を避け、専ら目睹耳聞せる事實を、巧まず飾らず有るがまゝに記述してあるので、先人の遺産に乏しい民俗學にとつては、こよなき資料の集積と云ふべきである。たゞ望蜀の慾を云へば、美石は武家であつただけに、いかほど農民の生活に理解を有つたとしても、それは要するに傍觀者であつて體驗者でない。且つ國學の造詣が深かつた爲めか、その學問がちよい／＼と顔を出すのが氣になるのは、獨り私だけの僻目ではあるまゝ。

越後長岡風俗問答

宮正純氏の採集謄寫版に附したる長岡問答は、既記の如く震災のために焼失したので、こゝには河本正義氏が校訂複刻した新潟圖書館本を底本とし、これに此の答状を編著した秋山多門太の態度に、多少の飽きたらぬ感情を有せる小泉氏計の北越月令(内閣文庫本)を参照した。

編著者たる秋山多門太の事歴に就いては、「北越名流遺芳」から左に摘録する。

秋山景山、名は朋信、字は子交、通稱多門太、景山は其號、致仕の後、醉翁と改む。長岡牧野侯の世臣也。幼にして殊稟あり、志學に篤く、父の祿を襲ぎ、江戸に祇役し、服部南郭の義子仲英に學ぶ。

景山師に嚴事すと雖も、甚だ師説を墨守せず、専ら砥行達用を以て要とす。文化五年長岡藩々學を創建し、名けて崇徳館と云ふ。之が教授を命ぜらる云々。尋て崇徳都講となり、物頭班に進み、數次の加俸に依りて、天保二年に祿百石となる云々。

景山眉間に大瘤あり、眼光四射、一見して其庸人に非ざるを知るべし。性直方、言動苟もせず、衆其嚴に憚る。然れども講論明快なるを以て、聽者樂みて疲るゝを忘ると云ふ。居常書を抄せず、而も古今を徴する囊底を探るが如し云々。天保十年八月二十六日病歿す。壽八十二。大工町本妙寺に葬り、先塋に附す。配辰巳氏、二男一女あり。長は天す、次は即ち友虎、古く父に肖たり、女辰教祇に適す、婦徳あり。

そして、此の答状も秋田、白川のその如く、筆者が儒者であり武家であつた爲めに、やゝ隔靴搔痒の憾あるは止むを得ぬが、殊に長岡のは「村長どもより書上たる旨を、秋山ぬしに撰ませられし」とある如く、多少とも物足らぬ心地がする。換言すれば、全體を通じて、所謂、通り一遍の素描にしか過ぎぬと考へざるを得ぬのである。されば此の答状に不満であつた同藩の小泉氏計が、二十年後の嘉永二年に「北越月令」を編著したのも、又、故あるかなと思はざるを得ぬのである。

併しながら、それは榮耀の餅の皮であつて、兎に角これだけでも記録されたればこそ、百年後の今日に於いて

在りし昔を偲ぶことが出来るのである。猶「北越月令」と「越後浦佐村年中行事」の兩書は、共に風俗問狀に刺戟されて著作したものであるが、こゝでは柵外に出るので、これ以上は觸れぬこととした。

大和高取風俗問狀答

南葵文庫の圖書は、大正十二年の震災後に、東大附屬圖書館に引繼がれたと聞いて居たので、今回、此の校註を作るため、再び南葵本の「大和高取風俗問狀答」を閲覽し底本になさんと、同館に關敬吾氏を訪ね事情を語ると、同氏は多忙であるにも拘らず、早速、明治四十年作成の南葵文庫目録と、大正十四年に東大圖書館に引繼ぐため編纂の圖書目録とに就き、入念克明に檢索してくださつたが、如何なる次第にや目的の大和高取問狀答は、兩目録にもこれを逸してゐるのである。

併し、同書が南葵文庫に在つたことは、現に同文庫の主事であつた高木文氏が、大正六年一月發行の郷土研究(四ノ一〇)に、左の如く寄稿されて居るので明白である。

大和高取の風俗答書 屋代弘賢の風俗問狀に對する答書が、南葵文庫にも一種ある。紙數五十二枚の寫本で、卷末に「高取藩吉川覺兵衛茂周誌」とあるが、大和以外の他國の事も些しは混じて居るやうだ。此書前後に「不忍文庫」と「阿波國文庫」との印があつて、曾て屋代氏の所藏であつた事がわかる。近くは故小中村(清矩)博士の文庫に在つたもので、同博士は左の如く奥書をして居られるのである。

「文政の比、幕府の命により屋代弘賢事とりて、古今要覽の撰述ありし時、諸藩に於て各地の風俗を上書せしめしものゝひとつなる由、友人小杉榎邨より聞ぬ」

此類の書は、まだ外でも見た事がある。

猶、私も既記の如く、柳田先生の指示を受け、同じ大正六年頃に南葵文庫にて、親しく同本の副本を取つて居るのに、今はそれが存せぬとは、如何にも腑に落ちぬ事ではあるが、これは該書は明治四十年以後に南葵文庫に入り、大正十四年までに散逸したので、斯くは兩目録とも記載漏れとなつたものと推察されるので、その旨を關氏に語り歸宅した。それにしても風俗答狀、前には福山のが云隠れし、今また高取のが行衛を失ふ、思ふにまかせぬ世の中ではあるわい。

然るに是れより先き、天道私の微意を憐みたまひしにや、奈良縣郡山の大和國史會より發行の「大和志」誌上へ、昭和十三年一月より同四月まで(五卷一號より四號迄)高取風俗問狀答が連載されたので、私は早速同會員になりその分だけ秘藏して置いた。然も同誌掲載の問狀答は、編著者吉川茂周の子孫の家に傳へた稿本のやうに考へられる。それは同誌主幹の田村吉永氏の、左の奥書に依つて推知し得るのである。

大和高取藩風俗問狀答書は、屋代弘賢の風俗に對する問狀の答書である。○中 本書は吉川覺兵衛の後裔の所持本によつて筆寫した、故今西伊之吉氏本に據つたものである。

吉川覺兵衛について、私との間にこんな因縁がある。數年前當時私はしきりに御陵に關する文献を探索中、吉

川茂周と堤惟徳と共に著した「攝河泉御陵圖」といふのがあつたので、此の吉川茂周の後裔を探してゐた際、偶々高市郡育成小學校を尋ねて、其の兒童名簿の内に、吉川茂孝といふ名を見出し、よく似た名だと云ふ處から、遂に同郡船倉村市尾の其の家に至つて、茂周の著作物等を見たのであつた。かうして茂周を知つたのであるが、その著作物の中に「風俗問狀答」の稿本のあつたのを知つて喜んだものである云々（大和志五ノ四）。

斯うした事情で「大和志」連載の問狀答を底本とした。そして、此の記事に手掛りを得た私は、船倉村役場及び育成國民學校に照會の結果、兒童名簿に載つてゐた吉川茂孝氏が御成人なされ、奈良縣北葛城郡の陵西國民學校長在職中と判然したので、早速、同氏に發信して編著者茂周翁の爲人を問合せしに、左の如き返信に接した。

吉川覺兵衛橋茂周

- 一、生年月日 寶曆三癸酉年九月初日、誕生。
- 二、高取藩世臣 御近習、御廣間御番入、御執次御番、當時相當有名なる國學者と交友せる由なるも、記録など残存せるもの殆どなし。
- 三、文政五壬午冬十月十八日歿す。法名、覺性院賢應一貫居士。高市郡越智岡村越智光雲寺に葬る。享年七十。墓碑銘下の如し。

君諱茂周、字士都、俗稱覺兵衛、姓吉川氏、其爲人也溫柔嚴毅、好學不厭誨而不倦、博通經籍、旁達詩文、又好國風滑稽歌、號深茂亭主々、閩閩之功遷騎隊長、文政五壬午冬十月十八日、以疾卒、歳七十、妻高枝氏

有四男一女、茂濟爲家督、次男爲遠山氏養子、季子茂濟服喪、葬於越知村光雲寺先塋之側、君姓愛人推毅諸士、賑恤宗於、銘曰、學主中庸、教育義方、入學述忠、務守天常

鷹城藩 赤城長尾龍雲即甫撰

四、不肖は玄孫に相成り申す。廢藩置縣後、高取町より現今（船倉村市尾）の所に住所を移す。

五、江戸の屋代弘賢氏との關係については一向に承知仕らず、著書についても種々調査致したるも、之といふ纏りたるものなく、陵墓誌の著書あれども、目下三冊中二の卷一冊行衛不明と相成り居り候、其他筆記もの寫等少々有之も、十分の調査致し兼ね候。

以上で概略ながらも編著者の事歴が判然したのは仕合せであつた。之れに就いては後裔である吉川茂孝氏に謝意を表する次第である。

それでは此の高取問狀答の學的價值はと云ふと、他の著者と同じやうに文献學者であつただけに、記録に重きを置くのは止むを得ぬとするが、特に本答狀は書物の臭が強く、中には他の書冊から抄録した處さへある。そして、その種本とも云ふべきものは、寛政十二年刊行の玉田永教の「年中故事」である。茂周はこれに由り高取藩以外の事まで書き立てた。物知りぶると云ふては、少しく云ひすぎるかも知れぬが、それだけ學的價值は低減すると云ふのが、蓋し忌憚なき批判である。

若狹小濱風俗問狀答

始め此の校註問狀答を計劃した際に、若狹の分は屢記の如く震災で焼失したので、私は再び京都帝大附屬圖書館のを再寫して底本としようと思ひ、此の事を心やすき某氏に語ると、某氏は、知人の學生に依頼すれば客易に事運ぶべしと、極めて気軽に引受けてくれた。私には多少の不安があつたが、折角の好意を無にするも失禮に思ひ其のまゝ頼んで見ると、案の如く少しも埒があかず、今日の明日のと約三ヶ月ばかり空費した上に、今度は學生が暑休で歸國したのどうのと、まるで鰻に荷鞍でのらりくらりと云ひぬけるばかり。私は幾分の腹立たしさを感じたが、そんな事に頓着して居られないので、如何にすべきやと思案の末、曾て歴史地理學會の席上で堀田璋左右氏から、若州小濱の吉岡昌太郎翁が郷土關係の藏書に富んで居られ、且つ篤學の士であると承つて居たので、失禮をも顧ず書中を以て御願ひした處、御多用であり殊に七十九歳の御高齢であるにもかゝらず、學問のためと御快諾下され、早速、問狀答を筆寫遞送してくだすつた。私は此の美舉に對し深き感激を覚え、此の賜物を底本として本書に採用することゝした。茲に其の顛末を略記し、永く吉岡翁の學恩を感謝する次第である。

此の問狀答の執筆者である組屋恒久に就いては、曾て牧野信之助氏が縣史資料採訪のため小濱に赴きし際に、同地の「松見半十郎氏方にて「若狹國風俗」と題する横綴三十五六枚の小冊子を見た云々。大體、小濱を中心として高濱三方の方へかけての材料を列ねてある。殊に小濱の近傍には太良庄、名田庄の如き有名な庄園もあること故、一層其風俗に關する記事が興味深く感じられた云々。この組屋氏と云ふのは小濱の舊家であつて、淺野京極酒井家代々の優遇を受け、随分活動した大商人であつたと云ふが、恒久と名乗つた六郎左衛門の事はまだよく分つて居らぬ」云々(郷土研究四ノ一〇)。

そして、此の松見氏と組屋氏の關係に就いては、少しも聞く處がないが、恐らく肉縁の關係などはなく、たゞ松見氏が問狀答を所持してゐたに過ぎなかつたものと憶ふ。猶、私が今回吉岡翁の厚意により底本としたものも、曩の京都帝大所藏本も、また牧野氏の謄寫された松見本も、全く同一本のやうに考へられる。そして、該答狀の學的價値は、餘り高く評價することが出来ぬのである。

丹後峯山風俗問狀答

學友毛呂清春氏から寄贈された謄寫版の本が、既記の如く震災で烏有となつたので、據らなく「丹後史料叢書」第二輯に收めた「丹後峯山風俗問狀答」を底本とした。聞説、同書の原本は、明治維新後は峯山小學校に保管されて居たが、昭和二年三月七日の同地方の震災のため焼失したとある。東京と丹後とで共に震災に祟らる、峯山問狀答また殊なるかなである。

此の答狀は識語にもある如く、同所の淨土僧探譽と眞言僧尊光との兩名が主査となり、若干の神職及び庄屋たちの申出を徴して編纂されたものであるが、當時の習禮として且つ僧侶として止むを得ぬ事とは云ひながら、謂

はゞ弘賢の私用である問狀を、全く幕府の公用の如く思ひ過した爲に、態度が少しく固くなり、徒らに文辭のみ鄭重を極め、却つて内容は疎略の物となつてしまひ、たゞ事勿れ主義の「無御座候」一點張りで押通したことは、如何にするも物足らなさを感ずるのである。殊に時勢とは言ひながら、年中行事や風俗の推移に、やゝ深い交渉を有する神職が、是等に没交渉の僧侶の下風に立ち、その詰問に答へると云ふことが、此の答狀の學術的價値を低下させたやうに考へる。

備後浦崎村風俗問狀答

雜誌、旅と傳説(一〇ノ一)に掲載したものを底本とした。編著者たる笠井治右衛門は同地方の名家で、代々里正を勤め、且つ治右衛門を襲名した。幸ひ其の四代目の後裔笠井興一氏が、尾道市に現住せらるるを知つたので照會した處、同氏は御病中であるにもかゝらず、前後二回にわたり懇切なる高示に接することが出来た。此の機會において笠井氏に對し謝意を表する。そして、同氏の記事に由ると、編著者の事歴は概ね左の如くである。笠井治右衛門、諱を宜重と云ふ。明和七年七月七日を以て、備後國沼隈郡浦崎村に生る。文化元年九月廿八日三十五歳の壯齡を以て父の譲りを受けて浦崎村の庄屋となり、續いて同郡中組年番役兼務、次で同郡葉江村、藤江村、金見村の里正となる。其他在役三十餘年、治績大に擧り、領主福山侯より賞を受くること、實に四十餘回の多きに達す。文政十年六月七日、庄屋役を子の治右衛門に譲り、隱居して宗三と號す。嘉永四年八月廿

七日病歿す。行年八十二歳。浦崎村の法運寺に葬る。法名、篤功院仁嶽宜重居士。

これに由れば治右衛門宜重が、問狀答を執筆した文政元年は、恰も四十九歳の分別盛りの交であつた。因に子の次右衛門は父にも勝る人物であつて、笠井透悟の名は國內に知られたとの事である。

そして、此の問狀答は、措辭は悉く簡古であるが、筆者が多年體驗した行事風俗に就いて記述しただけに、些の文飾もなく事實そのまゝを紹介した點に、筆者の用意と苦心とが知られるのである。

淡路國風俗問狀答

編輯者藤井彰民の自筆本「淡路草」が、上野の帝國圖書館に所藏され、その中に「淡路風俗問狀答」が収録されて居るので、茲にはそれを底本とした。

全體、阿波藩(淡路の本藩)と屋代弘賢との關係は、既載の如く相當深厚なる關係があり、殊に「阿波藩民政資料」卷下に由れば、風俗問狀答に就いても深甚の注意を拂ひ、江戸在邸の掛役より國許の重役に宛て、實に左の如く通達されてゐるのである。

以手紙得御意候、此度從公儀爲御内御用、諸國風俗問狀御達に付、右御答書御用相蒙、右に付御受持先郷分問狀之様々相當り、風俗の同異又は問狀有之候へ者其俗式、無御座様又は問狀には無御座候へ共、御國に於いて有之候風俗も有之候へば、其段委細に書出を以て御用に御座候、右様御承知御取揃越可被奉候、則別冊寫登冊

御達申候、右之段爲得御意如斯御座候、以上

九月七日(文化十四年)

増田哲次
立木専蔵

生駒彦吉様

(外八名及び問狀目次省略)

右は文化十四年丑十月、江戸表より國々御儒者様方へ御尋に付、猶又其趣郷中へ御觸に付寫置候、追而相分候儀も有之候へば、書付を以て申上る筈

斯うした事由があるにも拘らず、本藩では編纂を大成せず終つたものらしい。(中山曰。此の解題を書いた時は、まだ阿波國風俗は發見されぬのであつた)従つて此の淡路問狀答は、書札に見えたる「郷分問狀」の一部と推測されるのである。そして、これが實際の選錄者に就いては、「淡路古今紀聞」卷一に左の如く記載してある。

○風俗問狀の事

文政十五年戊寅歲、去冬東都幕府の儒官屋代太郎弘賢(國學は塙檢校の門人なり)風俗問狀を以て、諸國古來の風俗を取調べらる。當國は本藩蜂須賀家へ頼み越されたるにより、本年二月下旬其答狀選者として、津名郡内田村渡邊彌三右衛門、同郡安坂村多田包助、三原郡福良浦山口吉十郎、同郡志知村川浦船越與一右衛門等、

官命を蒙り、時々洲本に會して右答狀を選錄し本藩へ進呈せり(明治十六年十月、安部喜平編)。

然るに「淡路草」を輯めし、藤井彰民の記事には、多少とも是れと異なるものがある。即ち同書の序に、文化の末、東都屋代氏、諸國の風俗を聞かまほしとて問狀を著し、梓行して世に出せり、先人○藤井容信も其事によりて、此國の風俗を考へ、右の答書を記し草稿を成せり、予今此書の初風俗の所に、彼草稿を其儘に錄し、中に一二加へぬ(序文の末に、文政八年乙酉九月とある)。

これに據ると渡邊、多田、山口、船越の申達せるものに基き、藤井容信が整理起稿したやうに聞えるが、果して然るか否か、判断に苦しむものがある。

編輯の詮索は此の程度で打切り、さて、此の答狀の學的價值はと云ふと、これこそ相當高く買はれるべきものだと思つてゐる。

以上は誠に粗笨ながら、解題としての大體を盡したと信するので擲筆する。若しそれは等九種の問狀答の資料を、如何に按排し如何に利用すべきかは、要するに讀者各位の方寸に俟たねばならぬが、私としては一人でも多く按排し利用して、先哲の學恩に報われん事を望んでやまぬ次第である。

阿波國風俗問答

——外五ヶ所の風俗問答の發見——

學問の道の如何に迫りきことよ

私は、學問の道の如何に迫りきものであるかといふことを、今更のやうに泌々と感ぜず居られぬのである。私が、柳田先生御所藏の「秋田風俗問答」の市井部を、學友ネフスキー氏から又借して復本を取たのは、既記の如く大正六年の事であるから、實に今を距る二十五年前、四半世紀の遠い昔に屬して居るのである。そしてその秋田風俗状を、京都の田中縁紅氏が「郷土趣味」の特別號として發行するに際し、私が自ら描らず解題やうの一文を草したのも、大正十二年であるから、是れから數へても二十年に手が届かうと云ふ昔である。そして、斯うした事が機縁となつて、既載のやうに九ヶ所の風俗問答が發見されたので、私は寡聞菲才をも願ず、是等九ツの風俗状を校訂し、これに多少の註釋を加へ、解題を附して出版をなし、些少でも學界に寄與したいと思ひ立ち、例の巧運よりは拙速と執筆を急ぎ、昨昭和十六年十月に脱稿したのである。

徳は孤ならず必ず隣あり

斯うした事から私は、同十月の「歴史地理學會」の例會席上で、柴謙太郎氏（元三井家編纂主任）の講演後に諸國風俗問答の由来を述べ、漸く九ヶ所だけ發見したが、まだ多數の風俗状が秘藏されて居る事と信するので私をして志を達せしむるやう、御支援を乞ふ旨を申添へた。

然るに翌十一月の同例會で、柴謙太郎氏より、想ひがけなく、左の如き高示に接したのである。

屋代翁の風俗問答かどうか判然せぬが、三井文庫に本居大平舊藏の、諸國風俗と題した寫本が、五六種あるのを記憶して居る。御都合により案内するも差支ない。

との事であつた。此の時の私の欣快は讀者の想像にお任せするが、その翌々日に私は柴氏に伴はれて、戸越公園に近い三井文庫に赴き、同文庫主任岡百世氏に面會し來意を告げ、同庫員中井彦氏により、六種の風俗書の搬出を受け、同書を通覽して要點を心覺えに書きとめ、屋代翁の風俗問答に相違なき事も確めて歸宅し、翌日直ちに同文庫に對し該書の閱覽、謄寫、發表等の許可を願出で、其の許可を受けたので聊か解題めいたものを記述する。

一、阿波國風俗 貳冊

表書 但シ抹消

〔阿波 諸國風俗問答書〕上 市中分

（内題 市中歳節記） 半紙百二十六枚

一枚 七行 結

諸國風俗問答 解題

中山曰。正月より十二月までの行事、及び冠婚葬祭など、他の問狀答と同じ。
阿波(表書抹消)

〔風俗問狀御答書〕下 踊之部 半紙十二枚
一枚七行詰

中山曰。組踊の事、以下歌句あり。

一、天草風俗 天草 滋野宜珍

(表書抹消)

(天草御答書 風俗) 半紙二ツ折十二枚

中山曰。記事概ね問狀答と同じ。

(巻尾) 肥後國天草郡高濱村 上田源太夫滋野宜珍

同國同郡同村 執筆宮口左馬輔藤原清海

文化十一年戊二月十日

一、陸奥國信夫郡伊達郡風俗記

石金吾主上
内記永年上

(内容 年中行事)

半紙二十一枚
一枚七行詰

陸奥南部

一、年中行事記

半紙二十一枚
一枚七行詰

表紙別筆 南部花巻驛 伊勢白子澳安海記)

一、若山當所(二字抹消)風俗記

半紙二十枚
一枚十二行詰

(表紙別筆 犬塚流水老人ノ書也)

中山曰。内容 年中行事の略記なり。

(別筆傍訓)タラヲ

一、荊萩峯邑風俗 氏純記

(巻尾) 文政元年六月八日櫻之舎 半紙十一枚繪入

(附録) 信樂庄外多羅尾村之風俗 半紙一枚繪入

大略、以上の如きもので、また此の外に「土佐國風俗」と題し、寺川郷談(外三種)を合綴せるもの、及び「尾張年中行事細記」とがあるも、共に屋代翁の風俗問狀に關係なきものと考へたので省略した。猶「藤垣内(大平)藏書目録」には「松坂風俗記」、「佐渡國風俗土産」、「參河吉田領風俗大概」の三種が記載しあるも、中井氏の語る處によれば、三書とも散逸して傳はらぬとは誠に遺憾である。但し參河吉田領の分は、井上頼國本を複寫した柳田先生所藏本と、蓋し同じ中山美石撰本と想はれる。其の理由に就いては後述する。

是れで内容の大體を紹介したので、更に是等の圖書が三井文庫の所藏となつた經過と、本居大平翁と屋代翁の風俗狀との關係を記して、讀者より高示を得たいと考へるのである。

南英文庫から三井文庫への移管

岡主任、柴學士、中井庫員三氏の談話を総合すると、本居家は宣長翁時代から、伊勢松坂の領主であつた紀州侯の保護を受けて居た關係で、明治中期に紀州侯の徳川頼倫氏が、東京麻布の本邸内に南英文庫を創設し、一般に公開した際に、大平翁の蔵書を嗣孫豊頼翁から同文庫へ委託する事になつたのである。

然るに昭和初期に頼倫侯が薨去され、尋で南英文庫の圖書が、大震災後の東大圖書館に譲渡さるゝ事になつた折に、大平翁の蔵書だけを三井文庫で購入し、そして、現在に至つたのである。斯かる次第とて、従來の南英文庫目録には、大平翁の蔵書を掲載せぬので、風俗問狀答も發見利用されなかつたのであらうとの事であつた。

私案によれば、事實、南英文庫には「大和高取藩風俗問狀答」が存在して居り（今は行方不明となる）、同文庫の主事であつた高木文氏も、此の書に關した記事を發表されたが（郷土研究四ノ十）、別に阿波國その他が保管してある事に氣付かなかつたのであらう。外來の閱覽者であつた私などの知るべき筈がなかつたのである。

それで阿波國答狀は、内容はやゝ完全して居るが、これが筆者の明確を缺いたのは殘懷であるも、他の執筆者から推して、大體において大平門下の者の起稿にかゝるものと見て、さしたる過ちは無いやうである。天草風俗の筆者滋野宜弥の名は、大平門人帳には載せてないが（讀史備考参照）、どうやら大平翁に由縁ある者のやうに考へられる。陸奥信達二郡風俗の記者石金普主は、大平門でも相當に知られて居り、南部と若山との兩筆者は、こ

れも私の見聞では不詳だが、荊萩峯邑の櫻之舎氏純は大平門であつたことは、此の風俗記に添へた氏純から大平宛の書簡の一節に、

一昨年來、御依頼の多良尾邑風俗年中行事、漸く此頃出來いたし候間懸御目候、此儘御留置可被下候、書は家僕に爲認候まゝ、何分龜筆御推覽可被下候

とあるので明白である。猶、參州吉田領答狀を書いた中山美石は、同じ大平門でもやゝ粒立つて居る者であり斯うした諸點から見て、大平の手に集つた風俗記は、大平から諸門人に依頼したものと信するのである。

それでは屋代翁と大平翁との關係はと云ふと、此の肝腎の事が私には判然せぬのであるが、やがで分明する事として、姑らく私の想像を記すとす。それは屋代翁が大平翁に風俗問狀答を依頼し、大平翁は是れに便乗して諸國の方言（天草里言などの例あるも今は省略す）を蒐めやうと計劃したものと考へる。たゞそれにしては大平翁の手許にあつた風俗記の起稿年月が、他の答狀（秋田や長岡など）にくらべて、少しく早いやうに思はれるがそれ等の細かい考察は今は省略する。

私は、以上の如き貴重書の閱覽その他を許された三井文庫、及び前記の各位に對し感謝し、併せて是等の風俗狀の連載を許してくれた萩原主幹に對し、謝意を捧げる（昭十七年一月號旅と傳説十五ノ一訂正）。

x

x

x

x

x

猶、此の機會に附記するが、今回三井文庫にて發見せる「阿波國風俗狀」以下五種は、其の記事が簡明である

上に難解の事項も割合に尠く、よしそれが多少存するとしても、既釋のもので大體は事濟むと信じ、且つはそれ
れで無くとも紙幅の増大を惧れ、原文だけを採録するにとどめ、一切の註釋は差控へる事とした。讀者の賢諒
を乞ふ次第である。

奥州秋田風俗問答

秋田六郡神佛之部

正月

元日 八幡詣

正八幡宮大八幡宮兩者は府城の鎮守なり、正八幡別當眞言宗金乗院、神職近谷氏、大八幡別當同宗一乗院、神職千田氏、社は城の北郭なり。末社に稻荷宮あり、元日藩中おほやう早旦に先づ此兩社へ参りて、それより城へ登る、此日城よりも代参あり。

同日 金砂山御靈宮猿舞

別當眞言宗東清寺、社は郭西北川を隔てあり。この日猿太夫松岡三須田の二人、神前にて猿を舞す、又城よりも代参あり。

同日 藤倉山押合神事

藤倉権現觀世音合殿、別當修驗長命寺、山は城北四里許にあり。柴燈護摩修行、柴燈は晦の夜より三日に至るまで焚つゞくるなり、護摩は早午晩の三時なり、元日の日くれて里々の氏子等群参し、裸に鉢巻して堂内に居

こぼれ、亥の刻ばかりに村の役人に別當より出す所のもと、二人上下着て出て扇を擧て、アンジャマ／＼と三度大音に呼ぶ、堂内のものでセヤマ／＼とのしりて押合ふなり、又曉になりて同じ様に押合ふ、是を宵のアンジャマと云ふ、二人のもの扇を以て煽き立れば押やむ、この時神前へ供たる餅一ツをとりて大勢の中へ投入れば争ひ取る、是をカケの餅と云ふ。

アンジャマ、セヤマ、カケの餅、何の義たる知れる人なし。

三日 雄鹿本山五社油餅祭

雄鹿は城西に當り海へ迫にさし出たる故、俗におかの島と云ふ、山は赤神山と云ふ、五社は本社なり、別當眞言宗永禪院、神職金氏、この日一山の僧徒酉の刻に柴燈堂に集りて勤行あり、院主導師後夜の行法終りて壇を下れば、塔中の泉光院壇に上り油餅の加持す。この時亂聲といふ事あり、油餅は糯米三升を丸餅とし、其上へ紙を敷き油を入れて火を照す、大衆一同に勤行續行して後、泉光院法衣の上へ禱かけて、此餅を堂の窓を開きて外へ投出し窓の戸を閉づ、窓の開けたて尤速にするなり、この間大鼓笛法螺なんぞ鳴らし立て、參籠の大勢同音に聲をあげ林木も振ふばかり也、是を亂聲と云ふ。

同日 同處眞山五社の油餅

赤神山の北方にあり、別當眞言宗光飯寺、神職紀氏なり、此日の行法本山に異なる事なし。但翌四日に柴燈火留と云事あり、神職濁酒五升ばかりを持って柴燈堂の火へ打かけ消す也、社僧法樂諸經神人巫女神樂を奏す。

本山永禪院は山の南に在り、眞山光飯寺は山の北にありて、共に一山を祭る。

同日 五城目の里の市神祭

秋田の郡也、別當修驗高性寺、此祭別に社あるにあらず、市中へ六角の柱一本を立て、香花を備へ酒食を供して祭る也。

四日 保呂羽山御戸開押合神事

平鹿の郡八澤木の里波字志別神社、延喜式載る所の出羽九坐の一なり。神職大友氏守屋氏、此祭は四日より五日に至る世俗五日堂と云ふ、仙北の三郡のもの群參す、社は高山の頂に在數日前より大友氏人數を出して深雪を開て路を造り、此日宮殿の戸を開て神前を莊嚴す。未の刻ばかりに參詣群集し、香花錢戸帳鈴の緒芋綿等こゝろ／＼に献す、樽一雙にて一石の酒入るほどの大なる、或は蠟五貫目にて造りたる燭を献する者など、年ごとにおほやうあるなり、群參のもの一むれ／＼に雪穴を掘り、簀笠をもて覆ひ圍みて通夜する、これを雪室と云ふ。殿庭より坂路をかけて數百所橋比して數ふるに違なし、大友氏人數を出し暇なく往來して非常を禁ず申の刻ばかりになりて仙北の郡のもの由利の郡のもの、若く壯なる社堂の中に充滿し裸に成て力を競ふ。この時神前勤番の神人諸神器を内陣に納めて神前を警固すれば、漸く押合盛んに成て二時ばかりして勢ひ疲る、此時警固の神人幣を振る、是は押合のかけ聲足踏の音にて中々言語の通ずる事ならねば、幣を振るを相圖として押合止むなり、須臾にして新手入替て又押合ふ事前の如し、勝負決する時は手を拍ち板敷を踐鳴らして勝鬨

を擧る、山谷震動して一二里の外に聞ふとなり。押合のうち堂外にあるもの雪礫をうち押合の者中るを幸に取
て喰て喝を潤す、又堂の屋上に三四尺も積れる雪、點滴と成て雨の如く下て一夜のうちに皆消えはつる也。押
合にて堂の内外に群集する者雜言惡口にまかせて放言するに、互に無禮を咎めぬ古例にて、やゝ寅の刻ばかり
に神樂役の神人神前を掃除し、始の如く莊嚴し神璽の大幣を正面に安置し供物を辨備して、五日の卯の刻大友
氏神前に進み、古來相傳唯授一人の秘法を行す、終て神樂役進み大幣を取て五調子の舞を舞ふ。總て此山頂は
鳴物を禁ずる故、鼓笛なども用ゐず舞ばかり也、湯立或は神樂等は、山麓の末社の彌勒堂といふにて行ふな
り。

八日 古四王詣

社は城西一里寺内の里にあり、別當眞言宗東門院、神職高橋氏、元日より神人は元より一村百餘家精進潔齋し
て汚穢の者は門より入れず、酒も用ゐず、誤て侵す時は忽ち驗あり、故に村民恐れ慎む事自然と嚴重なり。猫
の鼠を捕ることは定る事ながら、もし此時に捕ることあれば、即ち猫の腰ぬける也、死産産褥等ある家へは親
族も通問せずと云ふ、二日より七日まで參籠の者多し、八日曉丑の刻はじめて神前へ神酒赤飯を奉り、大拍子
の太鼓を打つ、是を聞て家々にも神酒を供し社へ參詣す、同日神前にて神酒開の酒宴あり、是を大靜卸と云
ふ。同日諸方より參詣のうちに裸參既參の者多し、風雪の時なるに男女とも帷子一重を着る徒跣にして城下よ
り一里の神前を行く、親族のもの衣類飲食を調して社前の茶店に至り、火を熾んにして下向を待つなり。此日

より不淨の禁なし。

同日 大瀧の里の藥師祭

秋田の郡大瀧の里は平地より温泉涌出づ、浴湯の者四方より群集するを一村みな宿して業とする也、この堂前
に温泉の一池有り故に温泉の神と云ふ。その池上に芒一葦ありて他よりもよく長ずる、年々生ひるごる事もな
く古より變らず、よりにて芒のいで湯とも云ふ、別當修驗自正院、此日の祭に白粥を供する也。

十五日 神宮寺八幡のさい鳥綱引

神職齋藤氏、仙北の郡神宮寺の里は往還のむまやなり。先づ十三日に驛亭に神壇を設けて幣帛を建つ、十五日
夜神人等笛鼓にて北の里はなれの橋のもとに至り神酒を供し、氏子のうち一人竿と笠とを持て舞ふ、是をさい
とりの舞といふ。同夜綱引あり、是より先に村重等家々の門に至りて千年の壽と唱ふれば、家毎に藁一把を出
す、是を用ひて大綱二筋を調し出して驛亭へ置く、この夜神職幣を立て加持し、終て此綱を持出て一村の老若
男女みな出て引合ふなり、上なるを雌綱とし下なるを雄綱とし、真中へ幣帛を立つ、もし雌綱切る事あれば米
價のぼるとし、雄綱切れば米價やすしとするためし也。

同日 刈和野のむまや市神祭

仙北の郡にて神宮寺の里に繼ぐの驛なり、神職鎌田氏、長申の幣帛へ扇を開きて結び添へ、芋二むすびを左右
へ垂れたるを三本、十三日より十五日まで加持祈念す、是を村役人受取て里の市中上中下三處へ立る、夫より

大綱を出し中の幣帛の處を正當として、里人みな立わかれて引合ふなり。

十六日 寶性寺の曼陀羅參り

郭外の寺町にある比丘尼寺なり、この日地獄相の圖を掛く、女兒群參す。

六那の寺院、元日より年中の勤行一宗々々の開山あるは本山の恒規に従ひて、別に異なる事なし。城主の香火所天徳寺の如き殊に榮山の清規を守り一事も失はず、常法幢にて夏冬の結制に至るまで怠る事なし、些の異なるは日を追て出す。

- ① 押合の行事は各地にある。始めは東西（又は左右）に分れて押合ひ、東が勝てば稻作（又は山の幸）が豊に、西が勝てば昌作（又は海の幸）が豊であると云ふ一種の年占であつたが、後には參詣者が只押合ふやうにのみなつた。今でも越後濃佐の尾沙堂押や、備前西大寺の會陽などは著聞してゐる。
- ② 赤神山。東遊雜記（卷一）に赤神山の五社、一社は漢の武帝、一社は蘇武を祭り、他の三社は我國の神なりとあるが、必ずしも信用すべき限りでない。
- ③ 油餅の加持、密宗の呪法である。松尾筆記（卷一）に眞俗雜記を引用して詳載してある。俗に歡喜樂天の油團と云ふのも同じである。
- ④ 惡口祭は古い巡り神の信仰に發し、後には神事に托した社會的制裁となつたのであるが、それが變じて言ひ勝つたやうは、其年幸運に惹かれると云ふやうになつた。

〔參考文獻〕

惡口祭 (中山太郎) 日本民俗學神事篇

⑤ 芒の湯、菅江眞澄の紀行に、太古、神が鶯卵の殻に温泉を入れ、芒の苞に包みて此の地に置きしより湧泉したので、鶯の湯とも芒の湯とも云ふ縁起を載せ、更に信州諏訪温泉に近く同じ薄ノ宮の在ることを擧げ、此の縁起の由來を示唆してゐる。

〔參考文獻〕

秀酒企乃湯壽 (菅江眞澄) 眞澄全集本第二

⑥ 綱引の行事は、近畿より中國九州に多く、關東から東北地方に少い。年占である事では云ふまでもないが、朝鮮にも古くから廣く行はれて居るのは注意すべきである。

二月

初午 川尻の里稻生の富

城南十餘町、神職川尻氏、五穀と山海の品を供して畜突あり、是は金銀の事にあらず、吉凶の文字を書たる札を突て運を試む、第一に當ると神職より大麻并神前の供物を分ち贈る。

初午 厄除觀音參り

郭外の寺町にあり、來迎寺と云ふ淨土宗家なり 如意輪觀音弘法大師四十二歳の作なりとて、厄除の守札を出すなり。

初午には稻荷のみならず、諸神の多く祭式ありと云へども、異なる事なし。

十五日 五百羅漢寺涅槃参り

城西の寺内の里にあり、西來院と云ふ禪宗也。幅一丈長二丈の五綵織成の涅槃像あり、香火ことに盛ん也。

十六日 八蔵の宮祭

秋田の郡新開村にあり、これ湖水の神なり、神職濱田氏、祭事湯立神樂の外異なる事なし。

社日保呂羽山神事

八澤木の保呂羽山前に出せり、この日祈年の祭なり、鏡餅三重昆布神酒を奉り、奉幣祝詞終て麓の末社彌勒堂にて湯立神樂あり。總てこの山頂の神前に献ずる鏡餅昆布酒にて、月々朔望節句ある臨時の祭にも此外なし。

大友氏宅の神壇にて祭るは元日よりして山海の珍を備ふる也、又神職大友氏を始めこれに屬する神人みな月々五日までは、齋する祭の事あるには前三日齋するなり。

① 初午の日に稻荷神を祭る典據は、諸説あるも必ずしも明確でない。稻荷が農業神なる故に、その農業に關係深き馬を使ひ始めるので、此の日に祭つたと云ふ説を承認する。

〔参考文献〕

初午愚考 (山中共古) 郷土研究一ノ四

② 景行記の倭尊の御歌に「倭は、國の麻本呂婆」云々とあるが、此のマホロバは眞中央と云ふ義であつて、此の神社が

國の大社として崇敬された事を云ひしものと考へる。然るに保呂羽はアイヌ語の大酋長と云ふ意なりとの異説もある。

〔参考文献〕

奥羽の先住民の祭神 (藤原相之助) 旅と傳説十ノ一

三月

三日 保呂羽山箭初の神事

保呂羽は前に記せる如し。此日奉幣祝詞勸行終て、末社の彌勒堂にて前庭の杉の木に的をかけ、柳の弓、芦の箭三本にて、先づ大友氏起て一の箭を空中へ射はなち、二三の箭を以て的を三度射る、次に守屋氏射る、終て堂に入て勸修再拜す。

同日 今泉の里の白山祭

仙北の郡なり、この日神輿宮回りあり、輿の者八人古より其家定りてあり、是を注連と號す。先拂二人は太刀を提て出る、其餘異なる事なし。

同日 保土野の里の八幡祭

新城の庄にあり、別當修驗千藏院、此日村役人より弓矢的を造りて献る。別當加持終りて村役人并參詣の諸人的場にて北へ向て射る、又役人替れる時は鉾刀等を献る古例也。

十九日 上野神明祭

城の西南川尻の里にあり、神明總社合殿、神職川尻氏。この社氏子甚多し、宵祭よりして参詣群をなす。

廿一日 花御影供

城北の眞言宗寶鏡院、満山花木を植る、この時に開く、遊觀のもの群をなす。

廿五日 北野天神祭

秋田の郡上出戸の里にあり、別當修驗彌勒院、神職濱田氏、社後は海社前は曠野にて野を北野と云ふ。城の西北にあたり相距四里許参詣これに盛ん也、道路みな平沙ゆゑに馬を驅て往來の遲速を試るもの多し。

同日 矢橋天神祭

城西矢橋の里にあり、神職土崎氏。この日兒童の書を學ぶもの杉の板を、半截の藤紙ほどにして字を寫して奉る、殿の内外前後へ打て魚鱗の如く隙ある事なし、庭の樹木にもすぎなく掛る也。又頓阿が作れる人丸の像あり、この日合せ祭るなり。

同日 渦卷天神祭

仙北の郡角館小館の里にあり、神職鈴木氏、此社の境内にある大小の石に多く渦卷の文あり。里人もひさしく渦卷の名の何事なるを知らざりしに、或人の一石を見出せしより認め見るに、多くこの文のありけるにぞ、さればこそとて其名の廣がりて、近遠の境よりも参詣日々に絶えずとなり。

① 柳の弓や蘆の矢(又は蓮の矢)を用ゐる事は、陰陽道の思想であつて我國固有の信仰ではない。それに此箭初の神事は、各地に行はれた歩掛、おびしやとも訛つて云ふである。
② 此の注連とは他地方の頭人(又は當屋)と同じ意のやうであるが、それを何故に注連と云ふたかは判然せぬ。頭人に就いては後に記述する。

四 月

五日 北郭の八幡祭

城の鎮守正八幡前に記せしなり、この日玄米の御供鹽漬蒲半房粟斗昆布海魚一湖魚一生にて獻る。今朝城より代参あり、神輿は寺内の里犬戻しと云ふ山へ御旅所假屋作りて神幸、警固の物頭一騎弓鐵炮鎗の足輕五十人を率て出る也。

六日 横手太子祭

平鹿の郡横手前郷の里にあり、神職高橋氏、この日神輿城外の町々を渡る。山鉾など造り出し殊に行例品々供奉す。

七日 勝手明神祭

太平山の麓目長崎の里、山谷の里の鎮守なり、神職番場氏、参詣の者箭を奉る。この日御供に白飯と生汁を調

し奉る、神人等も飯の外は火食を禁ず、又神酒醸したる糟は古社の地中へ埋む古例なり。

八日 保呂羽神社祭

平鹿の郡八澤木の里前に出す、此日本祭日なり、神職大友氏を始め神人みな朝日より齋戒して大友氏の前庭に高幣を立て、高さ三丈ばかり杉の丸太を以て幣串とす、俗に是を高注連と云ふ。先づ朝日に山上の神殿の御帳をかけ注連を張り、神鏡青白の玉串五行の幣帛を飾る、七日には末社の彌勒堂注連を張り、都て宮殿莊殿は大友氏人数を率て躬から臨んで修飾す。七日戌の刻彌勒堂にて湯立神樂あり、鏡餅三重草の餅なり、世俗三月三日是を用ゆれども當社は今日これを用ゆ、昆布神酒を供す、八日山上神前へ鏡餅昆布酒を供し奉幣祝詞、未の刻より彌勒堂にて神輿を御旅所へ遷す、大友守屋其外神人列席を修し五調子を舞ふ、終て神輿彌勒堂回ること三度にして堂へ入り、大庭にて獅子頭の舞あり、此兩日參詣群をなす。

同日 古四王祭

寺内の里の古四王宮前に出せり、此日祭日神輿宮巡りの事あり、供奉の者白幡瀝水神鈴法螺瓔珞等品々の飾ありて、粘付棒と云もの一雙あり、長さ一丈三四尺鎗の柄の如きものへ米すりて粘として塗たる也。この粘の付キ付かぬにて年の豊凶を考るとなり、七日の宵祭には宮前に庭燎を焚く、近國よりも來り集り通夜のもの群集す、眼の病あるもの尤渴仰するなり。

同日 雄鹿眞山大峰道開

赤神山前に出づ、この日神人社僧登山す、參詣尤多し。

同日 杉宮祭

雄勝の郡杉宮の里にあり、八幡宮三輪明神藏王權現の三社なり、別當眞言宗吉祥院、この日神輿御旅所へ神幸あり、雄勝平鹿仙北の三郡、由利の郡のもの群參す。

同日 大倉山観音祭

仙北の郡北浦の庄の院内の里にあり、別當修驗金剛院、六供とて里の中に古より定れる家六戸あり、此日是等登山して神輿社内を渡る。是より先三月三日別當の修驗登山して神酒を供し、此酒にて普門品一卷を書寫し、この日此山の岩谷風穴と云處へ納む、此山殺生禁斷なり。

同日 小杉山鎮守祭

仙北の郡小杉山の里にあり、伊弉册尊白山明神二社なり、神職は熊谷氏。こゝにも六供といふ古農家六戸ありて、それら供奉して神輿宮巡りあり、この里も又殺生を禁ず。

同日 唐松權現祭

仙北の郡境の里にあり、別當修驗光雲寺、安産の神なりとて六郡のみならず遠方よりも女兒參り、湊ふ事群をなす。

同日 鬼子母神祭

城西矢橋の里の日蓮宗寶塔寺、この日五色の千團子を供す、參詣多し。

同日 書川の白山祭

平鹿の郡上溝の里にあり、保呂羽山の末社にして神職は八澤木の太友氏の下禰宜にて太友氏なり、この社は保呂羽の神吉野より臨降の時休息し給ふの地なりとて、汲み給ふの清泉今あり岩清水と云ふ。女人あるは不淨の者立寄れば忽ち水色變ずとて人恐るゝ事甚し、病ある者に吞しむるに齋戒して汲むなり、この日參詣甚多し。祈願の者笹の葉一枚にて船の形を造り、煎大豆を積て奉る。

同日 浮島明神祭

仙北の郡刈和野の驛にあり、別當修驗三明院、神職鎌田氏。この日神輿御旅所へ神幸、御旅所は町の内の不淨なき家を撰て神輿を入る。

同日 阿羅伽山祭

平鹿の郡筏の里と云村にあり、神職高橋氏、木像古くして神體分ちがたし、俗此祭を仙人祭と云參詣群集す。

同日 岩谷山穴藥師祭

川邊の郡山内の里にあり、別當三明院、この里山谿の間にありて、社は高山頂上なり、半腹に大巖窟ありて修驗を始め參籠の者この洞中に通夜するなり。

同日 七倉天神祭

秋田の郡綴子の里にあり、別當修驗神宮寺、社は米代川の岸にあり、川を隔て七倉の山七峯水に臨て峙てり、みな岩石にして風景奇異なり、この日參詣群をなす。

同日 阿仁の森吉參

秋田の郡阿仁高山の絶頂にあり、六郡第一の山也。頂に大なる石二ツ並び立て、其上に大磐石一ツ屋の如く重なり、是を石堂と云ふ、この三ツの石中と百千の人の力にも動かしがたき大石なり。是より東に一峯秀たりこの間はみな瀧底より生のぼりたる大樹の梢の風雪のためにみな横たはり、互に枝のひまなく組合、山と平らかなるを涉りて至る、もし枝葉の透たるより落たらんには、千萬に一ツ活の理なし、古より落たるも聞ける事もあらねど、人恐れて遊觀の者この峰へ至る事稀也。この日參詣齋戒して登る、禪定の道南西北にあり、東は奥州の境、種平三ツ又などの高山相去る事數里、その間悉く高山絶瀧にて人跡なし、別當修驗和乘院。

同日 大威徳祭

仙北の郡角館の花岡の里にあり、この日參詣ことに多し、別當修驗文珠院。

同日 釜木藥師祭

城南の楢山の里にあり、別當修驗吉祥院、祈願の者穴の明たる石を奉る。

十五日 稻荷祭

城の鎮守北郭にありて八幡も相並ぶ、別當眞言金乘院、神職近谷氏、この日祭式献供正八幡に異なる事なし。

御旅所は土崎の海濱にあり、供奉の行莊亦八幡と同じ。

同日 眞晝山参り

仙北の郡元本堂の里、奥州の境高山絶頂なり、神職鈴木氏、この日参詣群集す。

十六日 五城目神明祭

秋田の郡五城目の里にあり、別當修驗泉藏院、神輿御旅所へ出づ。神鏡を先にして品々の行列あり、練物山鉾多く従ふ。

十七日 八鹽山石観音祭

雄勝の郡輕井澤の里にあり、別當修驗貴明院、山は由利の郡境の高山なり、山上に大石出で天然の像なり。

同日 旭岡神社祭

平鹿の郡大澤の里にあり、神職鈴木氏、諸人群参す。この社縁起辨慶が眞蹟とて殊に秘藏す。

十八日 廣澤神社祭

城東の田中の里にあり、神職道田氏、前夜の宵祭り燈火甚盛ん也。同夜楢山の里の馬頭観音宵祭り、この間相去る事田面十餘町燈火相競ふ。

廿六日 荒屋の山王祭

川邊の郡荒屋の里にあり、別當修驗藥王院、この神甚靈威あり。この日神輿御旅所へ神幸の時、神輿の戸帳の

内へ御香をまいらすに、向ふさまに置くにこの香前へ自然と向ふ、其時輿を出す古より然り。故に神幸に遅速あり、あるは黄昏に及ぶ事あり、故に俗に荒屋の山王香まかせと云こと兒童も覺え居る、神人等もとも恐れ慎む、神幸行列嚴重にして練物屋臺山鉾等數々供奉す。

廿七日 諏訪祭

城西侍町の中にあり、別當二方氏、藩の士にて、祖上よりこの社の預り也、神職土崎氏、正月元日の神供餅魚等の物まで其まゝに置いて、この日の神供に替るなり。神輿はこの日二方氏へ神幸あり、五月五日還幸、其間日神酒生魚を献る、都て年中献供の時魚は八ツづゝ也、五月四日に粽五十本を献る、七月廿三日は粽五十本、同廿七日には八十本也。

此月、中の申の日矢橋山王祭

城西の矢橋の里にあり、山王八幡合殿、神職土崎氏、郭外町々の總鎮守なり。前六日卯の日丹土迎の神事、是は本官地新城の庄五十町の里に有ゆへ神人神供を用意し、往て其里の古より代々治兵衛と名乗る者へ至り、その人をして丹土を取らしむ、此土常にある事なし、この日に至りて出づ、又別人取るものなし。翌辰の日御濱出の神事、是は神職土崎氏の宿より統人夫婦(頭註。統人の事後に出す、以下同)に神人等神樂を奏して境内の其所に至り、土崎氏勤行あり、それより長床(長床の事後に出す)へ歸り來て丹土焼の神事あり、終て當番(當番の事後に出す)の神人巫女等相共に統人の家に歸りかとお餅を製す、此餅は祭日の神供なり、かとお餅は河

骨を云ふ、この草の根を餅へ搗入る。翌巳の日、大幣御装束替へ、是は卯の日に取りたる丹土を以て、原紙四
百枚塵置の紙八帖へ神號書て是を以て大幹へ切添る也、大幹は一人にて持に重きほどのもの也、御指捧と號す
長六尺許この日統つもと云事あり、この夜は神官(神官の事後に出す)ことごとく出る、神前にて秘密の神
事あり、終に神官はみな退き出づ、神職土崎氏を始め神人等居並びて、新統人に當る三ツの札を備へ置て神
の行事あり、是は總町の中の富有のもの三人を撰て札へ書て、一人を神慮にまかせ撰出すなり。その當りたる
者へ神人一人かけり行て告る、其家俄に起出て家を鹽磨きと云事をする、家うちへ鹽をまきて掃出し、又湯へ
鹽を入れてことごとく拭立る、それより此神に仕奉る人となる也。其翌午の日神幣入、是は古統人の宅へ神職土
崎氏、神母同氏、是を始め勤番の社人巫女行てそれより神樂を奏し、六道の辻と云處へ出る、此時神幣も此處
へ至るを迎へ奉て統人の家へ入神樂を奏し、酒肴の饗應あつて翌未の辰の刻本社へ還幸なり、この日の夜兩
統人夫婦神官残らず出席、籠堂にて神樂を奏し、土崎氏統人夫婦を引て本社へ詣清淨戒の勤行あり、籠堂にて
神母舞あり、此夜氏子より出す所の燈籠百千數城下より矢橋の里に至る道路社の境内まで晝の如し。翌申の日
本祭日の朝兩統人夫婦社参この日の神酒は統人より是を供し、献膳は神職よりする神樂を奏し、巳の刻に至て
神輿出る、山王宮の大旗二本、八幡宮の大旗二本、大母衣二、この六人は具足に鉢巻して長刀を杖つく、鐵炮
弓鎗三十、神輿二基、神職神母は乗物にて供奉す、兩統人夫婦は歩行す、男は素袍烏帽子女は袴にて上下着た
る從者あまた具す、神人神女太鼓笛銅拍子獅子頭、それより練子家臺山鉾町々より飾り出す、前驅の騎馬は藩

中より若き人々物の具旗指物はなやかに出立五十騎六十騎渡る也、御旗所にて祭式ありて申の刻還幸なり。同
夜御指棒入と云事あり、酉の刻新幣本社を出て神人是を振り奉り、麻上下の警固數百人各割竹を杖にし叩き立
て、新統人の宿へ至り祝詞饗應等終りて本社へ送り奉る、この時統人の親族知音より御馳走なりと出す提灯千
を以て數ふ、此夜舊統人新統人社参して統の受け取り渡しの式あり、翌酉の日朝舊統人宿にて神職神母神祕の
行事ありて、神母丑の尊の舞と云ふ事を舞ふ。

統人の事前文に出す。

長床とは境内に三間に十四五間に棟長く造りたる屋なり、神供を始め總ての神事多くこの處にて行ふ、神職神
人を始め統人神官等齋する等の事神樂殿は取飾りて別にあれども、湯立神樂なども此所にてする、この長床
と云もの諸社に多くはありて祈願の者通夜などもこの所なり。

當番禰宜と云は、此社の神職土崎氏に屬する禰宜古より二十四人ありて、當番にて神事を勧めさせる事あるに
は本よりみな出席するなり、この外に下社家四人役人と云もの三人あり、各仕る所の神社はあれどみな土崎氏
に屬す。

神官と云はじぐはんと唱ふ統人の一たび勤たる者、その人存在のうちは社の事に預るの名なり。

神母はかうばと唱ふ、古は神職をかうばと云ふ、神父なり、是は夫婦にて此神に仕まつりしが中頃かうばを妹
に譲り、婿取て同じ土崎氏として今は兩家となりし也、是等の事みなこの社に限りたる事なり。

四間に十間許りの屋一ツ境内にあり談合所といふ。是は神官の者所々會合して此社の一歳の事務破損補理の事を辯ずる也。

① 古四王とは古志(越)族の酋長の義で、異民族の祭つた神社だと云ふ説もある。

〔参考文献〕

奥羽古史考證 (藤原相之助) 友文堂本

② 六供、前の注連と同じく、神事に關與する特權を有する家格のヤウであるが、その名義に就いては詳しく知らぬ。地名としての六供は各地にあり、それは概ね土公神が祭られてゐる。此の六供は或は限られた地所内に住む家を云ひ始めに起因するかも知れぬ。

③ 昔から安産の神として聞えてゐる。境内に抱き杉と云ふがあり、授胎を祈る者または安産を祈る者は、此の杉に抱きつき又は杉の皮か葉を煎じて飲むと云ふ事である。

④ 山玉の香は有名な神事であるが、その實際は神祕の事として明記を遠慮する。

〔参考文献〕

神主の有てる秘密 (中山太郎) 民俗學五ノ二

⑤ 祭儀に丹土を取ること、古くは神武紀に推根津彦に、天香山の土を取らせたとあり。現に住吉官幣大社では年々墳取の神事が行はれてゐる。此の丹土とりも古い由來のある事かも知れぬ。

⑥ 幣の起原は、串を捧げるに始まつたか、又は串に挟む紙(又は串に添へた麻)を捧げるに起つたかに就いて説があるが、これは串に始まつて紙が中途から加はり、後には紙が主となつたものと見るべきである。

⑦ 続人、當人と同じい當屋とも云ふ、他の機會に記載する。

⑧ 神母、人母、聖母とも書き、また仁開(人開とも訛る)とも云ひ、祠職の女性であるが、必ずしも巫女と同じではない。内容が複雑してゐるので、参考文献により知られたい。

〔参考文献〕

仁開菩薩 (中山太郎) 民俗點描

五月

朔日 天徳寺羅漢講式

この寺に光殿司畫く所の十六幅の羅漢の像あり、この日參詣尤多し。

十一日 土崎龍神祭

土崎の湊嵐町にあり、神職鈴木氏。回船海上無難の祭なり、泊船の水主楫取等群參す。

十二日 阿仁山神祭

阿仁銅山の惣鎮守なり、別當修驗和乘院、此日國主より代參あり。秋田山本の兩郡はもとより、隣國よりも商賈多く集來りて歸を開き萬物を商ふ事七日の間なり、又恒例の角力の勝負あり。

十五日 天徳寺大布薩

奥州秋田風俗同狀答

大衆勸行嚴重なり、參詣多し。

十七日 御嶽山祭

平鹿の郡横手の東なる高山鹽湯彦神社、式内の出羽九座の一なり、神職大友氏。山高けれども道險ならず、又女人を禁止せず、故に參詣群をなす。

廿三日 田村堂祭

寺内の里古四王宮の末社なり、神職鎌田氏、田村將軍の箭一筋を神體として祭る。神供に征矢二筋を添て奉り夷狄退散の神勸行あり。

廿七日 一日市の諏訪祭

秋田の郡ひといちの里にあり。別當修驗福生院、神輿御旅所へ神幸。

此月洞泉寺五月飯

秋田の郡金川の里にあり、日々且家參詣し佛前にて念佛す、日ごとに小豆飯を持來り供養する也、是をさつさめしと云ふ。

① 神社の祭日に諸商人が集り賣買したのが、我國の日限り市の始めである。市は古くマチと訓み祭りの義である。此の日限り市がやがて定市となり町をなすに至つたのである。

〔參考文獻〕

日本商業史

(諸家執筆)

歴史地理學會本

③ 箭を神體として祭つた神社は各地にある。これは始め武器で神を祭つたのが、後に武器その物を靈ありとして祭るやうになつたのである。

③ 五月飯とは田植の日に、田人に贈る食物のことで、地方により措へ方に少異がある。これは豊作を祈るための行事であらう。

〔參考文獻〕

五月飯行事記録

(早川昇)

民俗學學四ノ八

六月

七日 天王祭

秋田の郡天王の里と船越の里との鎮守なり、神職鎌田氏、此兩村の間に川あり、八龍湖水の海へ出る所にて船渡二百間ばかり也。是より先正月六日宮籠の神事神職神人天王の里の頭人村役人船越の里の頭人通夜して神樂勸行、七日期八方拜の式あり、二月廿五日味噌造酒造の神事あり、天王の里の頭人三人の内一家へ集り、大豆を此夜より廿五日の朝まで煮味噌とし、桶三ツへ入社内へ穴を穿ち納め置く。酒は頭人の家へ別屋を造り青茅にて葺是へ納め置く、是を酒殿と云ふ。船越の里にても同じく此事あり、三月中の申の日は末社の山王宮の祭式御供膳七膳神酒七通を献、四月初の卯の日には末社八幡宮の祭式、献供の外に卯の花を多く奉る、五月廿五

奥州秋田風俗問答

五九

日には頭人の家へ別家を造り青茅にて葺て、二月廿五日に造り埋置たる味噌を掘出して此屋へ納め置くなり。
廿八日箸削の神事、杉箸を調じ出す、六月朔日には頭人の家の門へ高幣を立家内を清淨にするなり、此日より
神人頭人みな齋戒して毎朝神前に再拜し、造り置たる神酒味噌に種々の品並に杉箸三膳を日々奉る、六日には
竹剪の神事、神職頭人一人を具して船越の里に至り、古より定れる藪ありて竹五本を切、外に七本切りて其竹
を包み湖水に洗ひて持歸りて社内へ納む、其夜兩村の頭人村役人等通夜し神樂殿にて神樂を奏す。七日祭式の
祝詞神樂有て、八雲立出雲八重垣の神歌をくり返しうたひて、未の刻に至りて神輿を振り、行列さまん、
にて白幣青幣に繼て牛乗と云ものあり、是は烏帽子に狩衣着たる男の顔丹ぬりにし弓箭とり劍帯て、全體黒き
牛に乗この黒牛は常にあらぬものなるに此祭に逢せんとて遠き境より牽き來る、年ごと必ありて古より缺ける
事なし、五人の頭人牛の左右を圍み行く、此次に童男四人烏帽子素袍にて八ツの玉瓶に白強飯を盛たるを楡の
曲物に入、首にかけて一人にて二ツづゝを持つ、神輿へは神職神人村役人の者大勢供奉して渡場へ出る、其時
船越の里より船を飾り舳舻へ一丈五尺の柱を立て、大綱二本を其上へ張り笛鼓にて囃す者二十人にて中流へ乗
出す時、雲舞の者一人、全身赤く裝束して柱へのぼり四方を拜し其綱を渡る、その時神職鎌田氏汀に立て神秘
の加持あり、扱綱を渡る事三度にして船はこなたの岸に着く是を雲舞の船と云ふ、或は蜘蛛舞とも云ふ。
是より船中の者みな神輿の供奉す、蜘蛛舞せし男も上下着替て御供して御旅所に至り八方拜神樂などありて
還幸なり。同じ夜亥の刻頭つもの式ありて、これより一年の頭を定む、神職より昨日きりたる竹の賣前に納

め置たるを受とり、頭人一人へ一本づつ渡し、新頭人へ遣し門へ立て頭の當りたるを傳へ、猶頭の勸式をその
夜傳ふるなり、是を頭わたしと云ふ。是にも神秘ありて、其家に旅客など居れば追拂ふなり、矢橋の山王のは
統人と云ひこゝのは頭人と書きたれり、それより六月名越の祓、九月新嘗等ありて十二月十七日には天王船越
の頭人宮籠し、六月祭の時の八ツの玉瓶に入たる白強飯を是まで其儘にして置て、此時に至りみな麴となりあ
るをもて酒を造るなり、其月の晦日に神職鎌田氏齋して社殿のうちにて御供を吹き御膳五通、それへ造りたる
神酒を五通り献する、神酒は明る正月七日まで毎朝供する也。すべて此六月の祭は籾の川上の昔を模して神輿
は稲田姫とし牛乗は素盞雄尊とし、味噌酒を調する時天王の里には老嫗一人を撰て其事をなさし、船越の里に
は老翁一人を用ゆ、是は手摩乳足摩乳とし八ツの玉瓶は酒をたゞえし瓶とし、蜘蛛舞は大蛇を表するとなん。

同日 神變大菩薩

城西の寺町にあり、六郡の修験悉く集りての供養なり。

八日 高尾山祭

川邊の郡女米木の里にある高山也、別當修験大王寺、大晦日より正月七日まで山籠、此時深雪なれば絶頂へは
至りがたく、半腹の末社觀音堂にて修法す。三月二日三日は絶頂の本社へ參籠、四月七日八日同じ、この日遠
近より群參す、末社眞山權現不動山神等同日合せ祭る。

同日 末社雨乞長根藥師祭

雨乞長根は高尾山に對する峰續の山にて、由利の郡の境なり、此日合せ祭る。古は生る燕を供せし今は木にて造れるを奉り、終りて一町ばかり傍にある村杉の池へ投する、これ祈雨の神なればなり。

十二日 金沙御靈宮祭

前に出せり、神職道田氏、宵祭には燈火甚盛んなり、此日も又猿大夫兩人参りて神酒を供す、諸人祈願のもの芋紅粉おしろいを奉る。

十四日 夷祭

社は城の南の郭外にあり、神職淺野氏、前日の宵祭参詣群集す、社の西は川を帶たり、故に此夜祈願の者は小枝へ蠟燭を點じ流すこと水を覆ひ、陸續して絶へず。

十五日 伊豆山權現祭

仙北の郡花立の驛にあり、神職三浦氏、神輿官巡りの事あり。四高天とて四人の農家古より定りて有、神輿の四方へ供奉して總て祭の事をなすなり。

同日 羽黒山祭

秋田の郡中野の里にあり、別當修驗大瀧寺、参詣群をなす多く女なり。

同日 熊野祭

仙北の郡六郷の驛にあり、神職熊谷氏、近里ことに崇尊す。

同日 兩津八幡祭

秋田の郡寺内の里にあり、神職高橋氏、この日神供は山海の珍味へ蓬の箭一筋添へて奉る。

十六日 雄鷹本山の五社祭

赤神山なり前に出す、此月の祭式十三日より十五日まで神樂あり、十五日夜は巫女四人にて疫神祭の舞有、これをおせう遊びと云ふ、又劍舞もあり、此日は神輿官巡りの事あり、此山は一方の靈山にて又海岸の風景甚奇異なり、此時風波穏なる頃なれば遊觀をかねて遠近群参す。

同日 函岡神明祭

城西の矢橋の里の南の端にあり、十五日の宵祭参詣多し、この社へ祈願のもの雞一双を奉る故に境内雞群をなす。

同日 六郷神明祭

仙北の郡六郷の驛にあり、神職山口氏。

同日 角館神明祭

仙北の郡角館惣町の鎮守なり、神職鈴木氏。

同日 湯澤神明祭

雄勝の郡湯澤の驛にあり、神職高橋氏、右三社諸人群参するのみにして祭式は異なる事なし。

十七日 雄鹿直山五社祭

赤神山前に出せり、祭の勢大やう本山に異なる事なし。この地は山のそびらにして山足ゆるやかにはしりて海岸へは遠し。

同日 辨天祭

城西南川尻の里の上野にあり、神職近谷氏、此日の神供雉兒海魚湖魚海陸の菜を献す。

十八日 前所大日堂の虫追祭

秋田の郡前所の里鹿角の郡へ接するの地なり、別當修驗扇田寺、この日藁にて大なる人形を造り、別當祈念して後村人みな出て笛鼓にて囃し立て、里の端へ此人形を送り出して立置くなり。

廿一日 土崎神明祭

秋田の郡土崎の湊の町總鎮守、別當修驗三光院、神職土崎氏、宵祭の燈火もとも盛んなり。此日神輿穀保町御旅所へ神幸、供奉の練物山鉾等町々より數を盡して出る、町々もかたみに競ひて客の多きを晴として、知る知らぬ者も來るにまかせて響應するなり。

廿五日 熊野祭

城西の寺町の時宗聲體寺にあり、寺の鎮守なり、神職鈴木氏、宵祭燈火を競ふて參詣多し。

廿八日 太平山參

城東五里にある高山なり、別當修驗大壽院、五月六月七月の三月登山す、麓の野田の里より急に登ること三里甚險峻なり、雪消ること遅く降ること早ければ右の三月の外は寒ふして登るべからず。此三月日々道者絶る事なし、皆七日齋戒して登る、或は山上にて通夜す、此日參詣ことに多し、夜半より赴く鈴の音法螺の聲絶す道路絡繹たり。

同日 不動祭

城外馬口勞町の川岸にあり、神職高橋氏、宵祭前川に蠟燭を點じ流すこと夷祭に同じ。

- ① 牛乘といふ神人は、秋田から二百餘里を隔てた播州明石市大藏谷の稻爪神社の祭典にも出る。此の者は顔面白粉で塗り、額に大ノ字を墨書し袴を着て、赤青の紙で貼た笠を被り牛に乗るとある(郷土趣味三ノ四)。牛は穀神の象徴とて、かゝる信仰が生れたものと考へる。
- ② 蜘蛛舞も秋田から約百里を隔てた下總布川神社の祭に出る、ツク舞と全く同系のものである(利根川圖志卷六)。これから推すも一社限りの神事の少いことが知られる。
- ③ 雨乞には各種の咒術的行事が行はれたが、燕を放つ事もその一種であり、燕は古くから神の使令であつて、神と人の通介と信ぜられてゐたからである。
- ④ 古くは皇大神宮の分祀が許されなかつたので、漸く神明宮の名で祀つたものである。雞は天宮戸の常世の長鳴鳥の故事から、神明宮の使令と考へられたのである。
- ⑤ 虫追に造る人形を實盛と稱した。これは稻虫をベツタウと云ふたのが別當となり、次で齋藤別當實盛に附會されたのである。

〔参考文獻〕

實盛塚 (柳田國男)

郷土研究二ノ三

七月

十六日 白旗明神祭

秋田の郡山崎の里にあり、神職は三田氏、此日境内に角力の勝負あり参詣多し。又末社に白駒の神黒駒の神有牛馬の病を祈るしるし有り。

十七日 熊野祭

仙北の郡檜岡の驛にあり、別當修驗大寶院、神輿宮巡り總氏子供奉、境内にて角力あり。

同日 観音祭

仙北の郡強首の里にあり、別當修驗小山寺、宵祭に神輿村中を渡る、獅子頭練もの惣氏子各燈籠にて供奉す。

廿四日 愛宕祭

雄勝の郡湯澤の町にあり、別當修驗永禪院、神輿御旅所へ神幸、練もの山鉾など町々より出る。

廿七日 諏訪祭

仙北の郡六郷の驛の惣鎮守なり、神職齋藤氏なり。此時の神酒は總酒屋より奉り、魚類は肴問屋より奉る、社

前の兩柱へ左は蟹節、右は鯡を結付て鰯口の緒は和布を用ゆ、供御は海山の廣もの狭もの時新の菓なり。此日寅の刻湯立神樂、辰の刻神輿御旅所へ渡御、神輿鳥居を出る時注連切の舞有て注連繩を切落す也。祈願のもの木にて造れる録を奉る、何方にても此神は木録を奉るなり。此里に南諏訪と云社又あり、神職神氏、同日祭あれども湯立神樂の外異なる事なし。

同日 大曲の諏訪祭

仙北の郡大曲の驛の鎮守、別當修驗金剛院、是は前日に神輿町々を渡る、惣氏子供奉して練物など出づ。

同日 淀川の諏訪祭

仙北の郡中淀川の里にあり、供御に烏賊、數の子、鮎、鯖、蟹を奉る、蟹は必ず供する也。

此月孟蘭盆聖靈會、諸宗の寺院みなあり、就中、淨土宗誓願寺朝より晦に至て供養す。

- ① 社前の兩柱へ魚類を結付るのは、古い懸突(カケジシ)の行事で各地にある。諏訪は靈神であるから山野の鹿や雉を懸くべきに、さばなくて魚類を懸けたのは環境のためである。
- ② 信州の諏訪本社では、これを確録(ナギガマ)と云ひ、蛇の形をなし神體の象徴のやうに考へられ、且つ尊崇された時代もあつた。木録は是を眞似たものである。

〔参考文獻〕

諏訪史(前篇)

(宮地直一)

諏訪教育會本

奥州秋田風俗問答

八月

朔日 神明祭

秋田の郡大館町の鎮守、別當修驗順禮寺、七月晦日宵祭參籠の者多し。この日神輿御旅所へ神幸、總氏子供奉山鉾等多く出づ。

五日 副川神社祭

秋田の郡浦の里にあり、高岡山と云ふ、神職八澤木の太友氏、此神は式内九座のうち也、此山女人を禁ぜず、此日參詣ことに多し。

十一日 神明祭

秋田の郡大館町にあり、前に出る神明の社とはことなり、別當修驗傳行院、朔日の祭に練物に出たる兒童、この日この社へ參詣して踊興行す、是を暮收めと云ふ、見るもの群集す。

十五日 大八幡宮神事

北郭にあり城の鎮守、前に詳し、この日朝城より代參あり。神輿は御旅所金照寺山へ渡御、神幸式は前に出る正八幡宮に同じ。

同日 金澤八幡神事

仙北の郡金澤の驛の古城に鎮座、神職三浦氏、此日献供は神酒へ椿の葉松竹を添る。曉丑の刻に湯立神樂あり此神鎮座のために金澤元町、金澤中野、金澤西根、金澤東根の四村殺生禁斷にて、鳥獸を喰はず又死人を葬らず、他村へ埋葬するなり。

同日 神宮寺八幡祭

仙北の郡神宮寺の驛にあり、別當眞言宗華藏院、十四日夜半神輿御旅所白山の宮へ渡御、供奉の燈籠二百ばかり、此日午の刻還幸。行粧は鎧櫃一ツ對、挾箱對、白鳥尾鎧、臺笠、立傘、長刀、双籠、長柄十筋、弓十張、鐵炮十挺、練子十餘人、瀧水御正體大幣、獅子頭、笛鼓銅拍子六供、古より定れる家六戸ありて供奉す、青幣白幣祝詞神輿白幡八流惣氏子なり、此社は鎌倉右幕下再建、造營奉行梶原景時の棟札今に存す。

同日 淺舞八幡祭

平鹿の郡淺舞の里にあり、別當修驗三光院、神輿御旅所へ神幸、練物山鉾供奉す。

同日 若宮八幡祭

太平山の麓の堀内の里にあり、神職番場氏、此日隣村の目長崎の里利右衛門と云ふ農家より神酒を献ず、去年の冬寒中に造り置くなり。

同日 沼館若宮八幡祭

平鹿の郡なり、神職宮川氏、この社へ祈願のもの小椀あるは穴ある小石を献ず、この小石をカアハアと云ふ、

何の名なる知らず。

同日 二井田の八幡祭

秋田の郡南比内なり、別當修驗三光院、この社は泰衡の舊跡にて威靈あり、村人崇尊して參詣多し。

同日 月山祭

平鹿の郡増田の里に有、別當修驗圓滿寺、神輿この日御旅所へ神幸、山鉾練物あり。

十七日 萬原の觀音參

秋田の郡北比内にあり、別當修驗自正院、この堂を世俗大觀音と稱す、疱瘡の祈願をして、願果しには小雪駄を献す。

十八日 御嶽藏王祭

雄勝の郡西馬音内の里にあり、別當修驗明覺寺、この日神輿御旅所へ神幸。山鉾練物總氏子供奉境内にて角力あり。

社日 保呂羽山新嘗

神職大友氏、前齋三日にして此年の五穀の初穂を以て供御の飯を炊き、又神酒を造りて献す、奉幣祝詞次に彌勒堂にて神樂勤行。

- ① 死穢を極端に恐れた古代民族は、死といふ詞を用ふる事さへ忌み、いつて屍骸を他村に埋葬した例は諸方にある。安藝の宮島では死のことを「廣島へお茶買ひに往つた」と云ひ、屍體は對岸に埋めた。また伊豫の今治で同じ死のことを「廣島へ煙草買ひに往つた」と云ふのは、これに縁を引いた詞であらう。墓地の無い村は各地にあるが、殊に大和宇陀郡には八ヶ村の多きがそれである（同郡史料参照）。
- ② 穴のある石や皿や椀を報賽する民間信仰は諸國にある。キョウ神とも皿つるしとも云ふが、耳疾の平癒を祈つたもので、穴を明けるのは、耳の穴が通るやうにとの類比咒術の思想に由るのである。

九月

九日 東島海祭

雄勝の郡相川の里にあり、別當修驗福壽院、社まで麓より一里許、頂に鳥の海と云ふ清泉あり、此神豐作の神なりとて參詣常に絶ず、この日尤群をなす。境内の土を持來りて田畠の農稔を祈り秋に成て返し奉る。

十日 澤尻稻荷祭

秋田の郡南比内にあり、鹿角の郡と犬牙相接するの地なり、別當修驗天龍寺、近村尤信仰して此日參詣多し。

十五日 平内の白山參

秋田の郡平内の里にあり、別當修驗不動院、此社を俗に瘡神と稱し、萬の瘡の病を祈る、木にて造れる小弓又大豆を小俵に造りて奉る、此日群參す。

十六日 水尺明神参

仙北の郡若松の里にあり、別當修驗妙覺寺、此日参詣の諸人、活ける魚を奉り神子石と云所の淵へ放つ。

十八日 辨天祭

城東の正洞院境内にあり、此像は弘法大師一萬座護摩秘密の灰にて造れる像の背に大師の手の形を押し、その中に空海の字並に書印あり、外文古くして讀得がたし、かいはいを手形の里と云は此故なりとぞ、此日参詣甚多し。

十九日 明澤の藏王祭

平鹿の郡の明澤の里の高山なり、別當修驗光明院、この山も東島海に同じく豊年を守れる神なりとて、春の社日に社の土を持歸り、この祭の日返し奉るなり。

廿九日 三社祭

城西寺町の鱗勝院の鎮守、神明、白山、秋葉の三社なり、神職三田氏。献供は生菓子、干菓子、大根、生豆腐小豆飯を奉る、此日参詣多し。

① 神社佛閣の靈地の土をとり、田畠へ撒いて豊稔を祈る信仰は、古くから廣く行はれてゐた。山城の伏見人形の起原は始め稻荷神社の土を参詣人が持歸るので、社前に住んだ農民が土をこねて鈴の形ちとなし、これを田豊(デンボ)と名づけ初穂料をとつて授け與へ、後に田豊から人形にまで發達したのであると傳承されてゐる。

〔参 考 文 献〕

砂撒き信仰

(中山太郎)

日本民俗學風俗篇

② 灰には一種の咒力があると信ぜられてゐた。崇神記に神の足跡を知るために、灰を床の邊に撒いたことを載せ、仲哀記に神功皇后が征韓渡海の折に、鼠木の灰を鹽に入れ海に散し浮けたと記し、共に灰の咒力を擧げてゐる。諸國に灰塚灰佛、灰山など多くある。

〔参 考 文 献〕

灰の咒力

(中山太郎)

民俗學辭典補遺

十 月

朝日 光飯寺饗祭

雄鹿の光飯寺なり、浦々の漁戸より小石多く持來るに寺僧光明眞言を一字づゝ書し、神前にて法樂加持してあるを漁人持歸り五穀を添へ己が漁獵場の海中へ散らし入る、これ漁獵の利得ん事を祈り、且數萬の魚の爲に冥福を回向するとなり。

十日 金毘羅祭

土崎湊、修驗龍明院にあり、三月十日花摘神事あり、此月は本祭日なり参詣多し。

此月雄鹿の里々饗祭諸社にあれども異なる事なし。

① 鱒は秋田の名産で、冬期に雷鳴のある時捕れるので、魚へんに神をつくり鱒と云ふと傳へ、更に此の魚は佐竹氏と關係があり、佐竹氏が水戸に在りし時は常陸の濱に棲んだが、秋田に轉封すると共に鱒も同地に移つたと傳へてゐる。斯うした傳説が鱒祭を生んだものと考へる。

十一月

七日 保呂羽霜月神樂

八澤木の太友氏が家にてするなり、大友を始め相屬する神人みな朝日より齋戒して八日に至る、四月の祭式に同じ、まづ神壇を莊嚴して御供山川海野のくさぐさ鏡餅昆布神酒を献じ、御嶽山高岡山の兩社も合せ祭る、神樂坐の供物は高案一脚を居へ小餅三十、是は平鹿の郡晝川の里に一畝餘の御供田あり、女人牛馬不淨の者を入れず齋して耕作し、この餅並に神酒にして献す。昆布神酒二瓶へ土器二ツ添て神巫舞ふ、殊に此土器へ瓶の酒を移して奉る、賑の鮭魚御膳十二、米と小餅とを盛て是又神巫舞ふごとくに献す、湯立神樂の次序は大拍子は笛鼓銅拍子合せ奏す、次に舞臺清は大盞二ツを臺二ツへ居へ舞臺へ備へて加持す、次に秋修行は膳十五、膳へ米小餅二品を入舞臺へ備へ、膳ごとに大盞を置き酒を盛り紙をひねりて盞の中へ入れ、笛鼓にて秋を修す、次にけんさんは湯釜の前に坐して幣帛を振り勸行あり、其時の謳ふ歌

霜月は霜をいたゞく八乙女の心も澄める朝倉の聲

けんさんは如何なる文字か詳ならず。次に湯清淨、次に五調子、次に湯加持は神樂役湯箒を持、四方を拜し舞ふ、次に神巫舞、かくの如く湯加持、神巫の舞四度、次に中倉は雞兜に帷子の上に淨衣着て輕衫かきんに脚絆し舞ふ、次に湯加持又神巫の舞ありて、繼湯の一の釜二の釜三の釜、是は六郡の古戦場の爲にするなり、次に劍舞、神巫二人にて湯箒を取て舞ふ、寶劍を拔持舞ふ、此時の歌

東方より今ぞ寄ります長濱の芦毛の駒に手綱よりかけ

よりまさは早よりませやさはら木のさはらの山にさはりくまなく

うし鳥のゆくもかへるも知らずして何とて浪路わすれざるもの

侍の飼ふべきものは庭の鳥かけよ／＼とうたふなるもの

などとなり、次に神前奉幣、祝詞、深秘あり、次に神樂役奉幣をとりて五調子を舞ふ、御供頂戴、次に惠比壽白張釣竿を持て舞ふ、次に神送、次に打身、是は豊のあかりなり、次に解齋。

中の申の日山王の霜月神樂

城西矢橋の里の山王、前に出せり、この日兩統人神職土崎氏先立て社參、御供神酒洗米島臺押三峰みやまを献じ神拜し、終りて長床にて神樂ありて御供頂戴、神職梅の肴にて酒事してそれより湯立神樂、その時神前へ赤飯御供二十一膳を献す、神樂は終夜あり。

① 此の神樂は、東北地方に行はれる法印神樂の影響を少しも受けぬ、純粹の神樂だとのことである。

〔参考文献〕

保呂羽秋の霜月神樂 (本田安次)

旅と傳説卷一一連載

- ② 神々への供御は、煮焼きしたものを故實とするか、是に反して生のまゝを本義とするかに就いては異説區々であるが、こは煮焼きしたもの——即ち人間の口に入るべきものを古義とするのが正しく、生の供御は第二義と知るべきである。
- ③ 此の咒歌は古く「よりましは今ぞより来る長濱や、芦毛の胸に手綱ゆりかけ」とあるが、その出典は明確でない。歌の姿から見ても中期のものと思はれる。
- ④ よりまきはよりまし(遷坐)の轉訛であるが、これを源三位頼政に附會し、種々なる浮説が生れるやうになつた。

〔参考文献〕

頼政の墓

(柳田國男)

郷土研究一ノ九

十二月

十六日 白山比咩神社御年越

保呂羽山の末社なり、神職宮川氏、八澤木の太友氏に屬する禰宜なり。此日三峰へ切藁を敷き桑を献ず、數十
二なり、毒瘡を患ふもの祈願するに、笹船へ大豆を盛て奉る、人誤てこれを喰へば忽に瘡を生ず、又養蠶する
もの桑を献じて其利を祈る。

此月諸社に御年越の神事皆あり、させる事なければあはさず。

卅日 三十番神大松明

平鹿の郡山内の筏の里にあり、神職佐藤氏、此夜大松明二本、長五丈許廻一丈五尺許、上筏の里より一本、下
筏の里より一本、是を立るもの代々定りたる家あり。

此日城西寺町の一向宗西法寺に年の始めに佛前へ供する餅を調する、初臼の餅を丸餅に幾つもして、其上へ粒の
小赤豆を散しかけて、本尊祖師前などへも献ず、是をおひは不唱ふ、この名義知れがたし、古よりさ唱へ來
れり。

此日年籠の事諸社大やうあり、深雪の頃なれば山頂などは到りがたければ、麓の末社などにもする。又里民
氏子等も共に宮籠するもあり、されど異なる事あらねばあはさず。

六郡の神佛無數なり、些の異なる事あるを記す、異なる事なきは古迹勝地といへどもあはさず。

- ① 白山(シラヤマと訓むを正しとする)神は、菊理比賣命を祭ると傳ふるも、土俗神道の觀點から云ふと北方民族の神
が我國へ移し祭られた渡り神のやうに考へられる。
- ② 日蓮宗の詐略で、我國の神々が一日交替で法華經を守護するとして、三十番神なるものを言出したものであるが、無稽
なる邪説であることは勿論である。

秋田城下之部

正月

元日 門松の事

異なる事にてはあらず、但竹は雪深きゆゑ稀なれば、おほうやう松のみ立て根に櫛^{ツギ}を結びそへ、飾葉には昆布、枝炭、申柿など包んで、伊勢海老などの大海老、海産には稀なれば是にかへてはにしん(葉餅)といふを添る也。これは餅の首尾全きものにて、さもしげなるものゆゑ常は下部も喰はぬやうの物ながら、正月の祝には多く用う、橙も國産ならぬば強て用ひず、裏白は多くあり必ず用ゆる也。

蘇民將來の札の事

仙北郡北浦の庄にては、蘇民將來子孫門戸と紙に押したるを、修験者の配り來るを戸外に出す事にて、平鹿郡雄勝郡の里々にては、白求^{シロモト}の根をとり置て此日香爐へたて神佛へ供へ、家内の者もたきて襟袖などへもとめ、疫病よくる厭勝^{イヤシホ}とするなり。城北三十里此内の別所村と申に若水汲みに上下大小にて出る、又、昔は烏帽子着て汲みしとて、其形棧俵を着て出なるもて、またく戯れたる事には侍らず。

鏡餅の事

士家には具足の餅なり、それは八幡宮あるは家の氏神、屋敷の鎮守、信する處の佛神など、農家は鍬鎌臼杵をはじめ、品々の農具女工の具まで備ふ、工商は是に準ず。鏡にむかふての行事前に侍らず、松櫛くるみ、かや栗など添て供す、又わたり六七寸の丸きをあたゝけといふ二つを一重として姻親互に贈り合ふなり。

屠蘇の事

大やう尊長より飲はじめ候、年少より飲はじめ老人飲み納むるも稀には侍り。

組重の事

数の子、田作り、たゞき牛蒡、煮豆等別に異なる事なし、但鱈^{タラ}の子をぶりこと云ふを数の子と共に用ふ、ぶりこは数の子より粒々尨大にて、生は青黒色にて煮熟すれば黄なり。

年徳神の棚の事

新敷板にて兩方の長押に釣る、或は薪を割つて四角に格子にからげ造りて釣るも侍り、供物は鏡の餅二つを一重として白へぎにもり、栗櫃の實くるみを添て供す、この白へぎは山家のもの造りて年の市に持出るを買て、およその神佛に奉るがおしきとする、おほやうの事にてぞ神へきとも申す。

別に神へきへ餅、脛、煮ものを少しづゝとりて恵方棚へ供し、又門へ出て餅松へも供する事の候。

恵方参りの事

惠方参りとはあらず、士家はまづ城北の八幡へ詣で、それより城へ登るなり、大やうの事にて農家は其里々の鎮守神にまれ佛にまれ行て拜す、工商は心々に参詣するもあれど、俗に云には候はず。

餅花の事

餅花とも藪玉とも互に云ふなり、年の餅を搗く時にさゝ丸くとりて、藁へひし／＼とぬきて是を稻の穂つかねたるやうにして、惠方などへかける、なべての事には候はず。

破魔弓羽子板

破魔弓は普通にて八寸、羽子板はかたの如く候へども、もとも兎物にて候。

破魔の事、是は城東二十里に仙北の郡角館申す處（一門の館あり、商家士家二千餘戸）雪消えて後はんまと云て、竹あるは柳などを輪に造つて投るを、こなたにありて打つ事候、兒童の戯れながら人に疵つくる事いでき侍れば今はせず。

子供遊の事

羽子、手まり、双六など、世に異なる事には候はず。

今日寺社に一年の厭勝トひの事

此事普通に候はず。

二日 掃初の事

この習はしに候はず三日まで掃かぬ家の侍る、農家には晦日の夜圍爐裡をまとめ、搔ならして三日まで火箸とらぬ事の候、苗代にて鶯居させじとの事と云へり、なべての事には侍らず。

城北（十八里）能代（三千四百戸）の港には、醫師の年禮此日に限れり、家法の丸薬など年玉にして曉を拂て出て夜に入る迄なり、それにも餘れるは年禮に行かぬ里の風にて候。

三日 謡ひ初めの事

四民とも謡ひ初め二日にて候、此夜吸物に例の葉餅の用ゆる事に候はず。

門松とる日の事

大やう十四日にて候、松門飾みな其夜の爆竹にて焚なり。城北（三十四里）比内の大館（支城一門居、士商家二千五百戸）にては四日にとるなり。

吉書始の事

させる事侍らず、大方は元日に月儀帖あるは朗詠の詩歌など書して、武藝の始は其師家にて此月中よき日を選びて候へば定れる日はなし、農工商女工なども八日おりと申して、八日より業を始め候、大やうの事に候。

山野浦牧など異なる事にて候はず、浦里港などに船乗り初させる事なし。

親屬往來の饗應の事

年禮には身に病あるか、又忌む事あるかならねば、七日頃には極めて往來するなり、親類の來れば喰積組重を出し盃を出す也。又ふきとり餅といふを出す、ふきとり餅は餅をあぶり湯へ浸て大豆の粉をくるむ(中山曰、他地方の安部川餅なり)人の風雪に逢て倒れたるをふきとりと云ふ、其姿に似たればかく名づけなん。又ふきと云ふも草の名、富貴自在にしてと云ふ語ひものゝあるにつけて、富貴とり餅といふとも申す、風雪とりはいまはしければかく祝ひけん、八九歳の兒の年の始に來ぬるに引出物の事をおひきと云て松の小枝へ文の字錢十錢二十錢つらぬきて、この馬やせてさふらへどもとて取らす事の候。

此月の内必ず親族互に招く事有り、年始振舞と申す饗應異なる事なし、但皿には餅の鯛を用う。すべて元日より二月朔日まで祝ひの膳には餅の鯛を用う也、椀飯と申し候事候、仙北の郡角館にて此年始振舞をわうばんふるまひと申す。

七日 七種の粥の事

雪間に若菜も埋れはて、歛にてやをら掻きのけされば得とられず、たひらこ佛の座などは芽も出ず、只芹と菘とをもてたゞく時、唐土の鳥といふ事異なる事候はず、山家などにてはだんだらはたきにたらはたきと申す事も候。

十一日 鏡ひらきの事

具足の鏡餅ひらくに大やう二十日を用う、其餘神佛のもちひは、替は二十五日に天神のもちひをひらくなん

どに候。

藏びらき四民皆同じ、此日商家の帳とちとて大福帳を作る、又津々の問屋諸國の客船へ年禮の状を出し今年來船の約をする。農家は仕事はじめとて男女おのゝが、すべき業を形ばかりなし置く也。

此日物語座頭と申すもの参り候、一連に五人七人各もの語一を申す、これは昔琵琶にて平家を語りたり。

櫻は七ヶ日に散りけるを、名残を惜み天照る御神に祈り申されければにや、三七日までなごりありける、君も賢能にてましませば神も神徳をかゞやかし、花も心有ければ久しく輪をたもちける。

是等の事申たりし其名残の残れる今も物語と云ふにて候。

それ物語かたり候、明きの方から福都座頭参り、此屋敷益繁昌にて四方四面に蔵を建て、鶴龜までも舞ひこみ富貴萬福榮えたる物がたり。

それ物語かたり候、是の御亭主は長者になり、大黒形に恵比壽顔、しかもお手回りまで福顔にもつくしと榮えたる物がたり。

何の曲節もなく、いと早く息つきあへず申にて候。

城北(十六里)日本の郡檜山(土着の太夫多賀谷氏居館あり、土家商家四五百戸)多賀谷氏に、昔より家に傳へたる音神の一軸あり、幾もとせの前より見たる者なければ、繪か書か何やうの物なる知れる人なし。さるに京の北野の松椿坊といふより、年々連歌の百韻を送り洗米と筆三本と來る、此一軸を十日より書院の床へ十

襲せしまゝに飾り置き、香燭と京より來りける品々をも備へ、主人は七日齋して居て其夜書院へ出て家の子等と圓座し明し、十一日寅の刻ならざるに彼の百韻を披講する、發句は年ごと宿の梅に題せしものなりと申す。此の一軸を一年あるじの見んとせし事ありき、われ主として何やうの物なる知らずやあるべき、ひとの見んは恐れありぬべし、われ見んは何じよ事のあらんとて館の後の霧山といふに登り、相具したる人々を遠ざけ一軸をなから開きけるに、館より火出たりと見え、そなた一同に燃え上りける、この祟なるべしと胸にこたへぬれば見もせで押まき懷ろにして馬を飛せ歸來て館の門に至れば、今まで猛火と見えて跡かたもなし、具せし者共も只あきれけると也。これは百とせばかりの事にて世の口碑にとまれり。其開きた時紅葉のはら／＼と降かゝりける、一葉二葉巻をさめたる今にそれがまゝなるとぞ、霧山の天神とて人の知れる事久し。

十四日 道祖神祭の事

此事は十五日を用う、是を俗に歳さいの神と申す也。此日には左義長をし待る是を鎌倉かまくらと申す也。鎌倉かまくらの祝の躰は二日三日ばかり前より、門前に雪にて四壁を造り厚さ一尺二尺にし水そゞき氷かためて、それへ其日には茅を積み門松飾葉など皆積み、四壁には紙の旗さま／＼の四手切かけし神など飾り、むらわべ打群れほたゞき棒てんで提て、往きかふ女あらば尻うたんと用意す（若き女など此日は恐れて多くは往來せず）木のほら吹鳴らしてや、暮れ行く頃、机に餅と神酒を供し火きりて焚付る也。火の熾んに燃え上るを傳へて四壁に立たる米の俵結付し標を引きぬき／＼火を移して振まはす、これを見んと堵の如くに立つどひたる中よりも、若き

者ども走り入て同じく振上、手俵は二百三百用意しつけ替へ／＼振らする也。馬持たる人々は馬にも見せんと己れも馬にも火の覺悟して乗り立／＼通るに、馬驚かさん事に拍子たて火ふりかくる也。此事は家繼すべき男おとこを産たる家にて其子の十五になるまではする事に候へば、一町には三四五六は必ず有る也。其夜は親族集りて酒盛りし夜の明るも知らず譚ひ舞ひするに外通る人の見知らぬ立入りて、譚ひつゝ立ち舞かなづる事も候なり。飲食ことなる事もなければ多くは例の餅の吸物ふきとり餅にて候。紙の旗に鎌倉大明神と書き候は如何なる神にて候や、左義長なども書き候、火を焚き候時チャアホイ／＼と囃す、又詞あり、

鎌倉の鳥追は、頭切て鹽付けて、鹽俵へ打込んで、佐渡ヶ島へ追てやれ、佐渡ヶ島近くは鬼ヶ島へ追てやれ是は郭内侍町の躰にて候。郭外の町々にも候へしが、家居建込みて火の災を恐れてや今はたま／＼にて候。田家にもあれど十五日夜にて一ト里に一所あり、きはめて有にもあらず。

ほたゞき棒は柳を三尺ばかりにし白く削り、其先きを削り掛のやうに削りて赤く染む、自然男根の形にも似かよひたり。爆竹の時の物故に火焼棒なりと云ひ、又若き女の子あらん事を祝ひぬるものなれば子抱棒なりとも申す、粥杖の趣もはらめり。

十五日 歳さいの神の事

是は郭外の街坊を七つに割て、其一つより作り出す年々順番なり、其體は歳さいの神の禊まじ倉を一人にて輕る／＼と背負ふほどに造り置き（年々用る物なるに、此日過ぎれば城西の山王宮へ納め置くなり）内には雌雄の紙雜を

入れ、幣帛を納めてほたき棒の大なるを飾り、一人これを背負ふ立烏帽子に水干を着、顔おかしげに彩色して其先に出たつ、引つゞきて此年に當れる町々より十四五以下の男兒を色々の姿にそうぞきて、雪車を船或は屋臺などに飾りなして上下着たる警固襲着たる乳母などあまた引供して二十も三十も出す事にて候。まづ城へ登りて手ごとにほたき棒を杖にし、床の上を大につきとゞろかして堂を背負ふたるもの聲ふりたて祝の詞を申す。

さいの神のお祝ひは、戌亥のすみに甕七つ、七つの甕に湧く泉、若君様十三人お姫様十三人、これの館のお知行は、萬々億々數知らず、四方の山よりこがねしろがね湧くように湧くように

あまたの兒ども皆同音に申す也。『酒、菓子、豆腐、まかでつ』それより家老の宅をめぐり町の奉行へも参る其さま皆同じ、家々にて皆饅頭など出すなり、この祝詞あらたに作り出た事なし、年々同じことを申す。

村里にては此日夕暮近きより村童等打ち群れて、木の法螺吹きならし田面へ出、わたり烏を追ふまねびし近き里々へも行きめぐる、月明き頃なれば夜をかけて囃しあるく、又雄勝の郡湯淺(一門の居館あり、士商家千餘戸)にては烏追粥とて白粥へ餅を入る。烏追菓子てふものを作る、餅にて猫犬紅葉などの形にしいろいろ色どりて互に贈り合ふ也。この造りたるさゝやかな犬を蔵の戸窓に置きて、物盗まれぬ厭勝とす。

削り掛の事

この事風俗には候はず。

繭玉の事

前にも申せし如く繭玉とも餅花とも申す也。是は若餅を搗く時に團子の大きさにして柳あるはみづ木と申すに枝ごとの先きに付る也。九日の日には柳市とて城に近き村里より柳みつ木切りて出す、その枝多からんを撰み買て右のやうに造りて長押に掛くる、小さき枝にも造りつけて神棚佛壇へもさゝぐるにて候。

十五日 あづき粥の事

異なる事候はず。

大のこんがうの事

前に申せしほたき棒の先きを陽根の形にも削りなす事の候。

わか餅の事

小正月の餅と申し候。十五日を小正月と申すによりての事なるべし。十一日より十四日までに搗き候也。

卯杖卯槌の事

前に申せし也。異なる事も候はず、此頃綱引と申す事をする里も候、神事にてするもあり、又戯に眞似るもあり、左右へ分りて勝負を争ふなり。但城北能代港にては如月の未雪消えて童部の遊びにするか、稍この事日に暮りて後には盛なるもの共出て、碇綱など持來り双方旗おし立拍子本太鼓の相圖を定めて、一方五百人六百人もとり付て引合ふ事の侍る。

十六日 齋日の事

農工商ともに業を休みて餅喰ひ酒飲みなどす、老翁老姥は寺々へ行く也。すべて奴婢をば一日の藪入りせざるにて候。

二十日 ちびす講の事

この事はこの月にはせず。

此月萬歳の類

萬歳はもと三河の國より常陸へ來り住てけるが慶長年間この地へ移り來れりと申すなり、古き記録などありげに候。針生清太夫とは代々の通り名なり。烏帽子に松竹鶴龜を染たる水干着て才藏はそれらの類より口利たるもの擇み出して伴ふ、大形の廣袖厚綿入を着て淺黄の頭巾也。城へ登りて祝の詞を申し、それより士家の町町を回る。其詞十二段家建萬歳、經文萬歳、神力萬歳、峰入萬歳、お國萬歳、双六萬歳を表六番と云ひ、扇萬歳、御江戸萬歳、門跡萬歳、吉原萬歳、櫻萬歳、名寄萬歳を裏六番と云ふ。古來よりの文段にして改め作ることなし。才藏小鼓を打鳴らし、初めは座して云ひ半より立て舞ひながら申す也。屋建萬歳の詞に云ふ。

徳若に御萬歳、君も榮えておはします、御殿造りの結構は、明天に安羅國、御禁の回りを切り立て、初めて佛法ひろめ給ふ、幾千萬歳と申せば彌勒の出世釋迦のゆひきやう、彌陀の弘願より立始まり候へば、峰の眞砂は谷へ下り、谷の眞砂は峰に上り、大磐石は岩となり、岩に苔むしはい生て、西ひがし北南、ゆらりしや

らりと今日祝はれ給ふ、寶の君の何品も上下男女あらためて、こやさるによつて大黒天は、八ツの屋棟に御立有つて、來たる悪魔を他邦へ拂へば、内には福の寶を招ねき寄せ、誠に芽出たふ候へける。大番匠は八百人、小番匠は八百人、墨を引き規を當まあ鏡手斧にて、手斧うちをなされける。一番の手斧の御聲には福德、二番の手斧の御聲には悪魔拂、三番の手斧の御聲には上は須彌山天よりも下は堅牢地神まで、削り取て悦んだるは、誠に芽出たう候へける。一本の柱は金剛界、二本の柱は胎藏界、三本の柱は山王權現、四本の柱は天照太神、五本の柱は牛頭天王、六本の柱は鹽釜六社の大明神、七本の柱は七社大師、八本の柱は初瀬の觀音、九本の柱は熊野の權現、十本の柱は十羅刹女と立てられる、十一本の柱は十一面觀世音、十二本の柱は是は藥師の十二神、十三本の柱は不動の力柱と立てられける、惣じてのお柱數は三百六十六本なり。紫檀の梁をやり渡し、黒檀の男差女差、富や長者と祝はれたり、くわりんの棟を祝つて上げ、屋中々々を祝はれたり、葺萱にとりては我朝の葺萱は、四方の諸鳥は穢すとて、天笠に渡つてたいらかなな、刈りたる萱をしやらかなに渡さるゝ軒場付に、せらから童子一のほこりは不動明王、二のほこりは山の神、三のほこりは鞍馬の山の毘沙門天たり、この役をなされけり。内から外へ指梁は、悪魔よせじの梁先なり、外から内へ引く梁は、諸事に諸領福の寶を引く梁也、誠に芽出たう候へける。

十二番みな祝の詞、させる事も候はねば、その一を擧るなり。

猿廻しと云ふもの猿ごとも申す、是は正しく常陸より移り來りけるものにて、三須田左太夫松岡武太夫の兩人

通り名にて今に名のり侍る。肩衣に脇指さして一人太鼓を打ち一人猿をは舞す、其詞に云ふ。

猿天やれ、西天竺三番に小猿樂、久敷人の年齢を尋ね申すに、東方朔は八千歳、うつゝら翁八萬歳、浦島太郎は七百餘歳と申せども、翁にましたる歳はなし。三千年に一度石に花咲き實の生る事は度々見たる翁なれば、翁殿の御装束は揉えぼし直垂、額に四海の波をたゞみて眉毛に霜を降せて腰に梓の弓を張り、備へてまいる寶物には、綾は千駄錦は千駄、火をとる玉に水とる玉、麝香の膾幸ひかな、萬劫めでたや御髭撫て、千代の御神樂まいらせへて神をかざし、のつとを申す御代も繁昌なり。

猿天やれ西天竺に百さいこく普賢文珠の召されて猿は山玉の御使者のものよ、獅子は唐より舞て出る、さて長久にとりては比叡山は住吉八幡章駄天祭の目出たいや、大慶との笛は役威權に唐子とんと打てば、火の生る實は生る風は無心とは善なさへよ、開前に揉に得おふせ一寄よりて大地を踏て悪魔を拂舞た翁のおもしろさよ、先一番に伊勢に神明天照太神、二番に熊野三社權現、三御山はさもあらたかに拜し申すに、其折三番叟太夫どのは謡の曲さしあかり、扇に鈴よ取や添へてさつさつの名鈴の聲はらんでん返りろんでん返り四十二双の舞の装束、仰げば光る守れば守護する御觀のまいらせへて、神をかざしのつとを申御代も繁昌也(中山曰、此一章内附本に無し)。

萬歳猿舞の言葉の彼等は申すまゝに記しぬれば、何やうの事なるか彼等も知らぬ事の多く候。數百年傳ひたる事にて段々あやまりを傳ひたるに候はん。

子供遊のケ條に付て注し候、雪をすべると申す事の候は、九歳十三歳の兒の下駄の齒の無きを草履下駄といふ。これを穿きて雪跡の凸凹なき處をとばかり走りて兩足を揃ひてすべり五間も十間も行く事に候。橋の上或は板など殊によし角館、横手など山近き在所は一尺許りの雪車に造り、一つづゝ兩足に踏てそれへ綱を付け、手綱の如く兩手に持つて山上よりすべり下る、七八丈もあらん手のひら立たるやうの處よりすべる故疾きこと鳥も及ばず強弓の矢の飛來たるに似たるなり、これは十八九歳の者のする事に候。五六尺も降り積りし雪の春の日に、やゝゆるみたるを又冴え返りて凍かたまりしを堅雪といふ、道にもあらぬ處を踏み行くに跡もつかぬばかり堅く成りしほどの事なり。

紙鳶を飛するいづこも同じ五十年ばかり前きは天狗旗といふをなべて揚たりし、今は東都の風に倣ひて四角なる風のみなるを、雄勝の郡湯澤にては今も其天狗旗を揚る。殊に大きく作り尾を紙にて長くつぎ糸百ひる揚れば尾も百ひる糸二百尋なれば尾も二百尋なり、市城のうちにては揚ることもかなはねば郊外へ持出て揚ぐる也。引おろすには迎ひ風とて小さな風を揚げて尾へからみ、其尾を三つにも四つにも引きりくして引おろすに候、是は異なる事にて候。

① 注連飾りに枝炭を用ゐるのは、北方文化圏である満洲、支那、朝鮮、吾邦に共通の民俗であつて、拜火思想に起因する。本草綱目に白炭、除夜立三之戸内、赤群、邪惡とあるも一證である。猶此の符狀で新年の事象に就き悉く註釋を加へると、餘りにも記事が片寄るので、随次、各符狀に分けて執筆する考へゆゑ、謹め此の事の諒承を乞ふ次第である。

② 餅の拵へ方に頭をつけたのを葉餅、肉ばかりのを身餅、腸をつけたのを腸餅と云ふ(吉村又雄氏談)。身餅は東京その他に出廻り、腸餅は肥料に用ゐらると聞いた。因に内閣文庫本の答状には葉餅の挿繪がある。

③ はま弓とは、古く木製の玉(後に繩を輪の形に巻く)を地上に轉がし、それを小兒が弓で射て勝負したものである。天野信堂の考證に「はま弓は濱弓なり、濱の輪を廻はし、めぐらうちに射る故に名づく、射家者流破魔弓と書きて附會の説あり」と云ふて居るのが確説である(鹽尻卷九六)。豈尤説探るにたらぬ。

〔參考文 献〕

濱 弓 考 (柳田國男) 郷土研究四ノ七

④ 我國の氏神は宅(ウチ)神から發達したもので、然もその宅神は圍爐裡の火ノ神であつたらしい。従つて圍爐裡を神聖視して、主人、主婦、來客、雇人の座席まで嚴重に定められ、猥りに犯すことは許されなかつた。居爐裡の火を汚すと稻作が不況になると云ふ信仰も、又こゝから起つたものである。

⑤ 講初は全國的に行はれてゐたが、初める前に名主(又は庄屋)が集つた村民に對して、幕府の法令を讀み聞かせ、これを嚴守すべきやう訓戒したものであるが、此の法令を讀むことは遠い古代の『郷飲酒』の遺俗である。

⑥ 盲人が座頭と云はれるやうになつたのは、彼等の組合である當道座なるものが設けられ、こゝから檢校、別當、勾當、座頭の神官(更に此四神官は十六階七十三級に細別されて居るが威な私稱である)が授けられた室町初期からの事であるが、その以前は一種の祝人(ホガヒヒト)として人の門に立つて合力を受けたものである。此の秋田の物語座頭は古い祝人の面影を傳へたものである。

〔參 考 文 献〕

日本盲人史(正續) (中山太郎) 昭和書房本

⑦ 鎌倉の語義は判然せぬ。越後にも斯うした雪造りの小屋を拵へて塞ノ神を祭るが、同地では鳥小屋と云ふてゐる(北

越雪譜)、敢て來哲に俟つ次第である。

⑧ 酒菓子からまかでつ迄の文句が、内閣文庫本に缺けてゐる。猶此の外に多少の出入のある點より推して、内閣本必ずしも原本でもないらしい。

⑨ 猿廻はしは、始め猿が人間に馬を使ふことを教へた緣故で、猿を馬父と云ひ、馬も猿を悦びこれを見れば病氣を治すと云ふので、厩に猿を飼つてゐたのが、後に春秋に厩祈禱として猿を廻はすやうになり、更に初春の景物にまでなつたのだと傳へられてゐる。駒引猿の繪錢の由來も又これである。猶猿廻はしに就いては他の答状の條で補説したいと考へてゐる。

二 月

八日 事始めの事

八日おりとて正月にしるせし也。此月に候はず汁なんど調じ候事もとよりなき事に候。江戸にまねびて長き竹のうらへ目籠をつり候ものもたま／＼侍れど風俗には候はず。

この日門々忌竹をさする事候、神の事とも申し葉のしげき竹の枝を二尺ばかりに切て、四手と唐辛一つを付けて門の左右へ指、三日置き赤飯か團子かを添へて川へ流す、此事五月九月もあり、疫病除にてや侍らん。

初午の事

街坊に稻荷の宮どころ多く候、もとも祭候へども夜もすがら太鼓うち明かす體の事候はず、また雪深き時に侍れば兒童も外へは出はてにて、させる賑はしき事も候はず。

子供の習始めの事

おほやう睦月の二十五日を用ゆ、士家にては前に記せる如く元日に書初すなれば手習ひ始めといふ事別に候はず、手習子屋する者などは睦月の二十五日、又其家にて障りの事あれば其前後の日を用ゆ。

彼岸の事

團子を作り又寺に説法などの事、別に異なる事候はず、此時より口寄せと申す事の候、梓巫女の事をもち子と云ふは皆盲女なり、これが梓弓をたゞき口寄せといふ事をす、老婆などさはにゆきて亡人の便り聞かんとて口寄せる云する也。

田植る頃には必ず此事止むにて候、柳に四手切かけて門に高くかゝげ置て、この事あらん内のしるしとするなり、彼岸かた道と申して去年より降り積りたる雪の、此頃やゝ消えたちて駒飼る草も所に見ゆる也。

十五日 涅槃會の事

栗餅あるは粟をかてたる赤飯を供ふ、別に異なる事候はず。

社日に付きたる神事の事

俗間別なる事なし。

① 目簾を出すは、鬼が来て人家に入らうとして目簾を見つて、目を教へて居るうちに夜が明けて、人家に入らず逃げ去

ると云ふ俗信であるが、此の外に安部晴明の判



(書き出がし判らぬと思ひ懼むうち夜が明ける)や、ニユウ木

(これは後に云ふ)など、皆同じ俗信である。事始めに就いては他の機會に譲る。

② 東北地方は殊に巫女信仰が獨んで、秋田では之を座頭鼻(ザトカ、ア)、インヂヨ、座下(クラオロシ)などと稱し、死者があると三七日のうちに巫女を招き、死亡の際の苦痛や死後の有様などを語り供養した。これをミサキハナシ、魂放し)と云ひ、かくて人が神に成る(琉球の神人(カンプト)分れと同じ信仰である)のだと信じてゐた。従つて春秋の彼岸には寺院に参り、その沿道や境内に出張してゐる巫女に死口を寄せることが今に行はれてゐる。

〔参考文献〕

日本巫女史 (中山太郎)

大岡山書店本

三 月

三日 雛祭の事

ひな祭の躰、草の餅、菱の餅など、世に異なる事候はず、桃はまだ咲ねば枝を折りてかたばかりに用ひ侍る母子草の餅は民間この時ならでもする事也。

此日能代の津の傾城年禮に歩くなり、是は此津の飯盛どもは九月の節句までにて、それより引こもり居この日より出る事に候(來舶のために置く事故、船間は禁する也)柳町とて是等の居る町を年禮つとむ事にて候。四日には傾城しらべとて住吉の社の境内にある長床とて池に臨みし廣らかなる亭へ、町々の店屋町役人も出て遊

女どもこゝを晴と出たち居りこぼるゝまで集り、三絃ひきて唄うたうこれを三役振舞として酒肴を具す。その謡う唄はまかき、とつか、きやらぶしとて三曲あり。

「聲はすれども姿は見えぬ、籠の鳥かやらうらめしや

「紅葉山にて鳴鹿よりも、しづが心のうらめしや

「さへつおさへつうけ盃に、ともに悦ぶふしもよし

みな同じやうの事に候へども、曲節にて違ふにて候、とつかは太鼓三絃なり、まかきは小鼓三絃也、きやらぶしは太鼓小鼓三絃なり。各此文句をくり返し聲ごとに長ふ節ゆるやかにて一曲を終るしばらくの事にて候。久しく傳ひたる事故てにをはの誤り候やらんうけがたき文句にて候。

水口祭の事

何事もなし侍らず、但農家の田島耕し初める日、餅搗酒吞祝ふ八皿の祝ひと申候。

苗代たなりの事

これにつきたる行事候はず、種俵をたな井に浸すこと必ず彼岸の中日にし侍る也。

此月の二十三日城北四里金瀬の庄の里々に眞盛りの山吹を、さ月のあやめ葺きたらんやうにする事あり。

① ビエル・サンチーヴは、賣笑問題は民俗學の秘密室であると云はれたが、慎重の態度でその秘密室を公開する。能代

の飯盛が或期間だけ營業を許されたのは、北海道の雁ノ字（私娼の方言）と同じく、船舶の出入、漁人の去來に伴ふたのである。雁ノ字の俚稱も又この意に外ならぬ。また傾城調べを神社で行ふのは、古く我國の傾城なる者が、巫娼から出發して居ることを示唆したものである。

〔参考文獻〕

賣笑三千年史

（中山太郎）

春陽堂本

- ② 八皿酒の行事は各地にあるが、三河では麥を蒔き終つた日、又は田を打ち終つた日に八皿酒とて、皿か輪で八杯の酒を飲んだ（秀酒企乃温瀆）。同じ羽後でも山本郡では、苗代の種蒔が終ると八皿酒とて、皿または飯碗の蓋を八つ折敷にのせ濁酒を飲んだと云ふ（宇良乃笛多幾）。
- ③ 文化八年春三月に、偶々、南秋田郡金足村に滞在した菅川眞澄翁の「養題金桂棠」に、翁自筆の挿繪を加へ、同地方は昔より金坑に富める處ゆゑ、その故事により山吹を挿すならんと考證してゐる。

〔参考文獻〕

南秋田郡年中行事

（奈良環之助）

單行本

四月

一日 衣かへの事

異なる事候はず。

八日 佛生會の事

奥州秋田風俗問答

うぶ湯、花御堂などの製通例にて候、千早振卯月八日といふ歌書て、窓面などへ押候事もある事にて候。俗には候はず、此日能代の津にて鹿島祭といふ事あり、是は町々を五つに割つて其一つにてし出す也。年ごと順番にする其番に當りたる町にて、彌生の末よりまづ船を薄板にて三丈ばかりに造り出す、これを神力丸といふ。又義經辨慶樋口の次郎の三つの人形を作り出す、當番ならざる町々により人形一つづゝ出す、何やうにても定なし。人形とも彌生の末に作りて家々にても饗應す、けふの朝は誰が家晝は其隣と膳を居うる也。夜食にあたりたる家に泊りて翌日又段々移る。もてなしたる家にて多き少きはとまれかくまれ錢を出して其人形の腰に付け送る。六日までにて町の長の家にとまり若きもの集ひて、其腰なる錢にて酒飲み物食ひ七日になりて皆當番町へ持集りて船へ飾るなり。それより太鼓打ちとよめきて町々を練り歩き、里の東の端なる山王の社へ往きて人形へ魂入るとして神官出て祈念す。それより又里の西の端なる住吉の社へ往きて人形に力付くるの祈念をす、其夜住吉に在て此八日に成て尙當町の者ともあるある出で港口へ持行く人々皆鉢巻たすきにて兒は紅の投頭巾が定まれるなり。それより海原へ出し流しやる事にて候。此事城の郭外の町々にてもする何の月といふ定れるなし、又かゝる捉も候はゞ角館にてもするなれどかたばかりの事なり。

五月 月

五月職の事

通例は粽の外に笹まきと申すものを作り候、笹の廣葉にて三角に折り内へ米を充てからげ煮て大豆の粉にて喰ふ。蓬菖蒲ふくなど異なる事候はず、この日家に傳たる丸薬など製するも候へど、出てまゐらす名だゝる事も候はず。

此日家々にて高坏あるは三方に茅卷、笹卷を盛り菖蒲蓬と山積牛尾菜を置く、朝に家内居並びてこれを居居、その山薯(細き方四五寸なり)と牛尾菜を左右の手にとりて、よき事聞け聞けと念じて左右の耳をそと突くやうにする、おほやうの事に候。菖蒲と蓬を纏にてからげ縛りて太刀の形にしなし、これをもて地上を打つによく響くものなり。この日の夜の明けぬに童部ども人の門戸を起きよ起きよとて打ち歩く事も候、古の菖蒲切の餘風にて候はん。

此月田植の事

さびらきは其家々にて日を撰んでする。又苗の遅速も候へばもとも定まれる日なし、その日は食品大やう赤小豆飯、餅、濁酒(寒の中に造り置く)也。朴の葉を重ね敷き赤小豆飯を盛り、又朴の葉を蓋にして近隣かたみに送り合ふ也。殊に香ばしきものにて候、なべて此田植中は家内はもとより雇れたる者までも女のかぎりは皆客としてあしらへ上座さす故、女も誇りて云ひたきまゝを云ふ。田植へ通りかゝらんには笠ぬぎ目出たしと時宜して通るなり、若しさもせで早乙女ども憎しと思はんには、早苗祝はんとて川より上り來て持たる苗の泥を

顔へも着物へも塗るなり、若しをなからかひぬれば五十人も七十人も一連となりて植居る者なれば、幾らともなく寄り来る也。左あらん時は走るを上計とする事にて候、これにつき物語の候、いづれの年にや田植るとき津輕殿の通られたるに早乙女どもお祝ひ申さんとて殿にも怖ぢず寄り来るに、津輕殿も流石にて其祝うげんとて野中へ駕を居らせられしに、早乙女ども取巻て皆膝まづきて同音に田植唄を一ふし二ふし聲おかしゆう誦ひける。その中より一人苗もてすゝみて御駕の屋根へそと登りけり、昔はかゝる事も侍しもと老の語るを聞しはすでに五十年ばかりや過ぎぬらん。

田植は

「あさはかの水口に咲きたる花歌何花か、稻の花か酒の花か、さては長者になり花か

「苗とり上手の取りたる苗は、うらの小露をさらりとなげ、てもとに手間のくはぬやうに

「植れ植れ早乙女笠とたすきを置いてやる、笠もたすきもいり申さぬ、婿とり嫁に來りたや

この月靈養につき行事の事

何事も候はず。

① 耳くじりと稱し、今に山形秋田の兩縣に行はれ、古くは津輕にも南部にも行はれた。但しそれが同じ奥羽に行はれた大黒の耳あきと、關係あるか否かは判然せぬ。

② 田植に早乙女が中心となるのは當然だが、我國に於いては穀神が女性であり、更に穀神に仕へたウナリが同じ女性であることを考へると、生産の象徴として女性が崇拜されたのも、深き理由が存したのである。

〔参考文献〕

田植に女を殺す民俗 (中山太郎)

日本民俗志所収

六月

十六日 かしやう(嘉祥)の事

この事四民の俗にこれなし。

土用につきたる行事の事

異なる事候はず、大蒜をこまかに刻み赤小豆との二品を、ちとばかり井華水にて吞なり、おほやうの事にて候。納涼につきたる事

溪間などには此月まで雪の残りあることにて、城西一里にたらぬ處に勝手と申す山ありて、是は一帶の沙山つゞきたるにて候、此沙の中に雪多く掘り出す、魚市にて魚を貯ふに取り用ゆ、別に用ゆる事もなく候故納め置く事候はず、こぞの寒の中に餅つき氷らし、それを干して貯へ置き此月の朔日に氷室にかへて其餅をとり出して齒固めすとて喰ふにて候。

晦日祓の事

奥州秋田風俗問答

民俗には此事候はず、神事にはする事も候。
雨乞の事

久旱淋雨にて神職僧徒のなすわざは後段にあらはし候。一とせ早して田畠はもとより人も渴するばかりの事候へしに、城より使を立られ保呂羽御嶽高岡(式内の神也)へねぎ申されけるに、其使の山を下るに雨降り出てよく潤ひぬる事近き年の事にて候べし。又山里などの雨を祈るは其里々々に様かはれり、城東(十里)森山と申すは急に登ること五六町ばかり、其頂に禿倉の候是、里人等夜になりて鬮の鹽辛を桶にして擔ひ、炬多く灯しつれて登りて禿倉の扉へ携へし鹽辛を塗りにぬりて同音に叫びて炬みな打消し一散に逃げて下る也。かくして降らぬ事はなしと申す、あるは石の地蔵を繩にてからげ川へ沈め、もの住む池へ穢れたる物を投するなどさまざま候、かゝる事にて必ず雨降けれど、雨乞雨とてよくは降らず、能く降ても一ト里二ト里潤ほすばかり候。

七月

七日 星祭の事

星祭は六日の夜にし候、供物定まれる事なく又異なる行事なし。竹篠に短冊など付け候事も候へどもなべての俗には候はず。

六日夜眠流しと申す事風俗にて候、郭外の町々よりなし出す長き竹に横手を幾段も結び、大なる燈籠三十四五十も付けるなり。多力の男をらびて一人にて持たす、手代りの三四人添て其しりへに二三の亂調に打ちて一町きりに若きもの群れ従ふ、まづ通町の橋中へ(郭中より郭外へ出る第一の橋也)練り出て、それより町々を渡るなり(侍町へは入らず)町々により一つづゝ出す。又此夜郭の外内ともに兒童十歳ばかりは手ごとに品品の燈籠を持って遊び、家ごとに門に燈籠を掛る。

此眠流してふこと城北の能代の港には殊に華やかに候、わたりは二丈ばかり高さは三丈にも四丈にもする屋臺人形さまざまの工を盡し、皆蠟引たる紙にして五彩をいろどり、琉璃燈に似たり、年々新奇を競ひ、尤も壯觀にて候。

此夜麻がらを己れが年の數打て草のかづらにてからげ、枕の下へひしきて七月の朝とく川へ流すなり、これを眠り流しと云ふ、里々にはある事に候。

七日は異なる食品なども候はず。

この日年々城中の武庫にて、七夕飾とて物の具飾ることの候、士家にも各とり飾るなり。

この日七たび物喰ひて七度水浴るいふ事の候、村里の風にてなべての事にて候はず。

氏神墓所の事

此月氏神には行事も候はず。

この月の朔日より墓を洒掃して家内老幼男女ことごとく墓参りす、士家は男女日を異にして参る也。墓前に假に棚を結び蓮葉を敷き、香火燈燭を備へ赤飯もちひ又あらよねとて白米をとき、それへ茄子をこまかに刻み交へて供する皆然り。農商は十三日にかぎり暮かけて参る也。その寺々より香爐を出し、小僧等出で、墓原を経を讀み回りぬ。

盆供魂祭の事

魂棚の結構供物等おほやう異なる事に候はず、十四日には曉ほうかひ(行居)とて夜の明ぬに餅搗て供す、又この曉の夜半過より鏡てんとて賣りあるくをとりて手向水の鉢へ入れ鼠尾草を添ひて供す、是は心太を二寸ばかりの角に切たる也。十五日も又夜半過より土産團子とて賣り歩く、小さき白き團子也。芋賣垣芋から箸など用ゆる事なし、但此内の大館にては女郎花の垣をし同じ莖を箸とす。

送り火迎ひ火の事

十三日より十六日まで夜々門外へ焚く、木は極めて松なり。十三日迎火日の暮ぬに焚く、十六日送り火日暮れて焚く、商家町々も同じ里々にては墓にも焚く也。村童等聲を限りに

おゝ爺な、おゝ婆な、馬コにのりて、牛コにのりて、明るいに來たふらへふらへ

と云ひつゝ焚く。送り火の時は往たふらへふらへと云ふなりと、ふらへはたまへにてや候はらん。又この朔日より晦日まで夜々焚く里ぶりも候。

平鹿の横手城外の町々送り火は殊なる事の候。一町に一つづゝ船を葭簀にて造る、長さ三丈余大なる燈籠を石塔の形に造り、三界萬靈と書て真中に据へ外には燈籠もなく只蠟燭を數百丁船の四面へ灯して町々を練り行き、蛇の崎と申す所の橋の河原へ持出太鼓うち囃し立る此船十ばかり出る也。果は其川へおし流すにて候、この十六日の夜城北十里の八龍湖中幾つともなく火の燃え出る事の候(湖は南北八里東西三里餘)おほやう年ごとなりと申す、筑紫の火にも似かよいたる事に候。同じ夜その湖中のほとりなる鱧川のり(今は訛りてあふ川と云ふより、蛇の字を書く)にてさよき踊と申す事の候。是は屋臺を二つ造りてそれへ昔より傳へし假面三つあるを人形に装ひのせて、その先へ旗ども多く立つとけ笛鼓にて囃し、里の長が先に立つて若き幼き皆出わたりて練り出す、囃の唄あり、

「秋の田のそよきや」と穂に出て君よ」と守らんとの君よ

「鶴龜は池の汀へ巢をくいて君よ」とまもらんとの君よ

又小唄あり、

「櫻の花をながめさふらんとはよばやれば

同音に地もとどろく許り唄ひつゝ里の北なる内外の神垣のあるに至りて、其假面は此ほくらに納め置くにて候。此月高燈籠造り立て候に殊にのびよき丸太の三丈四丈も候を用ひ、その頭へ横に木を結て三角の形に繩を張り綱の如く繩を縦横にし紙手きりかけ其三角の角ごとに杉の葉笹の葉など束ぬるなり。これは亡魂の三年まで

それより七年十三年と年回ごとにするか、あるは年ごとに立てる家も候。一町に三處四處はおし立て候故、若
昏に高きより望めば星の林とも見え候、是は朝日より晦日まで候。

盆踊の事

郭外の町々にて十四日より二十日まで踊り、八月朔日には城西の山王の廣庭へ皆出で踊る、これを踊おさめと
云ふ。踊は暮より夜半過るまでなり、山王にては晝のうち也。踊る體、町の中へ階子にて場取り置て軒へわた
り二尺ばかりの大なる太鼓を掛けこれを打つ、踊子誰もなく寄り群れて五十人六十人、場所のうちへ輪に成て
踊るに候。唄の文句さまざまあり、

「揃た〜踊子はそろふた稻の出穂よりまだそろた

「さても美しく踊子の顔よいさよひごろの月の顔よりも

唄の曲節ことにゆるやかに聲長ふうたひ踊の手、品ものびやかなる事に候。それよりや、變りて半音頭といふ
に成り、太鼓も能の太鼓の如くし三味線鼓笛にて、曲節手品や繁敷に成り候も、五十年來の事に候。

生身玉の事

女兒の他へ嫁したる、男兒も人に養はれたるが、實の父母の何事なきには酒肴を携へて老を祝ひ、酒盛するな
どの外には異なる事候はず。

施餓鬼の事

させる事なし、船にて出る等の事もより候はず、流れ灌頂の事、寺前の流へ卒塔婆おし立て四角の木綿を張
りて、往來のもの水手向けする異なる事候はず。

① 眠流しに就いては異説あり、彼の「眠むたは流れる、豆の葉は止まれ」とは、將軍田村廣の夷賊誅伐の故事より出た
と傳へるが、元より附會であつて探るにたらぬ。事實は農民が睡魔を拂ふ行事であつたと信ずる。

〔参考文献〕

ネブタ流し (柳田國男)

郷土研究二ノ五

② 孟蘭盆會の迎火送火は、佛はその火を目あてに煙に乗つて往來するために焚くと云ふが、無稽の説で信ぜられぬ。こ
れは原始時代に屍體を濡めて復活を祈つた遺風である。それでなければ墓地で火を焚く、由が判然せぬ。猶他の機會に
補説する。

③ 流れ灌頂は、他地方では産婦が難産で死せるに對して行ふが、秋田ではさうでも無いらしく、また水手向をするより
見ればさうでも有るらしい。こは答者の認識不足からだと考へる。

八月

八朔の事

茄子を重ねる籠にして秋草の花折り添へて親族かたみに贈り候也。たのむ日とて餅つき祝ふにて候。

月見の事

月に供するもの又食品にも異なる事候はず。

彼岸の事

春に異なる事候はず。

里々にてよく百萬遍と申し候をなし候、其體ことなる事も候はず。地藏の念佛南無阿彌陀、閻魔の念佛なむあみだと有らゆる佛の御名を唱へて念佛を手向る也、又老婆などの唱ふるに云ふ。

往生不定のその時は、念佛一遍出で申さない今申す、念佛をうけとりたまへ釋迦阿彌陀、たび／＼申もうる、さくら千遍一遍なんまみだ

うるさくらのらは、さふらふの約りたるにて候、笑ふべき事ながら質直なる事にて候。

田刈初るに付ての事

何事も候はず。

九月

衣がへの事

何事も候はず。

九日のせく(節句)の事

異なる事候はず、食品又定れるなし。

農家にては初節句とて餅つき、十九日の中のせくと云ひ、二十九日を刈場のせくと云て、餅つき祝ふこと皆同じ。

十三日 月見の事

異なる事候はず、但八月は芋名月とて芋をもて宗として、この月は栗名月とて栗もて宗とす。

神送りの事

俗間何事も候はず、この月の末より十月の初に、神々のお旅とて風すさみ雨そぼちて、霞など降り來ること候也。

十月

亥の子の事

もちひ調するの外何事も候はず。

此内の庄十二所にては、必ず年ごと九月にする猪の子の餅とは申すなり。

北浦の庄の角館田町三十餘軒の士家は、常陸よりのしきたりなりとて、此日他の町々の親族を招きて餅を振舞ふもの候、猪の子の餅とは申さず。

二十日 夷講の事

商家貧富大小によらず、なべてする事に候、大家の仲仕など多くいて入には殊に祝ひ祭る。祭のやう神酒を供し膳を備ふる等にて異なる事候はず、酒うち飲んで夜さら唄ひ舞ふ事に候、身幸の舞と申す事をして候。是はみをゝいのゝと人々輪に居て、皆手をうち拍子とり囃子その時座中の舞心得たるもの立ちて舞ふ也。恵比壽舞大黒舞等品々あり、別に定る調もなし。羅漢舞ことに古きためしなり、俗にらつか舞と云にて候、工商の夷講その職々にて違ふ、鍛冶のはしんがとも云ひ金神の祭ながら夷講と云つて、別に夷講の祝ひはせず候。是はこの月の十七日にする牛蒡、大根、人參、魚等を煮しめたるを槌の如くに切て、細申へ一々さして槌に似する也。酒屋、紺屋はむろゑびすと云ひ此月の五日にする、されど異なる事も候はず。

此月神送と云ふわざの事

何事も候はず。

鯛の魚は國の名産に候ゆゑ書てまへらすにて候。秋の土用の終り日より二十一日と申は此魚の來る日とす、それより早きは魚多くあるとし遅きは魚少なしとす、その頃海面くらみ渡り風すさみ浪荒れて遠く雷の音する是をいわつめと云ふ、魚集てふ事なるべし。この遠雷わたなかへ轟くやう鳴るをよしとし山壑へ響くやうなるをあしとす、沖の白浪高ふ巻あがりたゆたひて岸へ打つけるやうにより來る平磯などは一町ばかりも走りのぼる也。この浪に駕り鯛やか上に集り來るは岸の岩間の藻草へ其子を置かんとする也。引網少引網きし細なげ網

十一月

冬至につきたる行事の事

臨濟曹洞の宗の家々にては、餅あるは赤飯などをし候、さる外は何事も候はず。

八日 ほとけの事

この事ある事なし。

二十三日 大師講の事

家々にて赤小豆粥へ長き箸うちて供し候外別なる事候はず。

淨土宗の家にては、十夜とて十四日の夜此事あり。

此内の庄の大館にてはこの事を三度なし候。四日には赤小豆粥、十四日には赤豆飯、二十四日には餅を搗て供す、皆長き葎の箸を用ゆ。此月の十日に仙北の郡北浦の庄田澤の湖邊の里々にては湖水の神へ家ごとに酒飯を供し、夜すがら酒盛し唄ひ舞ひ祝ふ事の候。此湖は城より眞東に當りて二十三里亂山の中にて尤も地位高し、四方四五十町水至て清く水面に落葉一つ浮びある事なく、其深き事量りしれる者なし。此神は雌龍なりと申す、是を此日に祭る故は秋田の郡の西の八龍湖の神は雌龍にて、此日この湖へ来て雌雄合するの時なればにて候と申す、この湖のへたに浮木明神てふ堂ありて、湖心に其浮木あり水面より三四寸下に見ゆ、千尋の底も明らかになるに其木の長さ知るべからず、上なるは根の方と見ゆる、千とせを歴て所を移さず朽も失せざるは奇なりとすべし。此湖に遊ぶもの皆見る所にて候。又四面高山つらなり風靜なる所ながら、時ありて俄に山おろし吹き来て水うねり浪高う卷上り、いと恐しき事あれど漁人を始め遊覽の船も過ちしたる事古より無しと申す。八龍湖はこれに引かはりて甚だ淺し、尤も湖心には底迄も知れぬ所も候へど、岸より一里ばかり漕出ても膝越ぬ水にて候、其淺きゆゑにや雪ふれば葎生ぬる方やう／＼氷ゐて小寒の節にこと／＼と氷つむる、其氷の厚さ五尺にも六尺にも成て漁人皆其上に葎屋して火を焚てゐる也。鐵鉞などにて穴を穿ち二三丈ばかりして又穴を穿ち、限りなく穿ち回りにて其穴より引網を長き竿もて送り回し引揚ぐる、八九寸ばかりの鮒を一網に十駄も二十駄も取る事にて候。さる故に馬人の渡るなどは更なり、驛路の旅客も近道とりて湖上を雪車にて曳走らせ通るにて候。これは此處ばかりにあらで能代の半日川府下のおもの川なども二町三町ある水面を渡り歩くこと

平地に異ならず候。さればかゝる厚氷の張ふたぐに田澤の湖水は岩間の水草にも薄氷る事もなし、龍の移りて冬籠りするはうべざる事も候わけ、あく暮の彼岸の中日には必ず本所へ歸り來とて風の高く吹て、さばかりの氷一時に破け波にゆり揚られ、やが上に積重りて風に吹かれ小山の如きが流れより來る景色のよろしく候。米白川おもの川なんどの氷も消ぬる時には五十間にも七十間にも續きて流れ來る、其時船あしう漕出して其氷を避かねぬれば忽に覆へりて沈むが故に船子等恐れ慎む事に候。又川の高岸に雪の降り積りたるが水へさし出て大厦の軒仰き見る如くなるが、春に成てどつと落るに水の大に波立ち騒ぐなり、船の殊に恐るゝ事にて候。山には又殘雪の山の腹にあるが地中の陽氣の立のぼるに雪の下より透わたりて得こらへず走り下る其音山谷にとどろき、雷の落るなどは物ならず、年經し大木もこれに逢へば根ながら抜けて微塵になる也。かゝる時は行旅のものこは不かひをさへ靜にする事也、不わづかの物音にも押崩るゝ事なればいと恐るゝ事にて候。水にはまふ落山にはなて落と云ひ、皆如月の頃の事に候、ものゝ序にこゝへ注し侍るなり。

① 『わづか云々より恐るゝ事にて候』まで、内閣文庫本に見えてゐぬ。

十二月

一日 川りひたり餅の事

この日の餅は、みな赤小豆餅にして供ふ、川隈大明神に供ると申す、此神の社は何方にも候はず、十二所の邊にては粥拂の餅と申す訛りてかく申すにや。

八日 事納めの事

事始めに注したる如く、何事も候はず、忌竹を門に挟み候ばかりに候。

煤取につきたる行事の事

何事も候はず、十三日より段々と家々にして定れる日なし、但城北二十里飛根の里と申にては十七日に限りてする、一丈ばかりの竹の末へ藁一把を結付て天井くまなくを拂ふ、この竹を煤男と申す、是は城下も同じ。その煤男を煤を仕回ふて後戸外の雪へしかと立て置く也。春に來て柳の枝を切て其四邊へ垣の如くひしと立て、枝こへ横植堅植などを下げ候、田へ鳥下りぬ厭勝と申す、此里ばかりにてする事に候。

餅搗につきたる行事の事

何事も候はず、正月に中せし如く鏡のもちひ神佛へ奉る、祖先へ供する等みな此時なり。二十三日より段々と日の定れる家もあり、又よき日とりてするもあり、めぐる餅とて赤小豆を交へて搗たるが重ね餅には上の一重は是を用る。又宇賀の餅とて瓢形に押平めたる、あるはそれへそと耳の形つけたる必ずありて、その神へ備ふるなどにて候、田家などは尤も農工女工の具へ残らず備ふなり。

除夜の行事の事

させる事も候はず、此日の夕餉は大やう元日の料理を用ゆる。其料理もともあらく敷事にて大根、牛蒡、人参、申貝、餅、田作、鹽麩、餅等その家々にてかわりも候へども、別に異なる事なし。この日亡き魂祭の候、士家にては多くは菩提寺へ米を送りて寺にてせさする也。是を御魂飯と云ひ家々にてするも候、飯を結びにして十二、一つ／＼箸一本をさす、佛壇あるは神棚へ供し、餅と並べ備ふるも有り、箕の中へ置てさぐるも候、田家にては必ずする事也。飯を鍋二つに炊き棧俵へ盛り手向るもあり、又此日より佛壇の戸をさして明る春の三日まで開かぬ家も候。

年籠りに寺社へ詣る事

神主社僧等はさるにて候へど俗間にはなし。

節分豆撒の事

通例の外に異なる事候はず、但山家などには年の内に節分のありなしを問はず、晦日を節分として鬼やらふ事の候。又正月に節分越れば其年昌へ豆蒔くと三度になる故あしとて、晦日に豆撒をするも候。

此月の六日は機神祭といふ事の候、蠶桑柿の事多くはなさざるもなく候故戸ごとに祭る也。うるしね(梗)もちよね(糯)を煎りて香煎として供へる、又八ツ目鰻と大根とをあつものとし奉るにて候。

九日には大黒天祭なり、これも戸ごとにする供物は七色菓子とて、大豆にて調したる干菓子やうの尤も庵なるもの也。膳菜四十八品といふ皆大豆にて調す、脛などの大豆ならざるは黑豆を煎りてふりかくるなり。是は大や

うの事にて必ず四十八品に限れるにもあらず、飯はなべて黑豆をかて、炊く也。あるは其豆飯を升へ堆く盛て葉餅を添へて供るなどもあり、神酒餅二股大根とも備ふるにて候。

十二日は山神祭、金銀銅の山師大工石工鑄物師など祝ふ事にて、神供は黍を十二備ふる也。農家も木こり炭やく事をなし候故、戸ごとに祭る事に候。皿むすびと云ふ事してそれくもの居て供る、これは藁にて皿の如く結びなしたる也。右の機神祭大黒天山神の祭等は禰宜修験者など招き候にはなく、打ち寄りて酒飲み物食ふて祝ふ事に候。

十三日 城外の商家に市立つ是を初市と云ひ、年の始めの神佛あるは食品何くれの具どもを買ふ、再び二十日より晦日に至る是は定市と云ふなり。この月平鹿の郡横手城外に入市といふ事あり、一季半季の奉公入市にて、人々その市に往きかへりて吾が欲しと思ふを價を定め約をする事に候。あたり近き里々よりも出わたりて人を抱へる也。

① 川ひたり餅の故事は異説あつて定説がない。古く此の日に水神を祭り餅を捧げたに起るものと考へてゐる。

〔参考文献〕

川 浸 餅 (中山太郎編) 日本民俗學辭典

② 昔時の煤掃は正月神を迎へる準備であつて、現今の清潔掃除とは心構へが違つてゐる。従つて一種の神事であり、ま

た信仰でもあつた。煤取竿を翌年の正月まで保存し、これを推肥の上に立てたり、又はトンド焼の燃料にする民俗も各地にあつた。秋田からは海山三百里を隔てた肥前東松浦郡の馬渡島では、煤竹は前庭の隅に立て置き、節句ごとに酒飯を供へて祭り、後に左義長で焼くとある(民俗學四ノ八)。煤男と擬人化した所に、古い信仰が窺はれる。

③ 除夜に亡き魂を祭るのは、我國の古俗であつて記録にも見えてゐるが、秋田に此の事の残つてゐるのは懐しい一事である。西鶴の胸算用巻四に、丹波の山村で同夜に魂祭することが載せてある。

④ 入市で男女の使用人を定める事は諸方にあつたが、女市では筑前大島の宗像官幣大社に行はれたのと、男市では此の横手町が尤も著聞してゐる。

〔参考文献〕

宗像社と女中市 (大津朝二郎) 旅と傳説六ノ十

横手のワカゼ市 (細谷則理) 旅と傳説十ノ三

雜の部

諸職分に付たる行事の事

各月の下に擧げ候外に異なる事候はず。

月待日待の事

是昔食品など何事もあらず大やう白粥にて候、酒盛りして夜を明すもあり又酒を禁ずるも候。餅を搗くなども候て一樣ならず、神官僧徒など招くもあり、或は里人打寄り念佛し明すも候。

婦人着帯の事

五月にて着帯通例に候、その時親族の婦女穩婆も招きて祝ふ也、其外何も事候はず。
産所作法の事

椅子産籠などあらぬ者は、藁を多く束ねくくりて左右へ置き、いづれ産婦の正しく坐して傾かぬやうにする
(此藁に糯の糞を忌む、世に異なる事候はず、厭勝ごとなどある事なし。山深き里にては分挽すればそれが夫山
へ往て猿一つ取り来て喰はすれば、諸血の病ある事なしと申す。
胞衣の納めやうの事

異なる事候はず、人踏まぬ地を撰びて、鱈このしの魚添へて埋む通例也。鱈なければ別なる魚をもてする也。
子供の祝ひの事

誕生より男は百十日、女は百二十日をもて、箸初めをするよりして、追年の祝ひ通例に異なる事なし。深曾木
といふ事も親々の好にし置く、風俗には候はず。

男女元服の事

總てかゝる禮式にかゝれる事は、大やう小笠原流を用ゆ、その詳略は貧富による、農商にては此事なし、有り
ても形ばかりの事なり、農家の男兒四五歳に成て髪を始めて延びさするより剃りさげ髪にする也。
誕生日の祝ひの事

陰陽の膳二膳を供ふ、一方は必ず赤小豆飯なり、姻家などを招き饗應等異なる事候はず。

結納の行事の事

風俗に申べきほどの異なる事候はず、農商に此事を酒を立るといふ、酒三升を二樽として一具と云ふ。貧なる
も是は必ず贈る、勝手よき者は三具も五具も贈る、これへ昆布するめ鯉節など添ふ、段引等は富るは如何ほ
ども贈るなり。

婚禮の事

禮式は前にも云へる如し、送火迎火はありなしに候、石打水あぶせは此頃にはなし、大なる争を引出す事候
へばなり、今も冬月に此事候へば雪を丸めて磔とするは石打の餘風也。平鹿の横手にては嫁娶に親戚遠近を云
はず、知音の者までも皆招く故に、百人二百人の來客也。客はおの／＼酒を携へ來る、饗應は貧富によれど大
勢故に龜末也。一町内の者悉く來て總ての事をとりまかなひて、主人の家内は客の如くして居る古よりの風俗
なり、式の盃濟みて夫婦座敷へ出て、客も皆おしならぶ時、親しき者一人、硯笥もち出て一禮し、父母仲人を
始め居並びし者の顔へ、墨を一筆づゝ付くる、只新郎新婦へは付けず候、各顔を見にくくして婿嫁の顔よから
んとなるべし。

農家にての嫁入には人に負はれ來れる、是にもり木と云ふものあり、勝軍木にて長さ二尺許り(或は五寸處々
違ひあり)是へ嫁の腰かさするやうにして背負ふ也。背負ふ者を一のもりとし手代りの者を二のもりと云ふ、

親しき者より撰て出す、婿の家へ行ても仲人へ行そふて上座する也。雄勝の郡にては此木を彩色して紙に包み水引結びて婿の方より贈る事あり、錦木の餘風にも似かよひ候か。山家に嫁ふれと云ふ事あり、仲人嫁の先へ立て行くに嫁々と聲高に云ひつゝ行、そこら耕し草刈り居る者の皆かけよりて嫁のよしあしを言ひのゝじるなり。又仲人其夜より三日の間は婿が家に宿り居て、嫁を仲人夫婦が間に臥さして婿と枕並べさせぬ事も候也。三ツ目七ツ目等の事

異なる事候はず、山家には春行秋行とて、年に二度は夫婦連れ立ち、濁酒に時のくさ／＼山川の魚など携へ行て舅をもてなす也、なべての事には候はず。

葬禮の事

士流は土葬、農商家火葬、大やうの事に候、其體通例に異なる事候はず。忌服中その家の喪主死者の子弟上下着て居みな日々墓参する也。慎また別なる事なし、忌明とて祓する事も候はず、但葬場へは女もみな出る也。士家は悉く乗物なり、農商家は綿帽子を必ず冠る、能代の津にては忌のあるは帷子を着る也。

七日の法事の事

祭供養等風俗にあづかる異なる事候はず。

一週忌等の事

三年七年より百年百五十年等通例、外に異なる事候はず。

老人祝ひの事

年賀風俗にあづかる事なし、もとより祝ふも候へども必ずとせず。男女厄年と申す事候、男は二五の年女は三七の年、それが中に男は四十二、女は三十三を殊に祝ふ、親戚集り酒盛りする事に候。其年に當れる男女、厄難あらん事を恐れてなり、又かゝる事せざる家風も候、農商家専ら祝ふ事也。

棟上の事

寺家人家ともに大工の作法に任す、飾等も通例に異なる見及ばず。

わたましの事

風俗と申す體の事候はず。

蝗風等を避くる厭勝の事

させる事候はず、鳥海山の虫札とて修験者、法螺こと／＼しく吹き鳴らして配り歩く事候、それをとりて木の枝などへ、總て畠つま田がしらへ立る。又蝗の多き年には荏の油を田の水口、殊に蜆の殻に一つ程づゝ流すに、虫こと／＼と落ると申す、この事近き年よりする事に候。

疫病よけの事

世に異なる事候はず、村落にて疫病流行には、藁にて大なる人形を造り剣を持たし、顔赤くなんどし鐘楮の繪の如くし、或は午頭天王と大文字に書て、その腋へおしなどして里の入口へ立て置く事候。其外餅を搗き團

子を作る等の事、時々のはやりにて定れる事候はず。
旅立の時の事

何事も候はず、但すでに戶外へ出んとする時、機具の梭を跨ぎて出る、是は往事のすみやかなるをとるにて候。
農家などには旅立りて後草鞋を作り、外へ向くやうにして神棚へ置く、其人の故郷へ赴かん程をはかりて、内へ向くやうにして置く也。又石二つ清く洗つて神棚へ置く、その人の足強からん厭勝なりと申す也。

茶振舞風呂振舞の事

農商家にてよくする事に候、亡き人の忌日に餅團子など造り、近隣の老翁老婆を招き候、是を茶を立ると云ふ。又寺へ持ち往て寺の同行講中などへ振舞ふも候、風呂振舞と申す名は候はず、山家などに風呂焚くに木の法螺を吹て候へば、風呂ありと知りて老幼集り來る也。

諸社の神官等の外の職掌の事

外に別なるもの有る事なし、里々の小社などには俗別當とて農家にてするも候也。

田樂幸若等の事

これ等の事ある事候はず。

今様等の事

前に同じ。

乞食×多等の事

外に異なる職分のもの候はず。

大神いづなの類の事

秋田の六郡のくまぐまは是等の者さらにある事候はず。

跋

いにしえ飛ちりのしろしめされし御代に、國々より風土記をめされけるとや、このふみ久しくほろびてふたゝび起らず、好古のもの浩歎するところなりけるに、いま風俗を問せらるゝいとまかしこき御事也。されどとみにとあらんには、撮爾たる六郡には候へど村落星のごとくにあらけたる、いかで委しうはなし得候はん、たゞやつがれが犬馬のとしの古稀に近より候まで見もし聞もしつる事の多く候へしも、このほどは善忘の病さへつれて何事もおぼろになりゆき候を、かたへの人々にこの事かゝりしとありしなんと問さだめて記るし候。淨寫又いそぎ候ほどに文字の誤あるは落したるも候はん、老筆のはたらかぬ上に硯をあふり筆を呵するの時なるをやつとむるとも業の終がたきをしりて、下の巻をば人の手かりてかゝし候。又百聞一見にしかすと申不文の形究なし、得かたく候は繪に寫さし候。是もとみの事に候へばよくはなし得ず、かたばかりにて

候、すべて見にくう候はんをまいらせ候事の恐懼に候也。

文化十一年甲戌十二月

那珂通博

① 婚禮に新郎新婦の顔に墨を塗ること各地にあるが、その多くは式前に行はれ、これは邪視を避れる爲と解釋されてゐた。秋田では式後であり、且つ新夫婦には塗らぬとは異俗であるが、恐らく何かの理由で斯うした例外が生じたのであらう。詳しくは参考文献に就いて知られたい。

〔参考文献〕

日本婚姻史

(中山太郎)

春陽堂本

② もり木は錦木の遺風でないかと考へる。此の木を彩り婚方より贈ることがあると云ふ點より推すと、例の孕待棒に類するものと解したい。

③ 嫁を媒酌人の家に宿らせる理由に就いては、種々なる暗示が投ぜられるが、所詮は初夜権が新郎以外の者に有つたことを示唆してゐるものと考へる。前掲の「日本婚姻史」を参照せられたい。

④ 旅立に就いての民俗は、各地方に涉り種々なるものがある。

〔参考文献〕

旅行と民俗

(中山太郎)

民俗點描所收

秋田風俗問答 終

奥州白川風俗問答

(内題)

諸國風俗問狀

屋代太郎弘賢

答乗邨

正月

元日 門松の事、松竹を立椋ゆづり葉裏白海老等を付るは通例、他草他木を用る事も有之候哉、蘇民將來の札の有無、製作如何様といふ事をも御注し可被下候。

答 白川近在町方農家にては、大方松竹ばかり飾り申候、尤相應に暮し候ものはだい／＼ゆづり葉裏白等も相用候、其外他の草木は相用不申候。蘇民將來の札は一切無之候故勿論製作等は不辨候、割註。乗邨曰、仙臺邊に至れば左右の門松の脇に、力柱とて九尺ばかりの柱に藪柑子を結付て立るを見及ぬ、おなじ奥州の中にも介川邊にはなし、尤藩中の門松は江戸に同じ。

鏡餅の事、家々にて佛神等何等の御前に備候哉、武家にて具足の御鏡町家にて帳のおすはりといふ類、土地につき職分につき何等の品物に供候事候やらん、家内めいめいの分の鏡も候哉。又鏡にすはるとか鏡にむかふとかいふ行事も候哉、もしあらば其體いか様又何體の親類に贈候やらん。

町在農家にては、年徳神へ一備、田の神へ一備、其外家内に勸請の諸神、先祖の佛殿へ備申候。尤田の神へは

昆布等を相添かざり置候て、十一日農家鉞入と中て、年徳神へ上ケ候根松と田の神へ備候、鏡餅一ツ田所へ持
参り三鉞打かへして祝、跡一ツは廿日まで差置候て、夫を裁割家内にて雑煮にいたし祝申候。尤親類へ送候事
在家にては相互に無之、其外家内諸神へ備候餅は、棚おろしと申て四日の朝雑煮にいたし祝申候、家中にては
親類贈答はじめ江戸同様に御座候。

屠蘇の事、年少のものより飲はじめ候敷、第二には尊長の人飲候敷、猶年の次第により若き人より飲候敷。

家中にては其家の年少より飲はじめ、第二には其家の主たるもの飲、夫より家内の順に吞候が通例に候、町在
にては多分は屠蘇を祝ひ不中、祝候もの有之候ても、いづれより飲はじめ候など申事は無之候。其内町方にて
は相應にくらし候ものなどは、家中も見習ひ聞習ひにいたし、年少より飲候も有之哉に候へども、畢竟土地の
風俗とは聞き不申候。

組重の事、數の子田作たゞき牛房煮豆等通例、其外何様の品候哉。

町在にては組重と申程にも無之候へ共、數子田づくり煮しめにいかするめ牛房こんにやく芋とうふ等入候て相
用ひ申候、相應に暮候ものは組重にいたし候ものも候、家中は組重御問合之通に御座候。

雑煮餅の事、菘芋大根人蔘田作など通例、其外に何等の物候やらん。

町在農家にては、相應に暮し候ものは増重と申て、元日より三日まで毎朝餅つき候て鏡餅の上へ一ツ、相増、
三日迄に都合五ツにいたし、尤家々によりて雑煮もいたし候。やはりいも田作にんしん凍豆腐など相用申候、

城下町にては多分雑煮いたし候、是は通例也、家中は江戸におなじ。其内元日斗或は三ケ日五ケ日、家々の佳
例に従ひ候。

年徳神の棚の事、其體いか様供物等もいか様に候哉。

町在農家にては、年徳神棚の中段へけんだひと名付候て、繩を素十文字に結び、それへゆづり葉裏白だい
炭こんぶ串柿等を付、かきたれと申て紙を切下げ申候、棚の左右に根松を上る、中段には鏡餅二ツ上げ神酒を
備候也。家中にては至而質素なる事にて、松板挽落し候儘の板を恵方へ向ひ釣り、其上に紙を敷鏡餅を備、神
酒を備候までにて、さしたる事は無之候。

えはう参の事、一日敷二日敷神敷佛敷、其體いか様に候哉らん。

在家にては元日に其所の鎮守に参詣いたし、夫より旦那寺へ参る事也。城下町をはじめ近在の町にても市立有
之所にては、大晦日終夜賣買、或は年中懸賣の算用等にて夜中骨折候事故、元日は何方も戸をメ休み候故、恵
方参を元日にいたし候は稀にて、敢て日を定候様には不聞候。其内城下町にては松の内に、鎮守鹿島宮へ御供
備として惣町参る事也、混雑故たとへば何町は五日何町は七種何町は九日と日を極め、一町ごとく参る也、
別に恵方参とて参る事は聞えず、藩内にては恵方参とて別に参る事はいたさず、人々鎮守へ打せいで参る事也。
餅花の事、つくり様如何様に候哉、又何ぞの吉祥と申來し事も候やらん。

藩中にては通例之通、年内餅搗之時柳の枝に餅花を付、是を三月雛の豆煎にあられにいたし候、町在にては此

餅花といふはなく、正月十四日團子を拵、水の木或は櫓の木に餅花のさく付、年徳神其外諸神先祖の佛殿備へ餅の鏡と引替、此團子を三日めにとりて團子汁にいたし祝候。尤相應に暮候ものは、此團子にて茄子胡瓜蕃椒等の形にこしらへ付候よし。是等の事いたし候身上よろしき大百姓は、臺所の土間に臼を据え、其内へ團子をさしたる木の倒れざる程に米の粉を團子の如く練り据置、それへ團子さしたる木を飾申候、通例のものは軒口などへさし置候。

破魔弓はご板ことなる製作も候やらん、又はまといひて竹の輪を投廻して、小き弓矢にて射る事も候哉。

はま弓はご板の事は、町在農家にも品に高下は候へ共拵方に替りは無之候。又はまといひて竹の輪を小弓にて射る事は無之、はまといひて竹の輪を桶の箆の如く拵へこかし、鞭などの棒にて打ながら轉し候子供遊びは有之候へ共、正月に限りたる事には無之候。

子供あそびの事、はね手まり道中双六歌かるた等通例、其外何條の事候やらん。

家中にては御問合の外は無之、町在とてもおなじさまながら、農家杯にては歌かるた道中双六やうの事はいたさずはねてまり杯は通例之よし、男の子は風を正月より上候へ共、正月の遊びと定り候事には無之、農家にては田甫へ出畔へたて、泥を投合、勝たる方は其年の田の取實ありとて祝ふ事のよし。

今日寺社に一年の事をまじなひ、又は一年の吉凶をうらなひ候行事候哉。

町在共元日に定れる寺社の咒占等の事は無之。

二日 掃初何様の事候哉 答此等の事は定りたる事なし。

三日 うたひ初松囃子等の類も有之候哉。

城下町はじめ町方にては誦初囃子等はいたし不申、ふる農家にては二日の晩家内男女打寄はやり歌等をうたひ、其年の豊年を祝し候よし。

門松をとる日の事、或は三日或は七日十五日等いづれの日を用ひ候哉、其門松は何等の事に用候哉。

家中にては家々の佳例も有之候へ共、多分は七種に引申候、町家農家にては十四日晚、曉鶴の聲を相圖に年徳神のかざり物と一集めにとり、十五日に一村不殘相集候て、子供など大勢集り焼拂跡を清め申候。是を方言にてどんどやきといふ、城下町にては十五日十六日兩日にどんどやきをする事なり、年始の鏡餅を此時どんど焼の處にて焼、家内もれざるやうに喰ふ、是年中の疫を拂ふ咒なりといふ。

吉書始、讀書始、武藝の初、農家の事始、工商諸職分の事初、諸事諸藝の事初、山野浦牧などに付て異なる事初候哉。

家中にては吉書初は元日二日の内、思ひより次第にいたし候、武藝は弓馬劍鎗炮術居合柔長刀等をはじめ、其流々の定日有之、藝初尤麻上下着惠方に向ひ遣ひ初申候に、神酒頂戴までにて外に式立候事も致し不申候。讀書初は吉書初に准じいたし候へ共、家中一統の讀書初は、主人より立被置候學校立教館にて、正月廿二日教授白鹿洞書院の揭示を講じ、一統承之候を諸生の讀書初と唱申候。町在にては讀書初等は無之、吉書初は元日二

日之内にいたし候、認候吉書を鎮守或は天満宮鎮座有之處は其宮へ奉納いたし候、工商諸職はじめ等の事は、強て國柄に依てかはりの事も無之由に御座候、農家にては六月に山入はじめとて、備餅と田作昆布等を山へ持参り山神へ備へ、薪柴等を取り祝也。尤其日に農事糞仕事等のわざも事初をいたし候よし〔割註。田所飯入はじめの事はかきみ餅の處にくはしく記し候〕。

親屬住來の饗應に喰摘屠蘇雜煮など通例、外にも異なる事候哉。椀飯と申事も候哉、其體如何に候哉。

藩裡にて御問狀之通例に有之、尤相互に親族雜煮を出し候上、膳部等を出し候へ共、椀飯振舞などいふ事はいたさず候。町在とても數子田作等にて祝儀一と通り、酒差出し雜煮等にて祝候のみ、國柄に依て異なる別は無之候。

七日 七種粥菘芥芹など入候事通例、此外に何等之菜を用候哉。七種をたくく時唐土の鳥といふ事を唱候は通例、此外にも有之候哉。

家中にては江戸にかはる事なし、町在にては芥芹蕪ほんだはらつのまたこんぶ申柿等入候て祝候由、其外は異成品不用候へ共、つのまたほんだはら昆布くし柿等用ひ候は他に不承事に有之候。尤七種はやし候は唐土の鳥の外唱不申候。

十一日 かがみ開きの事、異なる事も無之哉、藏開きの事。

家中にては家々佳日を極め置、鏡開祝候までにてさしたる別も無之、鏡餅を割候は大俎板に居置、斧を以てわり候、是故實通例にも候哉。町在の事は鏡餅の條にくはしく認候、城下町にてはどんど焼に焙り祝候、是もどんど焼の所にくはしく藏開きは町在にては多分二日三日の内に祝ひ申候。

十四日 道祖神祭の事、何様の事候哉。

城下町にては十四日大手先へ神體しかと道祖神 共分り兼候を遷座いたし祭申候、是を市神祭と申候、此日鉤からにて牡丹のやうなる花を作り、夥敷持出候を人毎に買取佛神へ備申候、依而花市と唱て市はじめに御座候。土地相應見せ物飾物等いたし大に賑申候、他に承り傳不申候祭に御座候、道祖神を祭候村々も稀には有之候へども、おしなべての義には相聞不申候。

左義長の事、其體いか様唱候事も有之候哉、又十五日を用候處も有之哉。

多分十五日を用申候どんど焼と唱申候、門松とり候處にくはしく記し申候、在中抔にては左義長抔唱候事は不相辨候。

削かけの事、有無如何哉、まほ玉の事其體如何。

けづりかけはいたし候ものも有之候へ共、まほ〔繭〕玉は曾て無之候。

十五日 赤小豆粥の事、餅あづきなど入候は通例、其外の物も入候哉 答町在とも通例外にかはる事なし。

大のこんごうの事、有無如何、卯杖卯槌などの類有之候哉 答兩條共曾て無之候、わか餅いく日につき候哉。

城下町にては十三日に搗祝申候、農家にては多分十四日に搗申候。
十六日 齋日の事候哉。

大齋日と唱町在共菩提所杯へ参り申候。土俗地獄の釜のふたのあくる日と申て、商農共に家業を休候よし。
廿四日 ちびす講の事、町在に有之哉。

町在共に初ちびす講と申て、あづき飯に大こん牛房いか草蕪とうふ等の煮メに祝ひ申候、尤町方にて酒肴調ひ祝ひ候へ共、十月夷講杯ほどには無之由、若夷とも唱申候。

此月萬歳の類、いか様のもの候哉。

萬歳土地には無之、町在共會津邊より毎年参りて廿日過より廻り、其家々を祝し申候。又此類にて正月松の内より廿八日まで毎日大黒舞とて乞食體の者門々を祝廻申候、此祝唄ひまはる歌〔割註。此大黒舞は城下町の事也〕

一には大黒二に布袋、ほていさんまの住家を、くはしく尋ね奉れば、是より唐國すみせん山の林下には、子供あまたもたれた、てう愛のあまりに積し菓子は、何々、なに／＼とはおろかなる松のみどり子

二つにはふり袖、世は直なれや笹の實三界の銘物に、あまたの菓子をつめさせ、我朝にいたる時、五人のから子を先にたて、あまたの寶でござられた

三つにはみよしのに嵯峨醒醐志賀のさくらは、九重に匂ひのふかき萬々歳、清水に舞臺の櫻にわねの浦、若の浦あり須摩もあかしのよき世の中に

四つて世なみのよひせう／＼、狸々と申するは龍宮界のもて遊び、常にさ／＼をもる時は蘆の葉の笛を吹、浪のつゞみをとると打は、四海の波もおだやかに龍神もつかび出、今や酒もりせんとて、白銀のさかづきこがねのてうし、月の輪のひさく呑ともかはらず、くめども盡せず萬歳樂は、何よりもつてめでたいな

五ついづみの若ちびすさんまは、太神宮の御三男、八歳の御時に西の宮へとうつされたり、なれどもおちびすは海上を守らせ給ふて、すまやあかしの磯千鳥、難波の浦より船にめしてなだの沖へと船をとめ、春の日にかがやくばかり風をなぎ、から綾の帆にてとう／＼しやんとの船にこなたの沖へと船をとめ、世々をこめたる釣竿に、わがたのしみの面白やと、海上にひたせばあがる魚類は、何々なに／＼とはおろかなるしやう魚にかとにますの魚、御世はめでたの姫小だいを釣あげた、正月の廿日と、月の廿日に御ちびす講をいははれたり〔割註。此末十まであり煩はしければ略す〕

此外色々の祝言をいふて、町在をまはりあるけ共、定りたる事にてなければ省き候也。

此月神事の事、一社に限りたる行事をも少も異なるは可被注下候、供物奉納物うり物なぞ何様の事候哉。

他にかはりたる事無之、但し町々在々にて吉日をえらび鎮守の神主、或は修験を請じ一村商農を休み、安全の祈念をいたし候。

此月佛事のこと、佛菩薩の縁日、祖師開山の忌日、供物奉納物賣物等いか様、修正會といふ事候哉。

町在共寺々にて、祖師或は開山忌等の供養の類は有之候へども、格別の儀は聞き不申候。

此月を好み用る事、何等の事候哉、此月をいみさくる事何等の事候哉 答兩條共好み忌候事は不相聞候。
正月の御問狀の外に

正月家々間毎に輪注連を飾候、是は通例歟、此注連を外飾り物を取り、どんど焼に門松と共に焼拂候はんを、其儘さし置初度申に取束ねて、土蔵の棟へ結付候、是は盜賊除の咒のよし町在共におなじ。

十一日商家にては帳綴の祝ひいたし候、此日大福帳はじめ諸帳面を綴申候。
十五日朝城下町へ大鼓三味線にて鳥追とて廻申候。

江戸のごとく婦人の乞食には無之、男女打交りまはり申候、尤乞食體のもの也、東都のごとく元日よりありき不申候。

松の内巫女、町々在々をまはり申候。
松の内に其年々穀類を入候俵を作候、是を福俵と唱申候。

梓衛村(岩瀬郡)鹿島宮鎮座 所謂式内 梓衛神社 元日の朝一村社頭にて若餅を搗神前へ備、其後家々へ持歸り、是を雜煮にいたし候、元旦を祝申候、是は他に承及ばず候一奇事に候。

① 正月に田ノ神を祭るは、殆ど全国的であるが、その作法は地方ごとに差別がある。正月十一日を田打正月と云ふは、山陰山陽の諸國にあり、殊に播磨多可郡では此日に白餅と白酒を供へて田ノ神を祭り「一鉢に千石、二鉢に萬石、三鉢に數しれず」と唱へるのは、此の三鉢打と通ずるものがある。上野の御嶽立、武蔵の作入れ、紀州の地祭り、長門の御

物始めなど、名は異れど實は同じものである。

② 年徳神の棚飾りは、土地により家例により相違して居るが、寡聞にして「けんだひ」なる物を知らぬ。けんだひ或は見臺の意で、神棚の局部の義とも想はれる。

〔参考文献〕

年神の種々 (北野博義) 日本民俗連載

③ 我國の市が神社の祭日、又は寺院の縁日に開かれた事は、言ふまでもないが、その日限り市が追々と定市に發達して遂に市場(又は町屋)となつた事も言ふまでもない。折口信夫氏の考證に由ると、市の始めは神社の祭日に、山人と海人との物々交換にあるとの事である。

〔参考文献〕

時代と農政 (柳田國男) 聚精堂本

④ 餅花のこと、越後では餅穂、信濃では花作り、飛騨では花餅とも云ふて居る。稻の花の斯くも賑かに咲き豊稔なれとの祝福である。攝津田尻村の年徳さんは、俵を神壇として迎へ、その俵に三階五階の松を挿し、これに注連を張り山の草も飾り、餅花の木も此の俵に挿すといふ。俵の米は後にサナブリの日に飯に炊き、餅花の餅は二月の涅槃の日に食す(以上、歳時習俗語彙)。そして、此の餅花が白川の藩中に在つて町方に無いといふのは、恐らく白川侯が前封地からでも將來したものかも知れぬ。

⑤ 田植に泥仕合をするのは、殆ど全国的の民俗である。土佐の高知地方には今も泥掛が行はれるが、當日は早乙女(處女に限る)晴装して挿秧するに、近村から若者達が手傳に來るが、女達は「お祝ひ」と呼ばりながら散々泥をかける(風俗畫報七三號)。阿波麻殖郡農村の「のたうち」は、田植の折に通行人を見かけると「祝ひまじよ」と言ひつゝ大勢の早乙女が、田の泥を手に持ち又は前垂などに包んで投げつける。巡查や他郷人は此の手にかゝつて苦められると云ふ(郷

土研究四ノ一一。常陸真壁郡大實村では田植の終る日に、男女が集つて田の中で泥の投げ合ひをするが、平生、怒まれて居る者は散々の憂目を見せられる（自然と人性）。奥州で名高い白石嶺の敵討の發端である、代官志賀四七に泥を掛けたと云ふのも、此の泥祝儀であらうとは先輩の考證がある。正月の田遊びに泥を投合ひ年占としたのも、又その祝儀に外ならぬのである。

〔参考文献〕

田植特輯

（諸家執筆）

島根民俗二ノ四

⑥ 天満神が文學神として、國民の崇敬を受けるやうになつたのは、必ずしも此の神の本然の相ではない。天満神は崇り神であつて、人間に幸を興へず却つて禍を加へる神であつた。即ち怨靈崇拜に出發した惡神である。それが何時の間に文學神と昇華する、神の上にも人の上と同じく、運不運が伴ふてゐるのである。

⑦ 七種に馬尾藻や角俣を用ゐるとは、筆者の言ふ如く他に聞き及ばぬことであるが、しかし、七種は必ずしも現今の如く「芹なづな五形はこべら佛の座、すなすとしるこれぞ七草」ではなくして、斯う固定するまでには幾多の變遷があつた。祇園執行日記の文和元年正月六日條に「堀川神人役七種菜云々。ナツナ、ク、タチ、牛蒡、ヒジキ、芹、大根アラメ、各方五寸折敷、次各入也」とあるから、まだ此の頃は何物でも七種ありさへすれば事足りたのである。されば白川の七種は固定以前の、古い民俗を残したものであらう。

〔参考文献〕

七種菜

（山崎美成）

民間時令卷一

⑧ こゝでは道祖神を市神として祭つたとあるが、これは變則であつて常禮ではない。由來、我國の道祖神は、元は岐神であつたのが、後に支那の道祖神に附會され、更に佛説の青面金剛に習合されて、種々なる神性を有つやうになつたが市神としてゐらるべき機能は無いのである。これは恐らく東北地方の習禮として、道祖神の小屋を町中に建て祭るので

市神と誤つたものと考へる。そして、我國の市神に就いては諸説あるも、その考證は他の機會に譲る。

⑨ 俗説に因ると、輪注連は女陰を牛蒡注連は男根を象徴したものと云ふ。全體、注連の起原に就いては、北方説と南方説との二つある。前者は尻久米繩を曳き渡したに起ると云ひ（古代記）、後者は南洋土人の女子の腰囊に始まると云ふのである（山中共古翁）、こゝには兩説の批評は避けるが、とにかく同じ注連にも男性と女性とあることは明白である。殊に此の輪注連を初庚申に取るとは、多少の因縁なしとせぬ。即ち庚申の原義は性の解放であつたからである。庚申に就いては他のその條で詳述する。

⑩ 鹿島神は眠り好きの神で、殊に正月は元日から七日まで眠りつゞけるので、氏子の者は靜肅を旨とし、臺所で庖丁を遣ふにも、音を立てぬやうにと慎むのに、此の鹿島神は元朝から祭り騒ぎとは、ちと解せぬことである。

二月

八日 事始の事。江戸にてはおこと汁とて、人蔘牛房こんやく、あづきなど入たる汁を煮也、此類の事何事か候哉。

家中町共に御問狀の通りの汁を煮申候、尤白川にてもおこと汁と唱申候、是を婦人の針供養など申習はし候、町方にては家毎に笹を竿の先に付上申候、是は江戸と同様敷と被存候、在中にては餅をつき豆粉にてとり、九日の夜田の神おろしと申て、生松葉をいぶし、から白をつきならし、其餅を田の神へ備祝候、是を農事の事始と唱候よし。

初午稻荷祭いかやうの事に候哉、諸國子供の手習初此日を相用ひ候哉、何と異成事も候哉らん。

家中町在共木綿織などの外に、手習子供など五色の紙にて神號を書幅を奉納いたし候。尤子供所毎に稻荷の社頭へ集り太鼓など打遊ぶ、其外異なる事は無之、江戸などのごとく萬燈などは持歩不申、尤社頭はじめ奉納の灯籠を家毎にともし候。

彼岸團子を供候は通例、猶何等の供物候哉、又讀經說法杯通例、猶何等の法會候哉らん。

家中町在共、彼岸中にだんごを内佛へ備へ申候、其外別に彼岸の供物は無之候。寺院にて讀經說法はことごとく有之ゆへ、彼岸参ると老人男女共に、寺参候杯は江戸同様に候。扱農家にてはたなかしと唱、村々にて種粃を此節より近の池へひやし候、此池を種ナ池と唱村毎に有之候。

十五日 涅槃會の事、だんご粟飯など供候歟、其外殊なる事候哉。

農家にては團子など佛前へ備候、城下町にては家毎に小豆飯を炊、佛前は勿論荒神等へ備候よし、其外替る事なし。

此月社日につきたる行事候哉 答爲異行事無之候。

此月神事に豊年を祈候行事候哉。

さしたる行事は無之候、蠶飼をいたし候ものは、日を撰み鎮守へ團子備へこがひを祈候、又蠶飼濟たる時も團子を備候、是を蠶飼だんごと稱し候。農家にては此の月は山の神祭と稱して、村々にて農事を休み酒肴にて祝ひ候、尤村毎に休日有之、相互に親族等を招き候よし。

此月佛事に修二月會といふ事候哉。

此月を好み又此月を忌さくる事。

兩條共に無し。御問狀の外に、城下町々にては二月朔日より毎月の朔日には、小豆飯を炊家内祝候風俗に有之候月々の處に省略す

① 田ノ神おろしに松葉を燻すこと、全く他に類例を聞かぬ。これは我國では古く神は煙(雲の意)に乗つて降るといふ信仰があるので、斯うした民俗となつたものと信ずる。尤も松葉を燻す行事は他に幾つもある。九州太宰府觀音寺の松葉燻しは(太宰管内志)、餘りにも有名なので省略するが、信州川中島邊では、正月十五日夜に貧乏神を追ひ出すなど、稱して、盛んに松葉を燻すが(民族三ノ一)、これも始めは白川と同じく年徳神降臨の作法であつたかも知れぬ。

② 空白をたゞく事は、我が古代の音楽であつて、今に白太鼓といふのが残存してゐる。昔は現代人などの想ひも寄らぬ音楽?が神前で奏せられたが、その中でも箕の裏を爪で搔くのは(政事要略)、尤も奇抜の一つである。また春の社日の餅を搗く杵の音を聞いて、山ノ神が里へ降りて、田ノ神となり、秋の社日の餅搗く音を聞いて、田ノ神が山へ歸つて元の山ノ神になると云ふ俗信は今に各地に行はれてゐる。更に各地にある杵舞といふのも、白を樂器と見て始めて解釋される民俗である。

③ 二月八日を事始めと云ふのは誤謬であつて、正しくは十二月八日が事始め、二月八日は事納めなのである。即ち正月に年神を迎へるの祭りの準備を十二月八日に始め、年神祭りが二月八日に納めとなるのである。そして、事とは即ち神事(カミゴト)であり祭儀なのである。事ノ餅、事汁、事日など其の用例は妙くない。

④ 我國の開始農業期にあつては、稻は稈種をそのまま田に蒔いたもので(これを蒔田といふ)、稈種を苗代に仕立てるのは(これを植田といふ)、やゝ時代が降つてからである。萬葉集卷七に「齋種蒔く新藝の小田を求めむと、足結出で沾れ

ぬこの川の瀬に」とあるは、即ち前者の例で、同集巻四に「言出しは誰が言なるか小山田の、苗代水の中流にして」とあるは後者の例である。萬葉時代には兩法が併行したものと見える。そして、こゝに種親を池に浸すとは、苗代に仕立てる準備なのである。

三 月

三日 ひな祭の事、草の餅を菱に切たる、又桃の花等通例、何ぞ異なる品も候哉。菓子魚鳥の形をらくがんに作りたる通例、猶ことなるも候哉、草の餅は、こ草をも用ひ候哉。

雛祭御問狀の通すべて替事なく、此外に野老あさつきを備申候、是は所の風俗に候哉悉く備へ申哉、草の餅にはは、こ草を用ひ候事は、蓬多き土地から故か一向用ひ不申、尤は、こ草も多く有之候へ共、草の餅に用候事も辨不申もの多く有之、は、こ草を白川邊にてはち、こ草と唱申候て、夏蚊遣薬に用ひ候事に候。

此月水口祭といふ事候哉、何様に候哉。

在々農家にては、八十八夜の前後に、苗代へ種をまき終り候節、苗代の水口へはこの木に、紙を三角に打はさみ候て立、焼米をまき祝ひ申候、尤牛王をはさみて祭るも有之、是を水口祭と唱申候。

此月苗代たなむなどにつき、殊なる行事候哉。

苗代たなむは、春の彼岸に池をさらひ種親を浸し候、此事に可成有候、彼岸の處にくはしく記し候。方言にて

種ナ井の事を種ナ池と申候、三月の節にはたなむ等候事無之。

此月神事のこと又佛事のこと。

三月十五日に梅若忌とて、番場踊といふことを城下町にてする事なり、梅若は白川郡泉崎村に、むかし人買惣太といふものありて(割注。惣太屋敷といづみ崎に今に荒地にありと云)此もの梅若をかどわかせしより、今に

いづみ崎の生れの人、角田川梅若墳に行けば必ず風雨の荒ありとて、此村の人は江戸に出ても隅田川に行事を禁ず、實にふしぎ有事とぞ、此所謂にて有べけれど、いかにして白川城下町にて、梅若忌をするにや詳ならず。

此番場踊は大半切に水五斗より七斗位まで入れ、その真中に櫻も、柳の大枝をさし入て、又其中へ木鉢をうつ伏にして、杓子にて拍子をとりと、き候へば、どん／＼となる也、是をうつて拍子とす、其おどり子は、其番

にあたりたる町内の十三四位の女の子供、田舎相應のもめん衣装をかざり、たすきを花やうにむすびて、其大半切をまはりながら、杓子にて木鉢を打て拍子をとりとおどる、實に田舎びたる行事也、其唄ものは、

「番場エ、ヤレソレ番場てうまる二ノ丸かうまる。おん小袖の、もみのうらトン／＼ヤレソレ紅の裏とはと
なたの事か、おこん小袖の、もみの裏、紅のうらとはとなたの事歟ヤレソレトン／＼」

「あはれなるかな梅若さまは、しらぬあづまの土となるトン／＼ヤレソレ。
「おらが姉さま三人ござる。ひとりあね様おたいこ上手、ひとり姉さまおつつみ上手、下谷エ、ニヤレソレ下

谷一ばん伊達しやでござる。五兩でエ、ニヤレソレ五兩で帯こふて三兩でくけて、くけめ／＼へ七ふささげ

てトン／＼ヤレソレ／＼。

此外歌數十斗もあり、煩はしければ略す。

此月を好み用ひ此月をいみさくる事 答なし。

- ① 田の水口に接骨木を立てるとあるが、筆者の郷里である足利市外の農村では、正月十五日に同じ接骨木にて削り掛を作り（簡単に木頭を二ツに割り餅を挟むのもある）、それを取り置いて苗代に立てる事が行はれてゐる。白川のも或は斯うした事ではあるまいか。因にアイヌ族も接骨木を靈物として、イナウを作ることがあるも、彼之の交渉に就いては知る處がない。來哲に俟つ次第である。
- ② 牛王の起原に就いては、他の條で述べる機會もあらうと思ふが、こゝでは産士（ウブスナ）神としての意味と解すべきであらう。
- ③ 番場踊といふもの、信州善光寺に行はれるとあるが（信濃民謡集）、歌章から推すと兩者は別物らしい。或は白川の番場踊は、順番に踊るの義かも知れぬ。猶ほ木針を水中に浮かべ、杓子で叩いて俄拵への木魚に代用することは、現に各地に行はれてゐる。
- ④ 梅若塚は諸説あるも、所詮は徳川幕府の獄長たりし石出帯刀が隠居後に、謡曲「隅田川」に基き此處に塚を築き柳を植えしに始まると云ふ説が穩當と思ふ（紫一本）。その梅若を奥州信夫の藤太と云ふ者が誘拐したとあるが（梅若縁起）、果してそれが白川の者であつたかは確證がない。江戸名所圖繪には藤太は奥州南部生れとある。また白川者が梅若塚に往けば雨降ると云ふが、これに似た傳説は他にも幾つかある。東京矢口の新田神社へ江戸氏の者が參詣し、又は伯耆の大山寺境内の下山神社へ鈴木姓の者が登拜するとき、同じやうに風雨があると云はれてゐるが、その源流は懸靈崇拜に出發してゐるのである。

四月

一日 衣がへ、いかなる事候哉。

家中は勿論江戸同様、町在にては急度相改候程の事も無之由。

八日 佛生會、うぶ湯は甘茶を用候通例、猶何事か候やらん。花御堂の製作いか様に候哉、千早振卯月八日はといふ歌をも書候歟、其外何事候哉。

町在共寺院灌佛には、甘茶を用候は通例也、此甘茶を貰て眼を洗へば眼疾を除くとて、俗家にてはことごとく是を貰ふ家中にて此事なし又此甘茶に墨を摺いといふ字、四角の紙に書て柱に張れば、不淨の虫を拂ふとて、家毎にかくする事なり、又此甘茶をさよげ十六さの種を浸して栽れば、虫つかずとてかくする事也。花御堂も寺院毎にあり、藤山吹つゝじなどの花にて屋根を奇麗にふく、尤花は何花に限らず有合せの花にてふくことよし。千早振卯月八日の歌も、虫除と申て短冊にかき逆さまに張、いか成いはれといふも辨へなし、又此日草だんごを製して佛前に備ふ、是を鼻くそだんごといふいかなる謂にやしらず、是は家毎にする事也。

此月神事、佛事、此月を好み用ひ、又此月を忌さくる事 答右いづれも是といふ事なし。

① 白の三字を書いて咒符とすること、寡聞のためか他例を知らぬ。いづれ密家か修験の俗信に由ることと思ふ。
 ② 鼻くそ團子のこと、三州吉田領の條に繪入りで説明したいと考へてゐる。敢て参照を乞ふ。

五月

五日のぼりの事、武器の類を飾り候は通例、納外の品も有之候哉、食品なども定れるやうにやらん。蓬苺蒲をふく無殊事候歟、又製菓の事候歟、まじなひ事なども候歟。

轍はじめすべて飾り物、蓬苺蒲をふくなどの事は通例かはる事なし、食品柏餅粽等もあへて他に替る事なし。農家にては餅赤飯等いたしも多く有之、製菓は此日百草を野に出て取、此夜露を受けて百草霜にして貯置、強て國風と申にも無之、咒事は是をさしていふ程の事なし。

此月田植につき何條の事候哉、さびらきさのぼり等何様候哉、田植歌に古風も候は、可被注下候。

郡中農家にては、田植入梅之節、田植よしと申日に植初申候、尤其日は小豆飯煮^ア等にて祝ひ申候、是をさびらきと唱申候。植仕廻はさなぶりと申て、其日植仕舞の田の水口より苗を三かぶぬき、その跡へ三株うへ替、初にぬきとり候三かぶは家へ持かへり、釜の神其外家内諸神へそなへ、其折もあづき飯煮しめは大根田作いも午房いか豆腐の類を肴にて、親類打寄酒給へ申候、是をさなぶり祝ひと申候。さのぼりさなぶりは道音にておなじ事歟と存候、土俗國風のなまりにてさなぶりと申候事に可有之候、田うへうた、なひの中のうぐひすは、なにを、とさへづる、くらますにとかきそへてたわらつめ、彌^ウ十郎とさへづるとうたひ申候。

尤うた數は多く有之趣に御座候へ共、いづれも歌の仕舞は彌^ウ十郎と留候也、夫ゆへ彌^ウ十郎ぶしと申候よし芭蕉の「風流のはじめや奥の田うゑ唄」と詠じ候も、此歌を聞いて、何となく吟じ出たる事に可有之候。

此月蠶飼につき行事候哉。

領主より世話にて、當時は蠶飼を多くいたし候へども、前々は強て專業には不致候故か、行事と申程の事は無之、蠶飼之節鎮守の社家へたのみ、幣を切貫ひ候てこかひの處に立、或は祈念の幣を、鎮守社へ奉納いたし候までの事に相聞候。前に記したるこがひ團子くらゐの事にて、外に何も無之候、おなじ奥州にても、安積安達より伊達信夫等の郡々は、蠶飼を專業にいたし候へば、行事も多く有之よしに候。

此月神事、又佛事。

村々にては修験社人を招請し、一村農業を休み、曆の下段田植よしと申日の前に祈念の祈禱いたし置、田植よしと申日より前文の通田植初め申候、是を村日待と唱申候。

此月を好み用此月をいみさくる事 答すべてなし。

① 五月五日に製菓したと云ふのは、古い製菓の故實に負ふものと考え。然も此の事の荆楚歲時記にあるより推して、支那よりの移俗である事は言ふまでもない。昔は公家、神職などの舊家では皆それらの家傳菓を製したものである。又これを學んで民家でも製菓したやうである。

② 田植する吉凶の日は土地により相違するが、白川に近い下野那須郡では、苗代蒔から四十二日目、又は四十九日目を

忌み田植せぬ、若し此兩日に挿秧すると苗が病み不作だと云ふ(郷土史話)。これは四九日死苦日の國音を嫌ふのである。越後の各郡では種蒔から三十三日目を大苗日と稱し、田植することを不吉とした(北越月令)。これは三々が散々に通じるからである。紀州有田郡では種蒔から六十一日目を苗代厄と稱し、田植をせぬ事になつてゐた(同民俗誌)。伊勢飯南郡でも同じく水口祭から四十九日目と六十一日目を苗厄と稱してゐるが、此の日に田植すると眼が潰れると云ふ。しかし、此の六十一を嫌ふのは人間の還暦を聯想しての事である。稻を人格視した古代民族の信仰には、深刻なる事由が潜んでゐるが、到底、筆序に書くやうな簡単な問題でないのでは預るとする。

③ 田ノ神を「さんばい」と云ふ地方は相當に廣いが、さて其のさんばいの原義に就いては諸説あり一定せぬ。苗を三把とり神體として祭ると云ふ説が、古くから廣く行はれて居るが、伊豫温泉郡の農村では、苗代播種後に水口に「お三拜をろし」をする。三拜とは三度拜禮の意で、儀禮に「主人西南面三拜、衆賓皆答一拜」と見え、また釋氏要覽には「釋氏以三拜者、蓋三業歸敬也」とあり、即ち身口意の三業を表はすと云ひ、又一説には耕作の祖神なる大年神、御年神、若年神なりとも云ふ(以上、余土村誌)。斯うなつては民俗學の埒外に出るが、猶ほ他のさんばいの條で補説したいと考へてゐる。白川の苗を三株ぬくのもさんばいと關係あるのかも知れぬ。

④ 奥州でも山形青森兩縣下の田植祭やエンブリに於いて、田歌の音頭取を彌十郎と云ふてゐる。語義は明確に知られぬが、恰も中國邊の花田植のサゲと云ふ者と同じ役割であるらしい。また土地により藤九郎と云ふのが、此の彌十郎のやうに思はれる。

〔參考文獻〕

八戸のゑんぶり

(中道等)

民俗藝術一ノ四

⑤ 日待は月待と同じく、その最初は太陽を崇拜した信仰であり、月待は月球を對象とした信仰であつたので、前夜から信徒が集り徹夜して朝日を拜んだものであるが、後には日待は單なる祭禮の代名辭となつてしまつた。尤もこれは待は祭の義から導かれたものである。

六月

十六日 かじやうのくひもの如何様に候哉。

家中にては江戸の通に有之候、農家にては一向に嘉定喰の事は無之。城下町にては十五日の晝、冷麥を家毎に祝ひと申て給へ候よし、此日¹⁾うんどんを喰は虫にならざると申傳候よし、是は嘉定喰のうつりたるにても可有之哉。

土用につきたる行事有之歟の事。

土用に入日、南天の葉にんにく附木等を門に釣、疫除等の事いたし候へ共、是は白川に限り候事と不存候。其外疫除と蛇いちごの實を水にて吞候。在々農家には右等の事も不聞候、城下町にては土用入の朝かき餅を給へ并に汁の實に猪²⁾茸入、是を痢病除咒とて家毎にする、是等土用入の行事とも可申哉。

納涼につきたる風俗有之歟の事 答總而なし。

氷を藏むる所も候哉、もしこれあらば其様如何様。

氷室を置候處は曾而無之、城下より西六七里隔て、旭ヶ嶽鶴嶺毘沙門ヶ嶽、其外下野那須郡月山杯につきたる高山には、深谷に自然氷夏季迄あり、それを城下へ此月の朔日持出て賣歩く、是も寒國の風俗也。

晦日被の事、家々にて茅の輪をくゞり候哉、茅輪製作いか様に候哉、彌寺社にて如何體の行事候哉、閏月ある年

はいづれを用候哉。

晦日祓の事は至而おろそか成風俗に有之候、在家にては一村毎に疫除とて藁にて人形を作り、或は大きな藁の輪を作り、是を村毎の地塀へ持出し疫病送りとて祓いたし候。是は晦日に限りたる事にも無之候へ共、茅の輪茅の人形杯の遺風にも可有之、先づ是等は夏祓の姿の見えたるにて、外は晦日祓と申事はいたし不申候。

此月雨ごひとて何様の事いたし候哉。又降つゞきたる時晴を祈るにいかなる行事候哉。

雨乞の事村々にて農人大勢集り、修験者を伴ひ高山へ登り、注連をはりて龍神を祈り、百姓どもは簀笠をき太鼓を打高聲にて申やうは「雨たんほいはふぞさつくとふつてくりよ」と申て祈り候、又降つゞきたる時晴を祈るには、所の鎮守などへ神主修験等参り祈念いたし、農人は村限り大勢集り朝日の出るより日の入まで、鉦太鼓にて足をも休めず、念佛を申ながら立通しにて、或は輪にめぐり等して天道を祈り申候。是を天道念佛と申候、實に田舎の風俗に御座候。

此月神事、又佛事。

十五日牛頭天王祭禮、町在共に多分祭申候、赤飯を家毎にいたし、芋牛房豆腐いかの類の煮物をいたし祝申候、城下町にては前文にも認候冷麥を家毎にいたし、尤親類朋友或は得意のものを請じ振舞申候、神前へ胡瓜其外果ものゝ初なりを供申候。

△土用の處に認落し候、土用入の日蕨菜草を廁へ入れ候へば虫除或は痢病を除くよしにて廁へ入候も有之よし。

此月を好み用ひ此方をいみさくる事 答あへてなし。

- ① 蕎麥や餛飩を縁喜として食する民俗は各地にある。白川に近い下野芳賀郡の村々では、舊二月と十二月の八日に蕎麥を打ち、熊笹で組んだ塔を造りそれへ供へる。鬼の來ぬ厭勝と云ひ、家内の者も蕎麥を食ふ。筆者の郷里である足利市外の農村では、餅禮の夜には餛飩を食ふが、これは長く漬くやうにとの縁喜である。甲州西八代郡では小正月の夜に蕎麥を食ふが、かうすると疝氣を病まぬと云ふ(以上、旅傳食制號)。蛇苺の實を吞む厭勝も博索したら類例も多く在ることと思ふが、茲には懸と省略した。
- ② 猪草のことは、その名の獠猛から聯想して、避病の咒術となつたものと思ふが、或は本草にでもその典據があるのかも知れぬ。
- ③ 常陸から磐城へかけては、大助(オホスケ)人形と云ふを拵へ、これを疫病避けとする民俗がある。これはその一種と想はれる。

〔参考文献〕

厭勝 人形 (ネフスキー) 土俗と傳説一ノ二

- ④ 疫神を村界まで送り出し、注連繩を張つて歸つて來るとお祓ひするが、斯うされた隣村では勿論そのままに棄て置くので、俄に祓ひをしたり踊つたりして、此の送られた疫神を同じやうに他村へ送り出す。踊を仁和賀と云ふのは、此の事由に起ると柳田先生は考證してゐる。
- ⑤ 天道念佛は必ずしも祈晴に限られたものではなく、却つて此の場合には天道念佛が利用されるのである。全體、此の天道念佛は關東でも武藏、下總、上野の一部を中心に常磐地方にも行はれたもので、天道は即ち太陽であり、老人の男女が集り鉦鼓に合せて高聲に念佛を唱へ日出を拜し落日を拜して夕方に終つたものである。中山信名に從ふと、此の念佛には踊りが伴ひ、鎌倉期の末室町期の初に起つたもので、農民の麥稻の風水の難なきを天道に祈つたものだと思ふ(新

編常陸國誌一二。時期は概ね三月で臨時にも行はれたやうである。
⑥ 厨に入れる虫除 草は、ドクダミばかりでなく、武蔵の一部では無果樹の葉を入れる。まだ此の外に在るが、餘り愉快な問題でないので他は預るとした。

七月

七日 星祭の事、小竹に詩歌を書たる短冊をつけ、瓜西瓜果物杯供し祭候事通例。其外何等の品を供候哉、今日定れる食品も候哉、まじなひ事も候哉。

家中町在共に短冊竹等の供物等の事は、江戸にかはるの風俗も無之候、其内城下町にては、團子に根芋をそへ候て供物にいたし候。又農家にては多分うどんを祝ひ申候、又岩瀬郡に入候ては、藁にて牛を作り家の棟へ上げ申候、是を七夕の牛と唱申候、是も邊鄙の風俗に見え申候。

氏神墓所などに、草打といふ事候哉 答御問狀の事更に無之候。

盆供たま祭の事、牌をかざり候其體いか様、御膳供物等もいか様候哉、又送り火迎火等も如何様に候哉。

家中にては敢て江戸にかはる事も無之、町在にては魂棚葉のつき候竹を四方に立、ひばの葉をさげ棚を拵、眞菰のむしろを敷、先祖代々の牌をかざり、膳供は餅だんご素麺杯そなへ、其外わか和布根芋枝豆瓜夕顔胡瓜茄子さげ柿稻穂等、すべて其等の初もの有之候へば、ことごとくさげ申候。茄子胡瓜にて牛馬をこしらへ飾

申候、十五日には蓮飯を備申候、盆中灯笼も備へ申候。すべて供物跡は悉く自穢へ遣し申候一割注。自穢は乞食の類にて江戸にておんぼうの類歟迎火送火等も家々の門口にて焚申候。農家にては麻殻を焚不申松を焚候よし。

又城下にては十三日の夜、寅の一天に餅搗候而迎ひ火を焼申候、又棚經讀の僧も旦那寺より家々へまゐり申候。盆おどりの事有無如何、謠の文句も可被注下候。

城下町にては前はなもさんやれとはやすうたをうたひ、至て鄙びたる盆おどり成候が、越後領分より多く奉公人はじめ城下町近在へ家内引越参候もの追々に殖、當時にては地着の人より越後人多き位にて、夫ゆへ自然と越後おどりおし移り、今にては城下近邊にて越後おどり多し。しかし是以國風と申程の事には無之、農家遠在にては念佛おどりと名付候て、盆前より盆後まで農人男女大勢入交りて、鉦太鼓笛等にてはやしおどり候。そのうた身ふり實に鄙ぶりにて甚おかしく、それをたのしみ盆遊びいたし候、是らは國がらの踊に御座候、歌のあらまし

「さんせむさのことは、ねてもさめてもわすられぬ、なふさんせむさふとうたひそら、やれく」とはやしおどり申候、尤郡中村毎に踊候事也。

生身魂の事。

兩親有之ものは、常に殺生不好候とも、鯛釣等に遣して魚をとり、兩親へ饗し祝候事は、余國にかはり候風俗も無之候。

施餓鬼に付て何様の事候哉、ながれ瀧頂と申事も候哉、答稀には候へども年々極り候事には無之候。此月神事、佛事。

十七日十八日秋葉權現社に於て、祭の神樂興行あり。但し以前は六月也此月を好み此月をいみさくる事、答なし。

① 七夕の星祭は支那に起り、それを輸入した我國でも、その始めは農業の祈念祭であるが、いつか牽牛織女兩星の戀物語の方面が強調されるやうになり、七夕の本義は忘れられてしまった。しかし、藁で牛を作り屋上に掲げるとは、微かながらも農祭を似ぶものがある。即ち牛は穀神の象徴であるからである。因に我國の七夕の原義に就いては、他の條で觸れたいと思ふてゐる。

〔參考文獻〕

穀神としての牛

(中山太郎)

民俗點描

- ② 盆供の牛馬は、聖靈が十萬億土へ歸る時に乗るものとして、作るものであつて、七夕の牛とは全く別義なものである。
- ③ 仙臺から盛岡へかけては、盆の火は白樺ノ木を焚くが、白川で松を焚くのは、或は此の系統に屬する民俗のやうに考へられる。
- ④ なもさんやれのなもは、南無の訛語であることは、他地方の南無手踊の類例からも推測できる。さんやれ踊は古くから常陸國龍ヶ崎町に行はれ、文句の終りにさんやれと囃詞につけたものである(郷土民話舞踊辭典)。白川のはこれを學んだものであらう。
- ⑤ 白川侯は越後に領地があつたので、定賢侯の折に、白川地方が墾胎などの練習のため人口が減退するのを憂ひ、越後

領の若い女性たちを、やゝ強制的に白川へ移し(旅費その他を支給した)大量結婚をさせた事すらある(越後風俗志一輯)、同地に越後人の多かつたのは、斯うした事情も潜んでゐたのである。

八月

八朔の事、親類の間柄贈物も有之候哉、其體如何様に候哉。

家中は江戸に相替りたる行事もなし、町在にて親類贈物等も無之。農家にて新穀にて餅をつき、或は赤飯などにたのみを祝申候。

月見の事、芋團子を備ふること通例、此外に何そことなる供物食品も候哉。又此日まじなひ事候哉、植物の類此日を用る事候哉。

八月十五日月見の宴など、或は備物團子(割注。あづきなど付ず白だんごなり)芋枝豆柿栗等を備へ、薄野菊などをそへ備申候、あへて江戸にかはりたる事も無之。農家にては赤飯に芋を入候て蒸、生大根の葉共に備へ候。是等は國の風俗とも可申候、外にさしたる事も無之候、植物此日を用ると中も強て畑もの等には無之、石竹の種を今夜金銀箔を古びたる扇にて蒔候へば、種々の花咲と申傳へ、草花など好候ものは、多分こよひ石竹を蒔き申候。

彼岸の事。

二月の彼岸におなじく、家中町々にては團子を佛前へ備へ申候。農家にては秋の彼岸中日に萩餅を佛前へ備へ申候。

此月田刈初るに付て、初穂を神佛に奉るやうの行事有之候哉。

曆に田かりよしと申日に早稻を刈はじめ、釜の神其外家内の諸神佛殿へ備へ候、尤一村々々鎮守へ備申候外にかはりたる行事は無之候。

此月神事、又佛事に此月を好み用此月を忌さくる事 答右等總て無之候。

① 石竹の種を金銀箔の扇にて蒔くと云ふこと、全く初耳で寡聞を恥る次第である。敢て後賢を俟つ。

② 田植日の吉凶ほどではないが、田刈初の日にも好悪があつた。且つ地方ごとに異つた行事が伴ふてゐた。信州小縣郡ではカリカケと云ひ、美作英田郡ではカケボ(掛穂)と稱し、筑前遠賀郡ではカミノホと云ふてゐる。白川に近い野州芳賀郡ではカリソメマツリと云ふ。猶ほ三州吉田領の條で補説する。

九 月

衣更如何にて候哉。

朔日より袷を着用は、世上一統の事に候へども、農家にては是以改候程の儀無之候。

九日 いかやう候哉、定れる食品も候哉、又まじなひ等の事も候哉。

土地の風俗にて赤飯に粟を入、是に菊花を熨斗包にさしそへ親族相互に贈答候。農家にて餅をつき祝申候、且此月神主修驗等を請じ祈念候上、切替と稱候て所の鎮守、其外家内の諸神へ幣をあらためさゝげ申候。是はすべて中奥までの風俗と相聞き申候。

十三日 月見の事、食品如何候哉。

此月見には團子に小豆をつけ、芋を洗候儘にて茹候、栗枝豆等などそへて八月にかはる事も無之候。農家にては赤飯に粟を入候に生大根葉共に備へ、家内にては右の赤飯に、午房芋大根等の煮へて酒たべ祝申候。

此月神送りといふ事候哉。

家毎に神酒を備へ、赤飯を備へ、神送りと唱申候、城下町方にて廿八日より三十日へ懸、神送の參詣とて、鎮守へ男女老幼參詣いたし候事に候。農家にては、世上に稱ふる神送りなどいふ事は無之哉にて候へども、今月神主修驗等、藁にて人形其外劍長刀等色々の武器のかたちをこしらへ、祈念之上相送り申候、是を神送と申候。此月神事、佛事の事。

農家にては村毎に吉日をえらみ、一日休日にて神主修驗等相招祈念いたし、餅をつき酒宴を設神主山伏杯を饗し申候。

此月をいみ嫌ひ又此月を好み用る事 答なし。

① 九月に限り初九日、中九日、終九日（信州では乙九日といふ）の三回の九ノ日を祝ふのは、古くから廣く行はれてゐるが、その原義は餘り明白でない。初九が重陽である事は言ふまでもないが、それが初九日に關係あるとは考へられず若し關係あるとしても、他の中九や終九の説明とならぬ。拙考に由れば、古く節供の祝が供日（クニチ）と略稱され、此の供日から九日（クンチ）に轉移したのではあるまいか。全體、舊曆の九月となれば早稲は刈入れ、農家は新穀に恵まれるので、神を祭り身を祝ふたものと信ずる。九日小袖とか菊の節供とか云ふ事は、後世に派生した民俗である。因に三九日とも茄子を食ふことは廣く行はれ、且つ終九日に茄子を食ふと、翌年は思ふことが叶ふと云ふ土地もある。② 九日を切替といふこと、又その意義を知るに苦むのである。焼畑を切替畑と云ひ、略して切替と云ふ處も諸方にあるので（地方凡例録）、或はそれかとも思はれるが自信がない。これも來哲に俟つとする。③ 薬人形を作り送るのは、既載の大助け人形の類と考へる。所謂、出雲への神送りとは別の信仰ではあるまいか。

十月

亥子の事。

家中にては江戸にかはる風俗も無之、町在にては亥子の祝ひは、稀にいたし候ものも有之候へども、行事とは心えず風俗に有之候○白川邊より奥へ懸候て、亥子を大根の年取と俗に申唱、亥子過候而大根を引申候。廿日夷講の事家々の行事如何。

町方にては格別商買體の祝とて、大商にては賣子とて、其家より拵出す品を受賣いたし候ものなど、第一は其家々より取立出し候番頭手代上りの町人をはじめ、懇志親類等をまねき大に祝振舞いたし候事に候。夫故相互

に廿日に祝ひ候ては、さし合等にて不參候もの有之ゆへ、恒例年々參候もの共揃ひ候様に、十月十五日より廿七八日迄、夷講祝の振舞にて町方一統賑ひ申候。此時は家々得意商旦那も招請いたし候向も多く有之候て、先づ江戸町家杯の夷講の様子に粗似寄の事に有之候。ゑびすへ供物は神酒第一に鯛をそなへ、餅をそなへ時の畑つものなど色々相備申候。農家にては豪農にては祝ひ候者も有之候へども、行事と定め格別の儀も無之候。

此月神迎といふわざも有之候哉。

十月卅日家々赤飯神酒等を家内勸請の神へ備申候。城下町にては神送りに准じ、十一月朔日朝迄に追々鎮守へ參詣いたし候。

此月神事、佛事。

山の神祭と申て、農家村毎に思ひより候日に一日休日にて、酒肴等をと、のひはやり歌などうたひ祝ひ申候。至て鄙びたる事に候、并法善會式是は江戸寺々の通りにて候。

此月を好み此月を嫌ふ事。

田の神祭と申て、在中農家には八日より十日頃までに、家毎に餅をつき得意懇志の方へ送り祝ひ候、是を刈揚と唱申候。

① 十月十日を大根の年取と云ふ土地は諸方にある。陸中江刺郡では此日を大根の年取と云ひ、大根を抜くのを禁ずる家

がある。佐渡でも此日は一般に菜大根を食はず、また大根のはぜる音を聴くと云つて、島に往かぬやうにしてゐる。伯耆の各郡では亥の子の日に、大根のはぜる音を聴くと壽命を失ふとて島に入らぬ。周防吉敷郡でも亥の子の日には、インノコ神が居るからとて大根島に入らぬ(以上、歳時習俗語彙)。十日夜(トウカンヤ)の行事が亥の子の祝儀に習合されたのは何時頃か知らぬが、元は別々であつた(現に別々に行ふ處もある)のが一緒になつた爲に混雜を來した。また土地によつては「大根は十日夜の餅搗く杵の音を聞いて首を出す」とも云ふ俗信まで混入して、彌が上に複雑になつたのである。

② 世俗に十月は神無月と云ひ、多数の神々が出雲へ旅行せられるのに、夷神と金毘羅神とだけが留守居して、共に祭られるのは如何なる理由に基くのか。私案に由れば、夷神も金毘羅神も、双方とも鯨崇拜に出發した神々であるために(拙稿及び神異考参照)、その異影を恥ぢて出雲へ往かれぬ爲と考へる。夷神が鯨から昇華して、福ノ神になるまでには、幾つかの段階と變遷とを経てゐることは勿論である。

③ 十月に山ノ神と田ノ神とを併せ祭るのは、即ち山ノ神が春は里に降つて田ノ神となり、秋は田ノ神が山へ歸つて元の山ノ神になるといふ信仰であつて、然もこれが神無月の原義であることは、すでに柳田先生が道破されてゐる處である。

十一月

冬至につきたる行事有之候哉。

さしたる行事無之、冬至に入刻限に袖を糠味噌に漬置、立春に是を喰へば其年の疫を免るゝとて、多分いたし候へども、行事と申程の事には無之候。

八日 ほたけの事如何様。

ほたけの祭は、鍛冶屋鑄物師等にて多分祝ひ申候、朝は赤飯にて祝ひ夕は夷講に准じ祝ひ申候。みかん柿など多く貯置子供に與へ申候。

廿三日 大師講粥の事 答おしなべて赤小豆粥をいたし給へ申候。

此月神事、佛事。

一向宗寺々にて御講と唱祖師の供養いたし候、是らは白川の風俗と申にも無之。眞言宗御影供禪家の達磨忌臘八、或は江湖法善家の御命講淨家の天臺の十夜などの類ひにて土地限の事にも無之、京江戸はじめ同様の事哉省略いたし候。

此月をこのみ又此月を嫌ふ事。

城下町其外在中にても油しめの祝と申事いたし候、此日荏の油はじめ其年の秋成の胡麻荏等にてしめ候油の値段を極め申候。飯賣女等の紋日にいたし諸商賈の帳合をいたし、商家にては年中第一の祝日にいたし候。是は白川より中奥邊の風俗の様候へども、白川邊など此祝を大造にいたし候は稀成よしに有之候。

① 冬至に袖ノ實を味噌漬とし、立春の夜に大福茶と共に飲み食ふことは、筆者の郷里である足利市外の農村にも行はれてゐるが、何の意味か判然せぬ。強めて申考すれば、正月元朝に唱ふると云ふ「袖ノ木の下の御祝儀は」の祝言が、こんな民俗になつたのではあるまいか。

② 油しめの祝のこと、是又諸國にあれど元の意味は忘られたやうである。足利邊の農村では十一月十五日に、自作した

菜種を油屋へ持参し油と交換し、その油を用ゐた食物を喰べたものである。今では種菜を作らず油屋も無くなつたが、それでも油氣のある食物だけは攝るやうである。元は油の食事にすることに、何か意味があつたものと思はれる。

③ 飯賣女といへば土娼であるのに、紋日といふは餘りに仰々しい。これは著者の駒井翁が江戸で見聞したことを、そのまゝ記したままで蚤の例ひに象を出したやうなものである。飯賣は食賣、食饒なども書くが、要は旅はたご屋の隠賣女であつて、紋日どころの騒ぎではなく、客勤めの餘暇には農仕事までさせられる境遇であつた。それはともあれ、安永六年八月に東北へ旅行した富田伊之の奥州紀行(南部叢書本)に「十九日、白川へ下るに、左の方、町中に茶店あり暖簾に『出鯛郎、ほていや』と書けり、所の者に水り候得ば、野良茶屋といふ由」とある。白川に陰間茶屋まであらうとは知らなかつた。樂翁侯が行政の振幅に意を用ゐたのも、また故あるかなと云はざるを得ぬのである。

十二月

朔日河ひたり餅の事いか様候哉。

町在共に戸毎に餅をつき祝申候、常に餅を商ひ不申候家にも、此日は多分商ひ申候、城下町にては朝六ツ時前より夜の明候を待城門を開き候、老若のもの共銘々重箱に餅を詰、川ひたり餅／＼とて家中を賣歩行申候、誠におびたゞしき餅賣に御座候。尤家毎に家内の多少に従ひ調候事故賣候事も多く、此日餅を數多く賣候へば來年の商ひは仕合有とて、我一にあらそひ賣申候。明和安永天明の頃までは、あづきに砂糖も和し不申餅に候處、近年は砂糖餅こしらへ、我一と賣歩行申候、川ひたり餅を賣候は、他國に増り可申哉とおもはれ候位の事に候、何等の譯といふ事も不辨銘々も調ひ申事也。

八日 事納めの事、食品いか様、又何段のわざと申傳候哉。

二月の事始とおなじ様の事をいたし、申傳も二月と同じ事にてかはる風俗も無之候。農家にてはあづき飯に大根牛房芋等の煮／＼にて事納とて祝ひ候へども、何段のわざといふも不辨候よし。

煤取につきたる行事候哉。

家中にて多分十五日を煤取の祝日にいたし候へども、是以家により日次を不極吉日をゑらひ祝ひ候も有之候。尤煤竹を來年の惠方に向ひ候より外さしたる行事も無之候、市中にて晝は商ひの妨且は通行の障りに相成候故にや、多分深夜に煤拂申候、是とも煤竹を入候までの事に候。尤拂仕舞候へば神棚へ神酒燈明等備候通例に有之候、農家にて爲異行事も勿論無之、年掃除とて家内を掃除いたし候迄のよしに候。

餅つきに付きたる行事候哉。

爲異行事も無之、家内勸請の諸神の備の鏡、引續先祖代々牌前へ備鏡、夫より家内人別の鏡をとり、今日つき候餅にてしるこ餅(割註。あづきにて煮候餅江戸にても常に申候通)をいたし、家内祝ひ餅つき濟候へば輕き焼物肴に煮しめ等にて祝ひ申候。尤家内勸請の諸神へ神酒等備申候。又餅鏡等をとる候跡にて餅花を御に付祝ひ申候、此餅花を三月雛に供へ候煎豆のあられにいたし候、農家にては多分廿八日に餅つき申候、尤來年祝候鏡餅迄搗備置候、其外異成行事無之候。町方にては廿七八日につき申候、大體行事は同様に御座候。

除夜の行事并食品の事。

家内諸神へ神酒御燈をさし、先祖歴代の牌前へ灯明を備へ祭候事、市中終夜店を張商ひ候。或は年中懸賣を
あつめ歩行など、土地に限りたる事も無之候、町家にては蕎麥饅頭を祝ひ候て、それより明春の佳例式を取そ
ろへ候佳例も多く有之よし、農家にはさしたる行事も不相聞候。

節分大豆まきの事、其外如何様、鬼は外といふ外にも唱事も候哉、いはしの頭橙などさし候哉。此夜まじない事
占候こと候哉、厄拂といふものも候哉。

御問狀の通りにてかはる行事も無之候、尤鬮の頭は豆からにさし門々へさし申候、又鬼木とて割候薪に月の數
棒を横に引門にたて申候、來年閏有候へば十三筋引申候。是は若し土地の風俗に候哉他にも有之哉辨不申候。

豆をまき候には福は内と二度唱鬼は外と一度唱申候、また此咒事占候等は、農家にて來年の月數十二閏有之は十三粒
豆を焼、其焦たるにて來年の晴雨を占心得候よし。

此月神事に神樂の遺風も候哉。

神樂の遺風等は曾て無之候、除夜城下町の家勸請の伊勢御祓、其外年中受候諸神佛の祭禮祈禱の卷數等、或は
古き幣等を鎮守鹿島宮の廣前にて焼拂候、此時太鼓等を打中臣祓等を讀候事に候。

此月佛事に佛名會なども候哉、答曾て無之候。

① 川浸餅を賣り歩くとは珍しい民俗で、他に在ることを耳にせぬ。川浸餅に就いては他の同條で説明する。

② 既述の如く、白川邊では事納めと事始めとを誤解してゐるので、従つて駒井翁も過られたものと見える。

③ 煤竹を煤男または煤梵天と稱し、俗信の對象とする處は、白川以北の羽後平鹿郡にある。こゝでは二本の煤取竿を、
煤男または煤梵天と云ひ保存して、正月の肥曳の上に立て、十五日にはその下で田植の眞似をする（民族二ノ二）。飛ん
で紀州粉河では煤掃に用ゐた藁箒をボテ（梵天）と云ひ、正月十三日まで保存し、翌十四日の火祭料とする（郷土研究
四ノ二）。昔の煤掃は單なる衛生掃除ではなくして、正月の歳徳神を迎へる神事なのであること既述した。

④ 繻を焼くのはカ、セ（喫せ）の義で、これがカ、シ（案山子）となつた事は他の條で説明する考へである。

⑤ 鬼木は鬼打ち木、鬼オサへ木、鬼オドシ木など云ふてゐるが、三州吉田領の條で詳記する。

諸職分につきたる祝日行事の事。

鍛冶の火竹祭などの外承り不申候。

月待日待庚申待甲子待己待の類、打寄て物語し何となき夜食などする通例、何かことなる行事食品も候哉。

月待日待庚申待子待己待の類農家にて村々ごとに打寄、其年の作柄から豊凶に付ての物がたり、農事の仕方子
孫若きもの共教へ導き候。或は農具用不用等いたるまで相互にかたり合候上は、其時の雜談に夜を深し候事の
よし、至而深志なる趣法に有之候。食品は飯に油揚切こんぶ等を用ひ候事のよし、甲子には豆飯を煮豆腐汁を
いたし候通例にて、其夜はさしたる行事も無之候。

婦人着帯何ヶ月行事祝の品等何様に候哉。

五ヶ月にて着帯いたし候、婦人の里方より紅白の岩田帯に、酒肴等相添遣し祝候節里方はじめ近親を請し祝ひ

申候、尤其人の分限に應じ厚薄は有之候へ共右通例也。
産所作法如何様まじなひ事も候哉。

さして作法咒事と申も無之、産所に極候間に安産の守等を置候事のみ、まじなひ等いたし候も有之候へ共、敢て土地の風俗と申にも無之候。農家等にては産臺杯申も無之、藁を四方に結まはし、それを産臺と名付、其内にて出産致させ候。祝ひは七夜に男子は赤飯女子は餅を搗申候、尤すべて七夜は農家にかぎらず祝申候へ共、農家のごとく男女の差別は無之候、七夜の祝は、出生の子に親類知己懇志の方より産着を祝ひ遣し申候、此方よりも赤飯を祝ひ遣し七夜之内預は話候は勿論、近親を招請祝ひ申候、并醫者産婆もまねぎ、今日謝儀等も遣申候風俗に候。

胞衣の納様如何様、まじなひ事も候哉。

胞衣は胞衣桶に入人足しげき處、たとへば臺所の上り口と申様なる處へ埋め申候、外に咒事等は無之候。

子供の祝、三歳五歳七歳など何様の事候哉、又ふかそぎといふ事も候哉。

三歳にて男女の小供髪置を祝ひ申候、男子五歳にて袴着の祝ひいたし候。土地の習にて上下着と唱申候。女子七歳にて紐解の祝ひいたし候、男子九歳にて下帯初の祝ひいたし候。女子十三歳にて鐵漿つけ初の祝ひいたし候。是等はみな江戸のふり合と同様に御座候。農家にてさしたる祝ひもいたし不申候由に御座候、深曾義の祝ひは總ていたし不申候、土地柄にてふかそぎと申事さへしらぬ人多御座候。

男女元服の式如何様

家中にては江戸と同様に御座候、町在にてはあえて式と申程の事も無之候へども、男元服の節は分限に應じ一町内其外親類懇志のものを振舞いたし、元服の日より若い者の仲間に入候事也。女子元服はさして式も無之、祝ひの客など申事も無之よし、在郷にても町方に准じ候事のよし。
年々誕生日のいはひ如何様。

町在共に誕生日には産土神へ神酒を備へ、小豆飯に通例の輕き煮しめなどいたし祝ひ候までに御座候。
結納の行事如何様、品々も鬘斗こんぶ鯛するめ等の外、ことなる物も候哉。

結納は御問狀の通にて分限に應じ、嫁の方へ髻の方より小袖一重帯二筋相添遣申候事に候へ共、多分帯二筋遣候也。嫁の方より髻の方へは麻上下二具に扇子疊紙等相添遣申候へ共、多分麻上下一具遣し扇子疊紙を添申候、婚姻の節右の上下着扇子疊紙を用ひ申候。城下町方にては縁組草結ひ有之、しかと仲人相極め不申内は、たとへ親類にて縁女の方へ參候ても、茶多葉粉盆も一切出し不申、茶にても給へ候へば縁定らずと諺に申傳候。彌縁組取極め候へば、仲立吉日を撰み、縁女の方へ一樽鯛持參して取極め、右持參候一樽をひらき、吸物に着二三種にて祝ひ、其夜のうちに髻の方へ行、彌貫受候旨及挨拶、爰にても又盃を出し、吸物肴二三種祝ひ、其後婚禮の日を撰て結納を遣し申候、其分限に應じ、縁女の方へ小袖一重或は二重、帯一筋包のし包こんぶ鯛一折家内喜樽一荷目錄をそへ遣し、舅夫婦へも分限に應じ祝ひ進物遣し申候。又農家にては身分相應のものは、○

しこんぶ樽肴麻苧反物等遣し候得共、通例は樽肴に支度金として金子何程に帶等差遣し候。すべて奥州筋の風俗にて、縁組には貰受と縁女の方金子何程遣し可申に付、娘貰度と申入、其金談相濟候上彌縁組取極候事哉、多分在郷にては結納には金子を遣候事のよし、是は白川邊にかざらず奥羽下野邊の風俗と相聞え申候。夫ゆへ結納望の方より大造成事に候へども、縁女の方よりは一ト通樽肴のみ遣し候事のよしに候。

婚禮の時行事如何様候哉、送火迎火石打水あぶせなどいふ事も候哉。

藩中の婚儀は江戸表にかはる事も無之、分限に應じ式を略し候迄に有之候、町方にては祝儀座付初饗三寶玄米のし、三寶三ツ組土器蝶花形對銚子尤分限に應じ錫も用ひ候、三寶押〔割註。するめ、敷の子、梅干〕、嶋臺松竹梅〔割註。結びこんぶ、結のし、ほんだはら、若ほんだはら、無之時は時々見合して、目出度ものをもち候〕、初献雜煮

〔割註。花かつほ、餅、結こんぶ、結するめ、青み〕、一献吸物ひれ三献高盛色直し、此時土器引替ぬり盃銚子吸物、其時に應じ目出度となへの肴を用ゆ、取肴三種か五種敷、分限に應じ高盛の祝盃濟、親族縁女へめい／＼盃とりかはせ候。右相濟引續後本膳、但し縁女仲立取持の婦人五七人座附、其外客座敷ありて、吸物二通より七通まで、鉢肴七通鯛のはま焼水のもの一種、是はぜび／＼設替し、いづれも分限に應じ候、後段うんどん、茶菓子、是又分限次第、二日目に掣見参有、献立等當日より丁寧を盡候、三ツ目は赤飯樽肴祝遣し縁女里開き、分限に應じ女客をまねぐ、五ツ目掣の方へ縁女里方より三ツ目答禮同様にしたし遣候、双方の親類を招ぐ、其時持参の酒肴をひらく、其後別段に本膳を饗す、右祝儀之式餘程風俗違ひ候ものに候、又在中農家にては掣取

取共に迎馬差遣し候。先方より親類のもの附添、仲立候もの案内にて参り、此方にも夜に入親類は勿論、村方のもの相集り、取結びの盃いたし候、肴は田作いか川魚の類にて祝ひ申候、尤掣取の節は、双方にて迎火送火麻殻の松明を出し申候、祝ひとて石打等も有之、或は祝儀後掣へ水などかけ申候。三ツ目七ツ目には双方より餅をつき祝遣し申候、是は皆小前の百姓の事にて、分限のものは大體町家のよきもの同様の事に相聞候、婚禮式あとは餘程田舎めきたる事に候。

三ツ目七ツ目、婿入舅入等、何事候哉 答右婚禮の條に記し候。

葬禮の事、土葬火葬其體何様に候哉、子息親類衣服何様に候哉。忌服中いか様に相慎候哉、穢をさけ候祓などする事候哉。

家中にては、江戸のふり合にかはる事無之候、しかし白晝に取置候か通例にて、敢而挑灯等も遣不申候、町方にては葬禮の行列、棺臺てんかひはた八花燈籠八ツ、但し先挑灯二ツ〔割註。是は箱挑灯也〕、假木戸位牌六位〔割註。だんご二組〕、靈膳四花線香しきみ〔割註。葬禮に立候ものめい／＼に持つ〕、尤分限に應じ候土地がらにて多分土葬に候、亡者の遺言等にて火葬にいたし候も有之、一向宗にては火葬多く有之候。在中農家にては死者有之家へ、菩提寺参り讀經相濟次第、其家の前より嫡子は位牌を持、近親類遠縁のものまで佛供佛器等の品々を持、女は棺前に先立候て縁の綱と申木綿を引はへ、是に取付行列いたし、村方は勿論近村までも打寄老人念佛を唱、鉦太鼓にて野邊送りいたし、且那寺引導相濟次第墓所へ葬申候。土葬は棺共埋申候。火葬は藁薪等にて

焼、骨を拾ひ瓶に入候て埋申候。衣服は農人故木綿服にて、子息近親は上下也。遠縁は袴羽織に葬禮の供いたし候。前に町方の葬禮の處に認落し候。町方にても葬式の節、嫡子は位牌を持、近親様々の順に靈供佛具等を持、行列に立候は在中同様有之候。服忌は町在中共に一七日相慎申候迄に御座候。是は令の通服忌受候ては家業におくれ候故にも可有之哉。七日済候へば町人は店を開き商ひはじめ申候。農家にては山田畑の稼にかゝり申候。尤葬式相濟候跡にて、修驗をたのみ穢を拂ひ、幣を切差置候を幣を門に立候也。

七々日の法事は通例、此外に殊成祭供養等候哉。一周忌三年忌七年忌十三年十七年と、三七を次第して五十年にいたり、五十年百年百五十年と、五十年を隔て遠忌をとふ事通例、此外も候哉。

藩内にては御問狀の通、敢而かはりたる法事等無之、兩親其外厚く供養いたし候は施餓鬼などいたし候も有之候。町方にては一七日五七日七々日敷の内、佛事の客を寺へ住せ、寺にて非時を振廻申候。四十九日の餅を佛前に備、其節不幸の切備物等に預り候方へ餅を配り候。其外は御問狀通り遠忌まで吊ひ申候。其間共一年忌を訪ふも有之候由、在中農家にては七々四十九日より百ヶ日迄供養いたし、夫より一周忌三年七年十三年卅三年忌までにて、其外祭供養いたし不申候。尤分限のものは世間並の通五十年以上遠忌も吊ひ申候。

老人祝の事、四十より十年ごとに賀するは通例、此外に六十一八十八猶外にも祝ひ候事哉。凡行事如何様候哉。町在中共年祝ひいたし候は、男子は廿五より四十二八十八、女子は十九より三十三八十八の厄年の外、祝ひ不申候へども、八十に成り候へば分限相應のものは祝ひ候。是よりも上々たら候分限のものは四十二を祝候て、

夫より五十六十を十ヶ年目に祝ひ賀し申候。外に替る事も無之候。

寺社人家棟上の事、大工のする作法は諸國同様か、所につきたる行事も候哉。

大工のする作法等爲異行事も無之候。棟上には扇三本葎備餅三節神酒等備へ、まき餅三百三十三（割註。是は分限に應じ、三千三百三等まき候も有之）、右を備へ、棟梁中臣祓を讀唱事等いたし、右済候て餅并錢（割註。是も餅に同じ敷なり）を、時申候を争ひ拾取申候。左程の事にて外にかはりたる事は無之候。わたましの事。

移徒14)の祝ひは神酒等備候は勿論、小豆粥をいたし向三軒兩隣等へわたまし粥とて送り申候。町在中にては新宅出來候時は、親類其外村方よりも、米或は餅等を祝ひ遣候故、移徒には餅赤飯等、或は酒肴杯出し振舞申候。蝗風をさくるまじなひの事。

蝗をさくるには水口に鯨の油を少しさし候へ共、蛇と土地のならばしと申ほども無之、其外色々咒事等も有之由に候へども、土地限の事とも不聞に付省略いたし候。餘國の様には鉦太鼓松明等にて稻虫送り等の事は無之候。強風の節は大勢聲をあげ風を送り候事も有之候へ共、稻作に厭ひ候はかりにも無之、専市中にいたし候事に候、是を風追と唱申候。15)

疫病除の事。

疫病有之、村方にては寺院相頼大般若轉讀等いたし、或は疫神送りとて禰宜山伏等相頼祈禱いたし、薬にて人

形あるひは鑓薙刀太刀等の類を拵へ、農人大勢集り向ふに人家無之方の村境まで送り申候。旅立の時何かするわざも候哉。

一ト通の旅立にはさしたる事も無之候へ共、町方にて伊勢参宮のいたし候へば、一町内切祝ひ雉子一掛御樽一荷青銅何程〔割註。是は町内軒敷の多少に従ひ、集錢之多數有之事のよし〕、但し他家を借て送別の式、座附三組盃銚子看五種品婚禮にひとし、吸物にてめい／＼送別盃取かはせ候、肴一種は三賣にまめくるみ梅干積ませ申候也。然して参詣のもの出立の條、跡ふきとて青銅何程まし一羽樽一荷、並に宿元より町内送別の處へ重詰體肴遣し申候、扱出立候へば堺明神〔割註。白川より二里餘白坂驛より八丁〕、まで見送りへ、参宮いたし候ものゝ宿より、めい／＼赤飯重詰樽肴等明神の宿まで遣し、送別祝の盃を出す。此節花馬と唱て参宮人一人一疋ツツ宿馬を出す也、又在中にては伊勢参宮其外所々参詣いたし候節は、社人修驗等参り、祈念の上幣をきり祓清め勿論、村内は不申及近村よりも饒別いたし、送り酒と唱て、村方大勢にて一二里もおくり候て酒を給あひ別れ候、前文町方に類し候へとも、農家ゆゑ事輕くいたし候まで也。

茶ぶるまひ、風呂振舞といふ事候哉、其體如何、諸社の祠官禰宜神社といふは通例、其外何といふ職候哉、其職掌をも可被注下候。田樂幸若等の古風傳來候哉、其外何等の謠舞候哉、今様しをり萩やうの古風の謠傳來候哉。乞食×多諸國に有之、此外サ、ラ摺茶筌作院内梓巫の類、異なる職分の者有之候哉、大神いつなの類何事か候哉。右七ヶ條は敢而かはりたる事無之、茶振舞風呂振舞様の事は曾而無之候。

右御問狀の外市中子供遊に

草履かぞへ唄

ぞうりけんじよ／＼。おてんじよ櫻／＼。ものよしこよし。一げしよ二げしよ。三げしよ四げしよ。七方か
八方かはりまのはやし。小池のちどり。松屋の花。ひらいたか。つほんだか。おなんさかさ。おてんてん
くるまにおほらほらほとさ。

此歌の句切々々にかぞへ、ひとり残りしもの鬼と成て、草履を尋る遊び也。

又是は草履かぞへとは別也

子賣ふ／＼。子買ふ／＼。子に何しんじよ。砂糖にまんぢう。それはむしの大毒。とま／＼しんじよ。とま
には骨がある。箸は何ばし。柳ばし。折ばし。そふならやろふか。どの子にしよ。

ひとり残りしもの行燈賣あほうになる、但し東西とわかれ五人位より十人くらいまで也。

右ふたつの遊びは、男女の子供打交り、いかなる事にや八九月の遊びなり、故に秋遊びといふ。又夏の遊びに

竹の子ぬき

子供十人にて何人にて何人も帯結めにとりつき其取付たるものゝ帯に又取付々々て

びんこだんこ。正直しよかい。おほこにしよ。しやん／＼ととりつけよ。

一人残りしものいち跡の帯のうしろに取付、ちからまかせに引て打ころび／＼するを笑の種となす。

杭打遊び、是は九月半より十月頃までの遊び也。

男子十四五位の子供、尺二三寸より二尺くらいまでの杭を拵へ土へ打込せ、又其杭へ打あてゝ寝たる杭を負とす、相撲の勝負のごとし。方言にて打負せたるをいかしたといふ、又杭をねんろうといふ邊鄙の方言也。

又天氣の晴雨を占ふに

あすは照るか降るかといひて、はきたる草履を片々づゝなげあげる。落て伏たるを降り仰ぎたるを照りといひて占ひ遊ぶなり。

右子供遊びは土地の風俗歟と被存候間、記し御目につけ候御一笑々々。

右諸國風俗は編集之節御答被下候人々の御名をも書加へ申候間御答書の末に國郡郷町御苗字俗名實名姓戸まで委細に御記し可被下候也

屋代 太郎 源 弘 賢

右屋代弘賢より頼候趣にて月堂よりぬもころに頼み越有之に付御城下天神町魯駟俗名あら物須賀川町安藤辰三郎柄目村内山官左衛門北平山熊田伊右衛門上小屋村内山忠左衛門等へ相尋候而右之答申遺候反古にさへもほいなければ爰に記し畢

駕 宿 答 書

① 「話は庚申の晩」と云はれて居るやうに、此の夜は語り明かすのを常とし。また此の夜に夫婦同床すると「泥棒の子が出来る」など云ふてゐるが、往昔の實際は全く此の反對であつて、庚申の夜は男女ともに性的に解放され、甚だしき亂婚が行はれるのである。それが後世になり其の弊害に耐えられぬ爲に、夜を語り明かせとか、泥棒の子が出来るとか宣傳して、風紀の維持に努めたのである（日本民俗學辭典）。庚申待の通説に就いては他の條で述べ、子待巳待に關しては周知のこととして略す。

〔参 考 文 献〕

庚申待と庚申塔

（三輪善之助）

不二書房本

- ② 産室を築や俵で整へる習俗は諸方にある。一二を擧げると、東京市外の保谷村では産室の疊をとり、藁と俵を敷き用意する。これに使用する藁は廿一束で、一七夜にその藁を七束づゝ減らし、横臥するにも藁を枕とする。肥前五島岐宿村では、出産の折には親二俵を置き、産婦はその間に坐つて分娩する。難産の場合は天井から太い綱を下げ、産婦はそれに纏つて分娩する。能登鹿島郡で産室の事をコヤワラと云ふのは、小屋藁から轉じたものであらう（以上、旅と傳説産育號）。俚諺に「藁の上から子を育て」と云ふのは、蓋し此の事である。
- ③ 下帯祝ひ、關東ではふんどし祝ひ、九州ではヘコカキ祝ひと云ひ、共に母方の伯母から布を贈ることになつて居た。即ち我國では子に對し實母は肉體を與へ、伯母は生命を授けると云ふ信仰があつた爲である。猶ほ他の機會に補説する。
- ④ 往古の鐵葉つけは成女の標識である。換言すれば妻たり母たるの資格の具つたことの公示手段である。鐵葉が有夫の標識となつたのは後世のことである。
- ⑤ 元服してから若者組に入るのが古俗だが、後には若者入を以て元服とするやうになり、時と處により種々なる派生を見るやうになつた。此の若者組が現今の青年團の母胎となつたのである。

〔参 考 文 献〕

日本若者史

（中山太郎）

春陽堂本

奥州白川風俗問答